

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4

昭和62年度発掘調査報告

昭和63年3月

鎌倉市教育委員会

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4

昭和62年度発掘調査報告

昭和63年3月

鎌倉市教育委員会



1. 若宮大路周辺遺跡群  
雪ノ下一丁目273番地地点下層面西半部全景(東から)



2. 同上梅花天目出土状況



3. 若宮大路周辺遺跡群  
由比ヶ浜一丁目128番7地点全景(南から)



4. 長谷小路周辺遺跡  
長谷一丁目284番1他地点1号井戸

# 序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 尾崎 實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相いついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規模な工事も多くなってきました。そのため、工事に先だって発掘調査を実施する件数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにして來ました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務であります、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮てめて行って頂きたいと思います。

本書は昭和62年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼を申し上げます。

## 例　言

1. 本書は昭和61年度及び62年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかる発掘調査報告書である。
2. 本書所収の調査地点等は別表のとおりである。
3. 発掘調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。
4. 出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。
5. 各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

## 目 次

序 文.....	( i )
例 言.....	( ii )
目 次.....	( iii )
62年度調査の概観.....	( 1 )
1. 北条時房・源時邸跡.....	( 9 )
例言.....	( 10 )
本文目次.....	( 11 )
挿図・図版目次.....	( 12 )
第一章 調査地点及び歴史的環境.....	( 13 )
第二章 調査の経過.....	( 15 )
第三章 検出された遺構.....	( 19 )
第四章 出土した遺物.....	( 33 )
第五章 まとめ.....	( 57 )
図版.....	( 61 )
2. 若宮大路周辺遺跡群.....	( 77 )
例言.....	( 78 )
本文・挿図目次.....	( 79 )
第一章 調査地点の位置と環境.....	( 81 )
第二章 調査の概要と経過.....	( 84 )
第三章 遺構と遺物.....	( 86 )
第四章 まとめ.....	( 111 )
図版.....	( 113 )
3. 妙本寺遺跡.....	( 125 )
例言.....	( 126 )
第一章 遺跡の位置及び歴史的環境.....	( 127 )
第二章 検出した遺構.....	( 128 )
第三章 出土した遺物.....	( 129 )
第四章 まとめ.....	( 134 )
図版.....	( 135 )

4. 玉繩城跡	(141)
例言	(142)
第一章 玉繩城跡の地理的・歴史的環境	(143)
第二章 調査地点の概況及び調査概要	(147)
第三章 検出遺構	(152)
第四章 出土遺物	(157)
まとめ	(158)
図版	(161)
5. 長谷小路周辺遺跡	(169)
例言	(170)
第一章 調査地点と歴史的環境	(171)
第二章 調査の経過	(174)
第三章 発見された遺構と遺物	(175)
第四章 まとめ	(188)
図版	(189)
6. 台山遺跡	(201)
例言	(202)
第一章 遺跡の位置及び歴史的環境	(204)
第二章 調査の経過	(205)
第三章 発見された遺構と遺物	(207)
第四章 まとめ	(211)
図版	(213)

## 62年度調査の概観

昭和62年度に実施された緊急発掘調査は9件で、対象面積は1257m<sup>2</sup>であった。前年度と比較すると、件数で2倍強、面積で約2.3倍となる。また、その他の事業者負担による発掘調査を含めると、全体の調査件数は30件にも上り60年度からの増加傾向に変化はなく、63年度以降も同様と思われる。これについては様々な要因が考えられるが最も大きな理由として、昨今の地価情勢を反映し最大限の土地の有効利用を図る傾向が定着したことが挙げられよう。61年度の調査例をみても、自己専用住宅の高層化や地下利用、或は店舗併用等の多目的化など、新たな土地活用の傾向が顕著に見受けられる。従って、今後はこのような動向に即した有効な対応方法の策定が急務であろう。

次に各調査の実施に至る経過等を、順次記す。

### 1. 妙本寺遺跡（大町一丁目1158番1地点）

日蓮宗長興山妙本寺の旧境内域と目される比企谷を中心とする区域内の、鎌倉市大町一丁目1158番1に所在する。

昭和61年11月、建築確認申請に伴う個人専用住宅建設に係わる相談があった。当該地は妙本寺から常榮寺、八雲神社にかけて南北に走行する旧道の東側にあり、道路から約170cm程高まった所に位置する。建物本体の基礎工事掘削深度は30cm～40cm程度で埋蔵文化財に対する特段の影響は無いものと判断されたが、車庫予定地については道路面と同一レベルまで掘下げる計画であるため、当該部分の試掘調査を実施することとした。

同調査は11月9日と10日に行われ、掘削範囲内に遺構等が検出されたため設計変更要請を含めた協議を重ねたが、事業計画の変更は困難と判明した。このため県教育委員会と協議したところ、個人専用住宅の建築に起因する行為であるので国庫補助事業発掘調査として実施する方向で対応するようにとの指導を得た。

12月5日、事業者との協議の結果、次の諸点で合意に達した。

- (1) 車庫予定地の鎌倉市教育委員会による国庫補助事業発掘調査の実施。
- (2) 61年度の調査実施は予算執行上困難であるので、翌年度の早い時期に着手する。
- (3) 事業者は当初の工程を変更して本体工事を先行し、車庫については調査終了後に施工する。
- (4) 調査に際しては、表土掘削及び搬出等の土木作業を事業者が行う。

昭和62年4月6日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、これに対し4月17日付けで県教育長から発掘調査の実施を旨とする通知書が送付された。

以上の経過を経て細部に亘る協議を整えた後、62年4月22日から5月14日にかけて調査が実施されたものである。

## 2. 玉縄城跡（城廻字中村654番1他地点）

永正九年（1512）北条早雲により築造された、典型的な戦国期の山城である玉縄城跡の城内、鎌倉市玉縄字中村654番1他に所在する。

昭和61年9月17日、個人専用住宅建設計画を内容とした開発行為に伴う事前相談があった。当該計画には宅地造成による大幅な地形変更が予定されているため、試掘調査を経た上で協議を継続することとした。

10月2日～4日に実施された試掘調査によって、山腹部に曲輪等の山城造構の存在が確認された。調査結果に基づき設計変更要請を含めた協議を重ねたが、事業計画の変更は困難であることが判明した。このため、県教育委員会と対応策を協議したところ、個人専用住宅建設に係わる行為であるので国庫補助事業発掘調査を実施すべきであるが、その時期については予算執行上62年度に着手するのが望ましいとの指導を得た。

11月19日、開発行為に伴う各課協議に於いて上記の内容を伝えるが、事業者側から調査経費が自己負担であっても年度内の早い時期に調査を実施し、直ちに工事に着手したい旨の意思が表明された。その後数度の協議を経過した後、昭和62年1月13日に文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、2月3日付けで県教育長から事前発掘調査の実施を旨とする通知書が送付された。これにもとづき、事業者の全面的な協力の下に市教育委員会による発掘調査を3月に実施することで一旦は協議が整ったが、開発許可期日の関係で着手日が延伸し、改めて62年4月に国庫補助事業として行うことになったのである。そして細部の問題点を調整した後、4月27日から5月19日にかけて調査が実施された。

## 3. 若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目12番18地点）

若宮大路を中心とした区域を占める遺跡群の中で、大路東側の鎌倉市小町二丁目12番18に所在する遺跡である。

昭和61年12月、点舗ビル建築計画に伴う事前相談があり、周辺の状況等から推して設計内容によつては事前の発掘調査が必要であることを説明する。翌62年2月、事業の基本計画が提示され、自己用店舗の他賃貸事務所を伴う鉄筋三階建（一部地下）ビルであることが判明した。このため県教育委員会と取り扱い方法について検討を重ねると共に、試掘調査を実施し遺構等の状況を把握することとした。そして3月17・18に行われた試掘の結果、遺構は良好に遺存された事業計画の変更是困難であることも判明したため、事前調査の実施が不可避であることが改めて確認されたのである。これらの経過等を踏まえ直ちに県と協議したところ、自己用店舗を主とする事業であり国庫補助事業調査としての実施を基本とするが、賃貸事務所が含まれている点を鑑み事業者に対し相応の協力を求めることが指導を得た。

- 3月27日、県の指導内容に沿って事業者との協議を行い次の諸点で合意した。
- (1) 調査は国庫補助事業調査として鎌倉市教育委員会が実施する。
  - (2) 事業者の協力内容は作業員賃金の負担及び現場事務所と光热水施設の提供、並びに表土掘削と残土搬出工事の実施等とする。
  - (3) 調査期間は昭和62年5月下旬から40日間とする。
  - (4) 杭打工事は立地及び工法上の制約で調査に先立ち実施せざるを得ないが、当該箇所については先行調査を行うこととする。

4月2日、文化財保護法第57条の2による届出が提出され、4月11日付けで県教育長から調査実施を旨とする通知書が送付された。以上の経過を経て4月22日から7月10日にかけて、先行調査を含めた発掘調査が実施されたものである。

#### 4. 長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目194番25他地点）

大町大路の名残とされる国道134号線の内、長谷寺から六地蔵に至る道筋が長谷小路と推定され、その周辺に所在する遺跡内の由比ヶ浜三丁目194番25他に位置する。

昭和62年3月9日店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、当該地の試掘調査を実施の上協議を進めることとした。3月12日から16日にかけて行った試掘の結果、提示された計画内容では事前発掘調査の実施が不可避であることが判明したため、設計変更を含めた対応措置の検討を依頼する。これに対し3月25日に事業者から現計画案で施工したい旨の回答を得たため、直ちに本調査実施を前提とした協議を開始した。そして5月14日に文化財保護法第57条の2に係わる届出が提出され、対応方法を県教育委員会と検討した結果専用住宅部分の面積分を対象にして国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。これを受けて6月5日、事業者との協議を行い建築予定地面積の内、専用住宅部分の60m<sup>2</sup>を国庫補助事業調査の該当地とし、残余の敷地を事業者による調査対象地することで合意に達した。6月17日付けで県教育長名による通知文が送付され、統いて昭和62年7月13日から8月31日にかけて発掘調査が実施されたものである。

#### 5. 今小路西遺跡（扇ガ谷一丁目131番1地点）

若宮大路に平行する今小路の西側一帯に広がる遺跡の内、扇ガ谷一丁目131番1に所在する。

昭和62年6月15日、店舗併用住宅建設に関わる事前相談があり直ちに試掘調査を実施することとした。6月29・30日に行われた試掘調査の結果、掘削予定深度の範囲内に遺構等の存在が確認されたため事業計画の設計変更を依頼したが、現計画案で施工したいとの意向が表明されたので、直ちに事前調査の実施を前提とした協議を開始した。7月6日県教育委員会と事業計画及び試掘結果等にもとづいて協議したところ、調査については国庫補助事業発掘調査として対応すべきとの指導を

得た。同日、事業者側とも協議し表土掘削及び残土搬出、給排水施設の提供等の協力の下に国庫補助事業発掘調査を実施することで合意に達した。また、文化財保護法第57条の2による届出も提出される。続いて7月10日付けで県教育長から調査実施を旨とする通知文が送付され、7月12日から8月14日にかけて調査が行われた。

## 6. 長谷小路周辺遺跡（長谷一丁目284番1他地点）

長谷小路周辺遺跡の北西端、高徳院南側の長谷一丁目284番1に所在する。

昭和62年4月15日店舗併用住宅建設の確認申請に伴う事前相談があり、鉄筋3階建の計画であるので試掘調査を経た上で協議を進めることとした。5月18・19日に実施した試掘調査によって遺構等に影響があることが確認されたため、設計変更を依頼したが事業計画の変更が困難であることが判明した。これにより5月26日に事前調査を前提とした協議を行い5月29日に文化財保護法第57条の2による届出が提出される。同時に県教育委員会から自己用住宅部分に関しては国庫補助事業発掘調査を実施し、貸店舗部分については事業者による相応の協力の下に調査するようにとの指導を得た。

6月17日、事前発掘調査の実施を旨とする県教育長名の通知書が送付された。これを受け直ちに県の指導にもとづく協議を行い、事業者による作業員の派遣等の協力を得て鎌倉市教育委員会による調査を実施することで合意に達した。

以上の経過を経た上で、昭和62年8月14日から9月9日にかけて調査が行われたのである。

## 7. 台山遺跡（台字西ノ台1730番1他地点）

鎌倉市内で最も先史時代遺跡が豊富な地域の一つである台山遺跡のほぼ中央域、台字西ノ台1730番1他に所在する。

昭和62年7月1日、開発行為（社宅建設）に伴う事前相談があり、開発協議会等の推移をみて然るべき時期に試掘調査を実施し協議を進めることとした。そして9月16日に調査が行われ弥生時代を中心とする遺構等を検出し、事前調査の実施が不可避であることが確認された。また、事業者が個人に変更されたため県教育委員会の指導により、今後は国庫補助事業発掘調査を前提として協議を進めることとした。9月18日に文化財保護法第57条の2に基づく届出書が提出され、その事業計画内容を検討した結果、調査は掘削により地下遺構に影響が及ぶし型コンクリート擁壁部分を対象として実施することで協議が整った。以上の諸経過を経て10月22日から10月28日にかけて調査が実施されたのである。

## 8. 若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目39番6他地点）

通称小町通りの西側、小町二丁目39番6他に所在する。

昭和62年2月、自己用住宅に係わる建築確認申請にもとづく事前相談があり、鉄筋コンクリート造で杭打ち工法計画であることから試掘調査を実施し協議を進めたとした。3月3日～3月5日に行った試掘調査によって中世造構が良好な状態で検出されたため設計変更を依頼したが、事業計画の変更が困難であることが判明し事前調査の必要性が確認された。この経過を踏まえて行った県教育委員会との協議により、専用住宅計画に鑑みて国庫補助事業発掘調査として実施すべきとの指導を得た。3月10日、事業者と協議の結果、調査開始を6月中旬頃として準備を進めることとしたが、建築計画工程の変更等の事由により実施予定日を延期せざるを得なかった。8月7日、建築計画内容がほぼ確定したため文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、併せて具体的な調査実施方法についての協議を再開した。統いて8月31日付けで県教育長から調査実施を旨とする通知書が送付される。10月22日、事業者との打合せにより、杭打ち箇所を先行して調査し杭工事終了後に改めて本格的発掘調査を実施することで協議が整う。以上の諸経過を踏まえた上で11月16日からの先行調査を経て、昭和63年1月14日から2月20日かけて発掘調査が行われたのである。

## 9. 明月院旧境内遺跡（山ノ内字東管領屋敷明月谷187番6地点）

臨済宗明月院の旧境内域の、山ノ内字東管領屋敷明月谷187番6に所在する。

昭和62年11月26日、自己用住宅建築計画に係わる事前相談があり、掘削深度数値に鑑みて試掘調査が必要であることを説明する。その実施方法として、既に着手している建物背面山腹部の防災工事と並行して事業者側で行うこととした。12月18日、防災工事に用いられている重機を使用し試掘調査を実施する。その結果、16世紀～17世紀代の削平岩盤遺構等が検出され、当該部分が車庫用地として設計変更が不可能なことから事前調査の必要性が確認された。12月28日、文化財保護法第57条の2による届出書が提出された。この過程で、早急に工事に着手せざるを得ない事業者の諸事情が判明したため、県教育委員会と協議したところ、専用住宅に鑑み緊急に国庫補助発掘調査を実施も止むなしとの指導を得た。これを受けて直ちに準備を整え調査を実施することで、事業者と合意し、昭和63年1月4日から1月9日にかけて発掘調査を実施したものである。

本書所取の昭和61年度調査地点

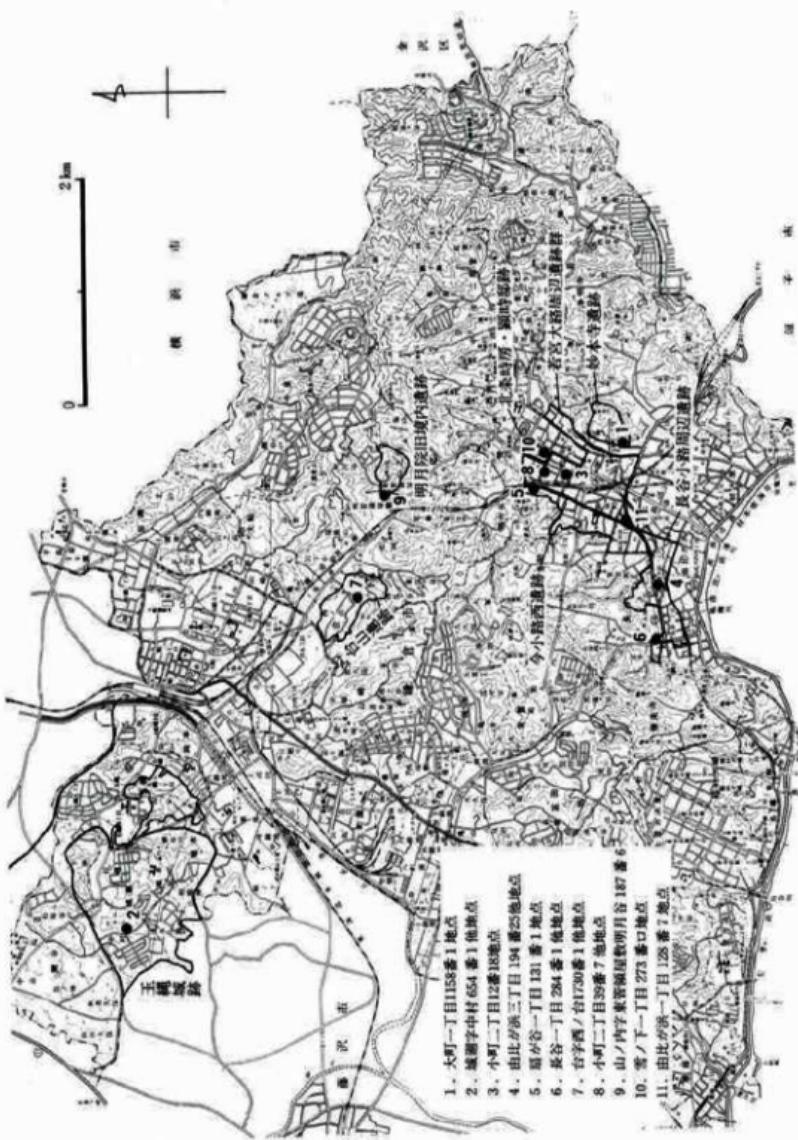
No	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	現地調査期間
1	北条時房・顯時邸跡 (No278)	雪ノ下一丁目 273番口	鈴木 忠一	店舗併用住宅	館	200m <sup>2</sup>	61.5.20～ 61.7.21
2	若宮大路周辺 遺跡群 (No242)	由比ヶ浜一丁 目128番7	鬼頭 貞夫 他	店舗併用住宅	都市	100m <sup>2</sup>	61.7.17～ 61.8.30

## 昭和62年度調査地点一覧

(\*印は木書所取遺跡)

No	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	現地調査期間
*1	妙本寺遺跡 (No232)	大町一丁目 1158番1	石岡 忠広	専用住宅	寺院	50m <sup>2</sup>	62.4.22～ 62.5.14
*2	玉繩城跡 (No63)	城廻字中村 654番1他	渡辺 清	専用住宅	城	500m <sup>2</sup>	62.4.27～ 62.5.19
3	若宮大路周辺 遺跡群 (No242)	小町二丁目12 番18	石井 清	自己用店舗	都市	130m <sup>2</sup>	62.4.22～ 62.7.10
4	長谷小路周辺 遺跡 (No236)	由比ヶ浜三丁 目194番25他	秋山 茂	店舗併用住宅	都市	60m <sup>2</sup>	62.7.13～ 62.8.31
5	今小路西遺跡 (No201)	扇ガ谷一丁目 131番1	錦 妙子	店舗併用住宅	都市	87m <sup>2</sup>	62.7.12～ 62.8.14
*6	長谷小路周辺 遺跡 (No236)	長谷一丁目 284番1他	小林 哲雄	店舗併用住宅	都市	150m <sup>2</sup>	62.8.14～ 62.9.9
*7	台山遺跡 (No29)	台1730番1他	栗田口次雄	専用住宅	集落	50m <sup>2</sup>	62.10.22～ 62.10.28
8	若宮大路周辺 遺跡群 (No242)	小町二丁目39 番6他	上条 源	専用住宅	都市	130m <sup>2</sup>	62.11.16～ 63.2.20
9	明月院旧境内 遺跡 (No139)	山ノ内字東管 領屋敷明月谷 187番6	中川 明男	専用住宅	寺院	100m <sup>2</sup>	63.1.4～ 63.1.9

調査実施件数 9件 総対象面積1257m<sup>2</sup>



1. 北条時房・顯時邸跡

雪ノ下一丁目273番口地点

## 例　言

1 本報は鎌倉市雪ノ下一丁目273番口に所在する賴岡旅館新築に伴う発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、昭和61年5月20日から同年7月21日にかけて実施した。なお、同調査は北条時房・顯時邸跡発掘調査団による発掘調査と併行して行なわれたものである。

3 本報の執筆に際しては、前括調査団主任調査員原 廣志の協力を受け、第1・2・3章、第4章(2)・(3)・(7)を原 廣志が、第4章(1)・(4)を福田 誠が、第4章(5)・(6)を佐藤 泉があたった。第5章は執筆者の討議のもと原が文責を負った。図版作成は原・福田・佐藤があたり原がこれを編集した。

4 写真撮影は遺構写真を調査員が、遺物写真は木村美代治が行なった。

5 発掘調査及び本報の作成にあたり下記の方々より貴重な御教示を賜わった。記して深く感謝の意を表する次第である。(敬称略・順不同)

三上次男(故人)・貫 達人・吉田章一郎・大三輪龍彦・石井 遼・中野政樹・三浦勝男・鈴木亘・馬 先銘・江崎 武・手塚直樹・河野真知郎・斎木秀雄・宮田 真・馬淵和雄・大河内勉・田代郁夫・王林美男・永井正憲

6 調査体制は以下の通りである。

調査担当者 松尾宣方

調査員 原 廣志・福田 誠・木村美代治・田代郁夫

調査補助員 潤田哲夫・佐藤 泉・新国哲也・及川加代子・高田静子・小林 康幸

## 本 文 目 次

第一章 調査地点及び歴史的環境.....	(13)
第二章 調査の経過.....	(15)
第三章 検出された遺構	
1 上層遺構.....	(19)
2 下層遺構.....	(26)
第四章 出土した遺物	
1 船載陶磁器.....	(33)
2 国産陶器.....	(37)
3 土器及び土製品.....	(40)
4 金属製品.....	(47)
5 石・骨製品.....	(50)
6 漆・木製品.....	(52)
7 その他の遺物.....	(54)
第五章 まとめ.....	(57)

## 挿図目次

図1 若宮大路周辺の主な発掘調査地点	(14)	図17 中世以前の遺構	(32)
図2 調査地点位置図	(15)	図18 舶載陶磁器(1)	(34)
図3 グリッド配置図	(16)	図19 舶載陶磁器(2)	(36)
図4 上層遺構全図	折り込み	図20 捏鉢・山茶碗・山皿	(38)
図5 建物1	(19)	図21 常滑・渥美	(39)
図6 建物2	(20)	図22 常滑窓口壺	(40)
図7 南北溝I	(22)	図23 瓦質製品・白かわらけ他	(42)
図8 南北溝II・検出状況及び掘り方	(24)	図24 かわらけ(1)	(43)
図9 南北溝I・II復原模式図	(23)	図25 かわらけ(2)	(44)
図10 土壌1	(25)	図26 かわらけ(3)	(46)
図11 下層遺構全図	折り込み	図27 金属製品	(47)
図12 建物3	(26)	図28 出土古錢拓影	(48)
図13 建物4	(29)	図29 石製品・骨貝製品	(51)
図14 井戸	(30)	図30 漆器・木製品	(53)
図15 井戸状遺構	(31)	図31 墨書き木製品	(55)
図16 囲炉裏	(32)	図32 調査地点付近の溝検出例	(59)

## 図版目次

図版1-1・2上層遺構全景	図版9-舶載陶磁器
図版2-1・2・3建物2・4梅花天目出土状況	図版10-国産陶器・土器
図版3-1~4南北溝I・5・6遺物出土状況	図版11-かわらけ(1)
図版4-1・2南北溝II及び柱穴列	図版12-かわらけ(2)
図版5-1~4南北溝II・5遺物出土状況	図版13-石製品・骨貝製品
図版6-1下層遺構全景・2東西溝II	図版14-漆器
図版7-1圍炉裏・2・3井戸状遺構・4斗供	図版15-1~5その他の遺物
図版8-1~3東西溝II・4中世以前の遺構	

## 第一章 調査地点及び歴史的環境

鎌倉の街の中央には、鶴岡八幡宮から海に向かって一直線に延びる若宮大路がある。若宮大路は、治承4年（1180）に源頼朝が鎌倉に入府して改修を始めた鎌倉の重要な街路の一つであり、寿永元年（1182）には妻政子の安産祈願のために、大路の中央部に「段葛」を築いている。調査地点は、若宮大路北端の西側に位置し、「北条時房・頼時邸跡」と推定される一角に所在する。「北条時房・頼時邸跡」は北を横大路、東を若宮大路に接する東西約110m、南北220mの長方形の区画にあたる。北条執権宗家の「北条泰時・時頼邸跡」又は「若宮大路幕府跡」ともいわれる場所と若宮大路を挟んで向かい合った位置にあたり、中世当時の枢要な区域であったことは疑いない。

調査地点はこのような場所の一角を占めている。この付近で、若宮大路沿いの西側を本格的に発掘調査するのは本調査が最初であった。その後、本地点より約20mほど南側の大路沿いの一角が発掘調査（図1-2地点）されており、ここからも本地点で検出された大路西側の側溝の続きが確認されている。また若宮大路を挟んだ東側「北条泰時・時頼邸跡」と考えられる大路沿いの発掘調査は数箇所で行なわれており、図1-5・6地点では若宮大路東側の側溝と考えられる南北溝が確認<sup>註1</sup>されている。さらに本地点の所在する「北条時房・頼時邸跡」のいくつかの発掘調査の内で、図1-4地点では大路側溝と似た構造を有する南北溝が検出されている。<sup>註2</sup>これらの調査成果は若宮大路の様相を知る手掛かりであると共に、鎌倉の街割りを復元して行く上で今後重要な課題となる。

北条時房・頼時についての概略を以下に記すことにする。北条時房は前名を時連といい、後に連署・相模守に任せられる。父は時政で、義時の弟である。安元元年（1175）出生して、仁治元年（1204）に66歳で死去した。文治五年（1189）の奥州征伐、元久二年（1205）の畠山重忠追討、建保元年（1213）の和田合戦にも参加している。承久の乱（1221）に際し東海道軍の将として上洛して、後に南六波羅探題となり、甥の執権泰時を扶けて連署となっている。

北条頼時は引付衆・評定衆などの要職を務めた。父は金沢氏を名のった実時である。弘安八年（1285）年の霜月騒動では安達泰盛を岳父とするために縁座として、下総の埴生庄に幽閉された。その後出家して父の偉業を継ぎ、武藏国六浦莊金沢郷の称名寺を整備し、一層文庫（金沢文庫）<sup>註3</sup>の内容を充実させた。

### 註

1 馬淵和雄「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点発掘調査報告書」同発掘調査団、鎌倉市教育委員会1985、馬淵和雄「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目372番7」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会1985

2 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目233番9他地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3 昭和61年



1. 雪ノ下一丁目 273番-口地点道路 (調査地点)  
 2. 雪ノ下一丁目 274番-2地点道路  
 3. 雪ノ下一丁目 271番-1地点道路  
 4. 雪ノ下一丁目 233番-9地点道路  
 5. 雪ノ下一丁目 371番-1地点道路  
 6. 雪ノ下一丁目 372番-7地点道路  
 7. 雪ノ下一丁目 374番-2地点道路  
 8. 雪ノ下一丁目 419番-3地点道路  
 9. 二ノ鳥居西道路  
 10. 小町二丁目65番-21地点道路 (松秀ビル用地)  
 11. 小町一丁目 116番地点道路

図1 若宮大路周辺の主な発掘調査地点

- 3 白井永二編「鎌倉辞典」東京堂出版1976及び貴達人「北条氏亭址考」「金沢文庫研究紀要」第8号1971  
年3月  
4 註3「鎌倉辞典」

## 第二章 調査の経過

本遺跡に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会による試掘調査を経て実施した。市の試掘調査結果をもとに、本調査は昭和61年5月20日より擾乱土層を含めた表土に重機で掘削し、以下手掘りで遺構検出の調査にはいり、同年7月21日に現地調査を終了した。調査にあたって、敷地内を4m×4mの大きさのグリッドで分割した。グリッドは若宮大路の中央ライン（南北線）を基本として設定した。敷地の北西隅から東へアルファベット（A～G）、南へアラビア数字（1～5）を附した。グリッドの名称は各グリッドの北西隅の交点杭の名称を使用した。グリッド南北軸はN-32°50'-Eである。調査対象面積は建築にかかる約400m<sup>2</sup>であるが、この内国庫補助による調査はE軸から東側の約200m<sup>2</sup>である。

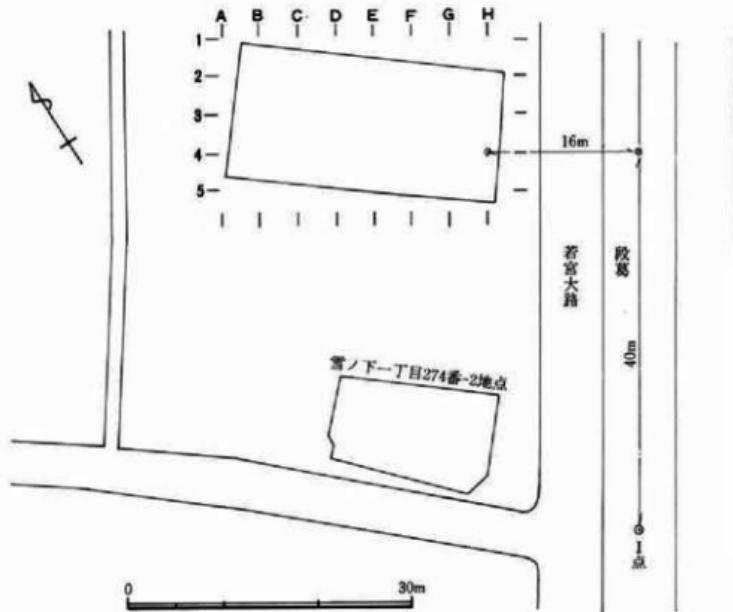
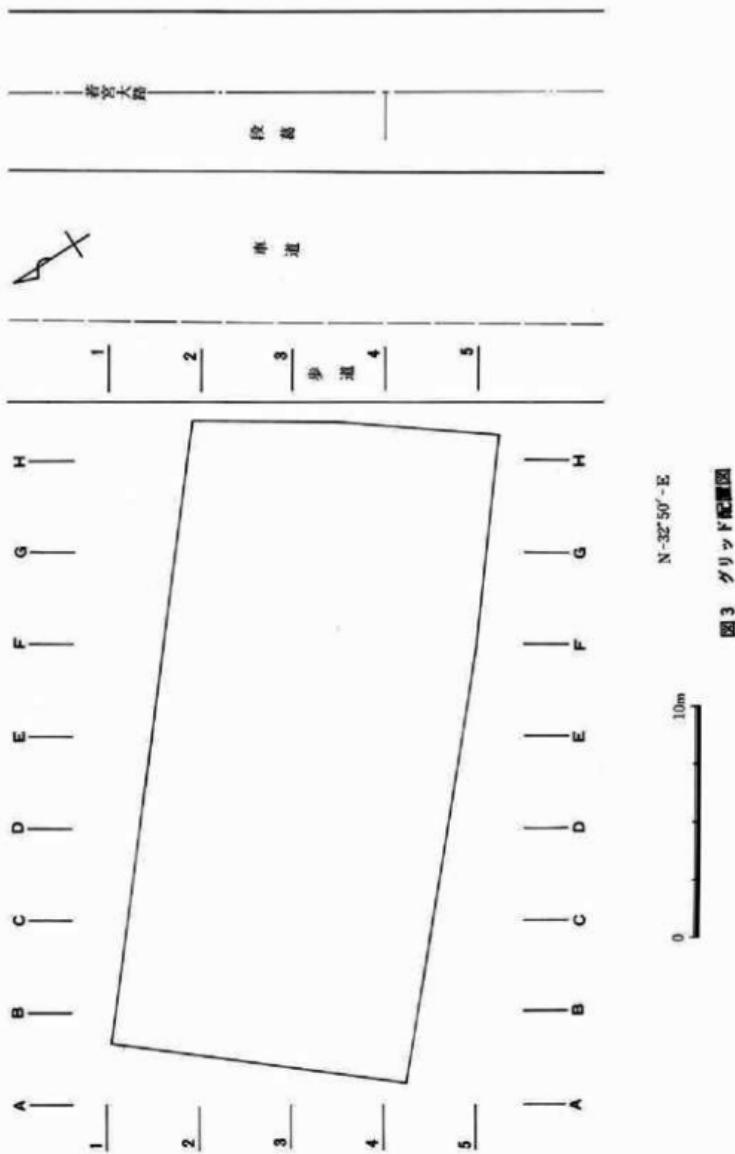


図2 調査地点位置図 ※ 4軸はI点から北へ40m, H軸はI点から西へ16m



### 第三章 検出された遺構

#### 1 上層遺構

地表下約0.7~1.2m前後まで及んでいる近・現代の整地層を除くと、暗茶褐色粘土の中世包含層が現われる。この包含層はかわらけ片、土丹粒を含み、厚さ20~40cmである。これを掘り下げると上層遺構面が検出されるが東端ではこの包含層が見られず、灰褐色砂質土とその下に土丹版築面が認められ、すぐに黒褐色粘質土の中世基盤層が現われる。黒褐色粘質土は若宮大路に向かって高まり、土丹版築面構築の際に削平を受けたものと考えられる。

上層遺構面に伴って検出した遺構は、掘立柱建物、網代壁建物、柱穴列、溝、土壙などである。

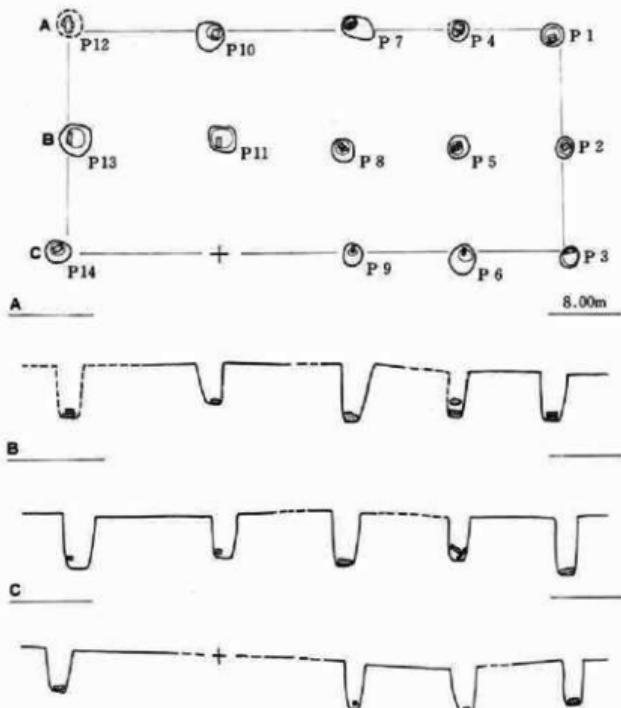


図5 建物1

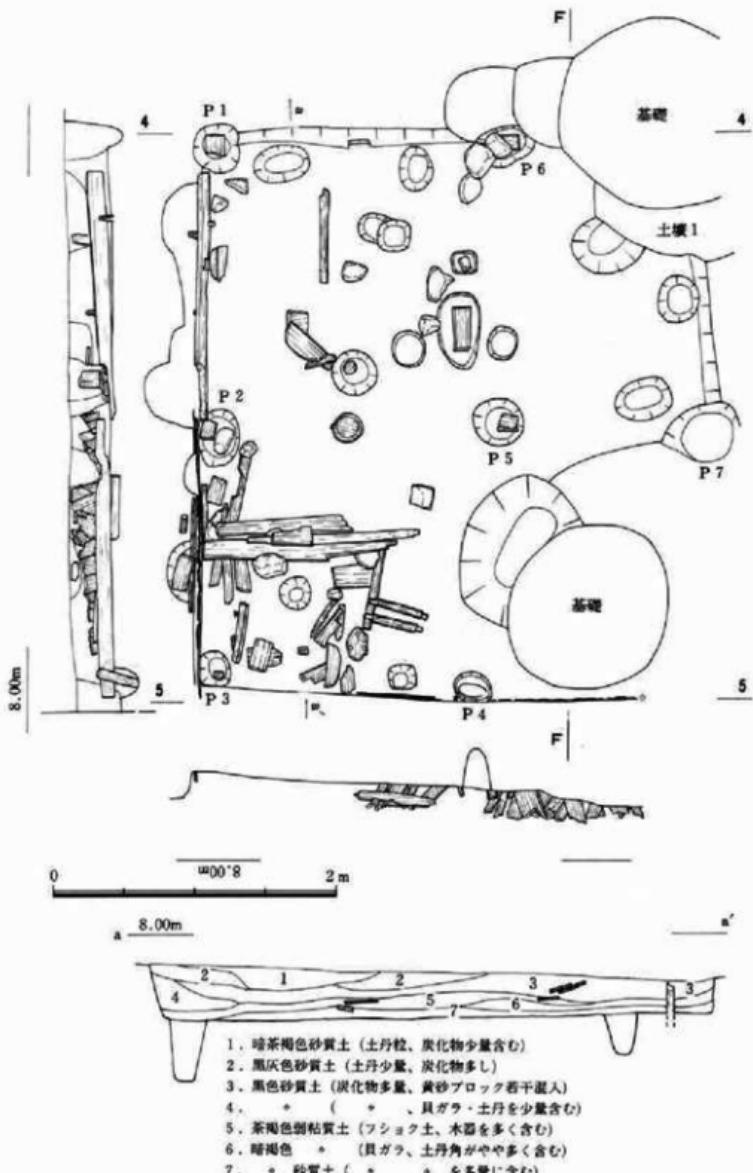


図6 建物2

### a 建物

#### 建物1

C-E-3・4にあり、4間×2間の規模を持つ東西棟の掘立柱建物である。

規模は桁行(東西)876cm、梁行(南北)390cmである。桁行の柱間は、東から184cm・193cm・230cm・270cm、梁行は北から200cm・190cmである。柱穴間の寸法や柱穴芯々を直線で結ぶと若干ずれる柱穴もあるが、いずれも掘り方が深く、覆土も共通しているため、一棟の建物として捉えた。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈しており、直径は40~50cm、深さは検出面から70~90cmである。柱穴底面には礎板を1、2枚又は礎石が据えられていた。底面の標高は6.1~6.4mである。P3から吉州窯産の梅花天目茶碗が出土している。

#### 建物2

E-F-4・5で検出された2間四方の網代壁をもつ建物である。切り合い関係から見て土壤1よりも古い。

この遺構は市内調査で検出される方形堅穴建築跡と同様に生活面より掘り下げられ、半地下式の掘り方を持ち、側壁に板組がなされている点は同様であるが、内部に9口(推定)の柱穴を伴っている点で、異なった構造をもつ建物と考えられる。

掘り方は南北403cm、東西372cmの長方形を呈し、深さは検出面から25~60cmである。底面の標高は7.4m前後で平坦である。構築物の規模は、西壁と南壁に残存する網代壁から10~15cm外に掘り方が認められることから、南北390cm(13尺)、東西360cm(12尺)ほどのものと推定される。

建物壁の板組みは良好な残存部分から復元すると、掘方の10~15cm内側に幅10~15cm、厚さ2~3cmの板を網代に組み合わせ、2~3重に立て掛けた壁板を、下部の横板(横棧)と壁直下の側柱で内側への倒壊を押さえている。また横板にはずれを防止する杭が内と外に打ち込まれていた。この柱穴は直径が25~40cmの円形を呈すもので、深さは遺構面下40cm前後である。柱穴内には礎板や礎石が残っている。建物内から建築材の一部と思われる板材や角柱、曲物などが出土している。

### b 南北溝I・II、柱穴列

調査区東壁沿いに、若宮大路と並行して東西に走る2時期の大規模な木組み溝と柱穴列を検出した。この南北溝と柱穴列は、その規模や構造から察して、若宮大路の側溝とそれに伴う構列または塀といった構築物と考えられる。

#### 南北溝I

掘り方が上端で幅約340cm以上、下端290cmである。断面形は上部の開いた逆台形状を呈し、深さは遺構検出面から約50cmである。溝の底面の両側には長さ394~397cm、幅9~12cm、厚さ7~9cmの納穴を有する角材が置かれている。角材には35~40cmの間隔で長さ12~15cm、幅4~5cmの納穴が穿たれており、両端は半分の長さの枘が切られている。その直下には水平と沈下を防ぐ為の礎板

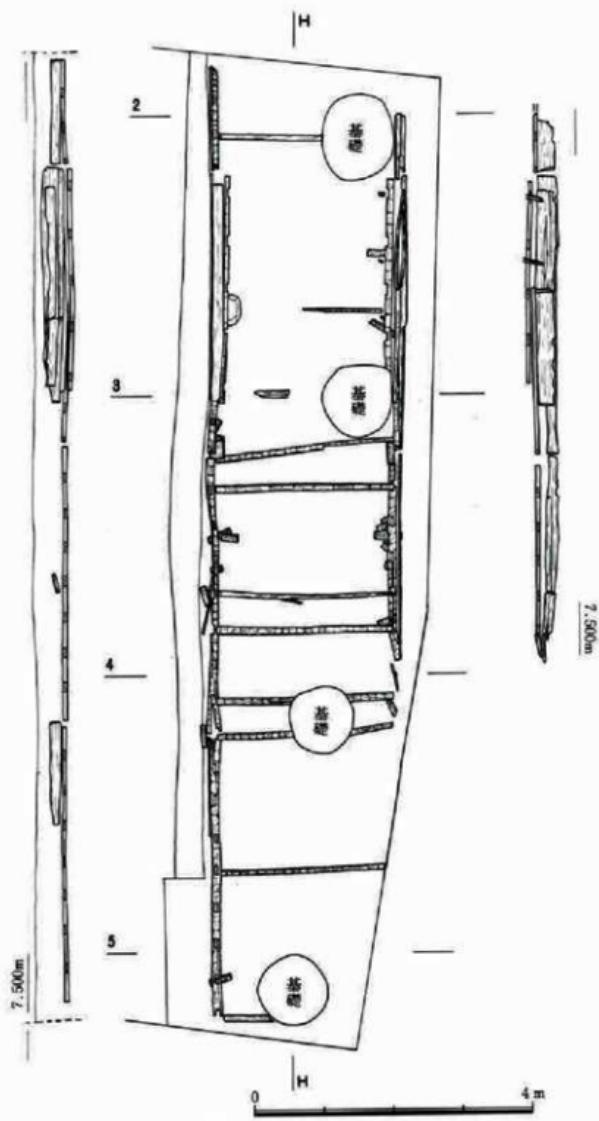


图7 南北溝 I

や土丹塊が敷かれており、横方向のずれを止める目的で杭が打ち込まれていた。向かい合う両角材の間隔は芯々で幅266~270cmである。角材の縦目と枘穴の位置はそれぞれ対応している。この縦目と縦目の間に長さ260cm、幅10~13cmの梁（突張り）が6本並んでいる。また角材の上には厚さ2~3cm、幅約30cmの土留めの横板を木端が角材の外端に接する形で2~3重にして立てられていた。底面の標高は、北壁際で6.97m、南壁際で6.90mになり、南に向かって緩やかに傾斜している。

#### 南北溝Ⅱ

掘り方は上端で幅約370cm、下端で約320cmと南北溝Ⅰよりやや広いが、断面形はやはり逆台形である。深さは造構検出面から85cmである。底面の標高は北壁際で6.69m、南壁際で6.62mで南北溝Ⅰより30cm程深い。掘り方底面に遺存する角材は長さ400~430cm、幅12cm、厚さ7~9cmである。枘穴は約60cmの間隔で穿たれており、長さ14~16cm、幅4~5cmである。平行に残存する両角材の間隔は芯々で幅296cmである。この内側には束材と土留めの横板が重なり合い、倒壊した状態で（南北溝Ⅰの改修の際に倒されたものか）検出された。束材は長さ145~150cm、幅16~20cm、厚さ12~14cmであり、両端には長さ8~10cmの枘が造り出されている。横板は長さ約210cm、幅20~25cmで、厚さ4cm程である。南北溝Ⅰと同様に角材の下には礎板を敷き、その内外に杭が打ち込まれている。南北溝Ⅰ・Ⅱは構築方法に殆ど変化が見られない点から両者の年代の接近を示唆するものと考えられる。

#### 柱穴列

南北溝Ⅰ・Ⅱに平行して並んだ三期以上の柱穴列を検出した。この柱穴列は、南北溝Ⅰ・Ⅱの東側肩に沿って南北に走ることから、この溝に伴う構造または構といつた構築物と考えたい。柱穴列Ⅰは浅い掘り方を残し、礎板を東西に横たえている。調査区内の現況では8間分が確認され、柱間は各々150cm（5尺）である。柱穴の底面に大型の礎板を残すのみで、掘り方のほとんどを削り取られている。東西方向に据えた礎板は長さ30~70cm、厚さ約7cmで一本の材を分割したもので、すべての礎板を接合することができた。

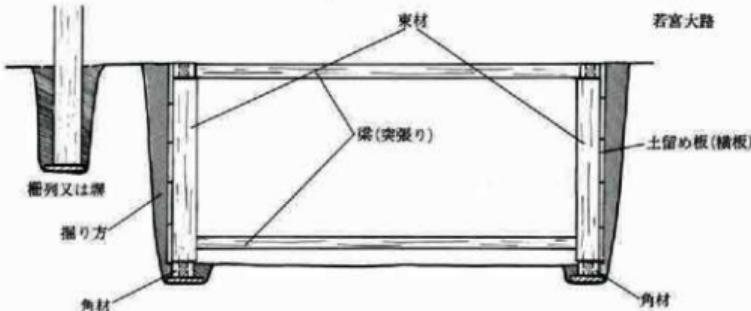


図9 南北溝Ⅰ・Ⅱ復元模式図

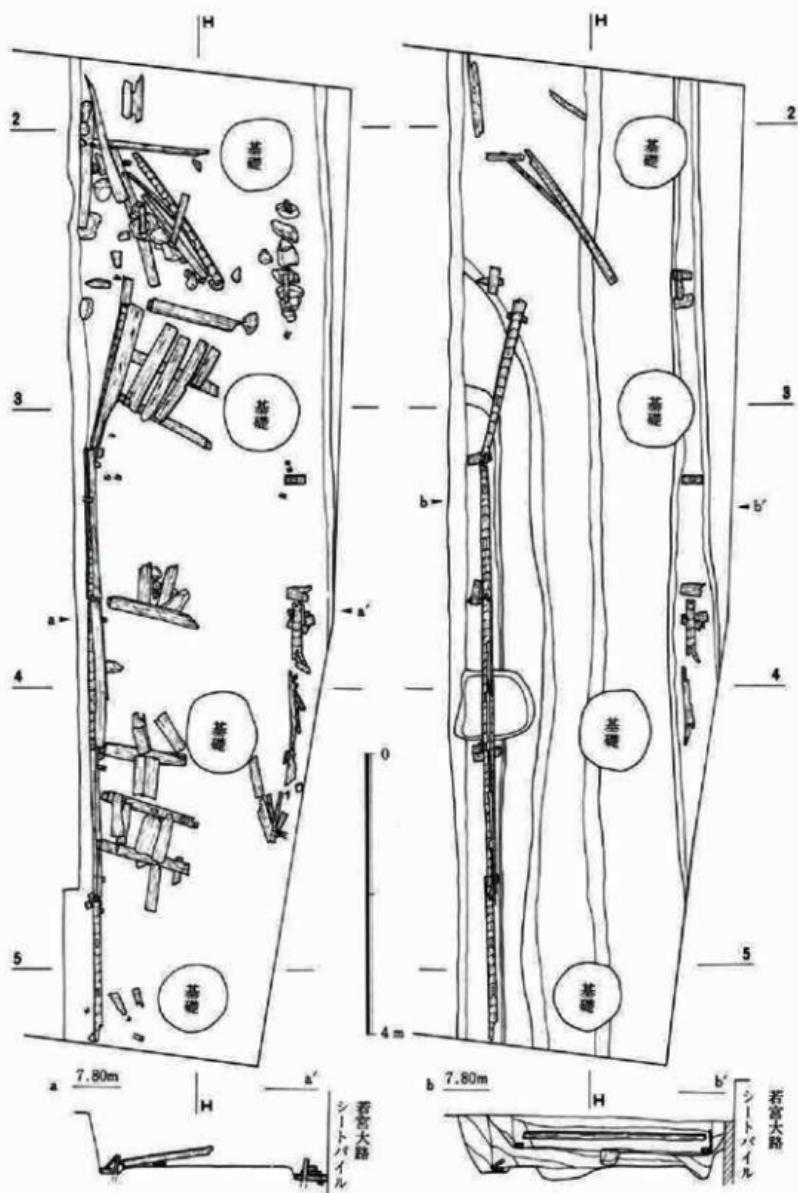


図8 南北溝Ⅱ 検出状況および掘り方

柱穴列 2 は調査区内では 7 間の規模が確認された。柱穴間は各々 160cm (5.3 尺) である。柱穴列 1 よりも古い。柱穴平面形は、ほぼ円形のものが多く、直径は約 40~50cm である。底には南北方向に長さ 30~40cm、厚さ 3cm 程の礎板が遺存する。

柱穴列 3 は調査区内で 9 間が確認された。柱穴間は各々 138cm (4.6 尺) である。柱穴平面形は、ほぼ円形を呈し、直径が 40~60cm、深さは遺構確認面から 20~30cm である。南から 3 穴目の底面には、扁平な土丹が礎石がわりに置かれていた。

#### c 土壌・溝

土壤または土壤状を呈したものは 8 基検出している。この内特長的なもの 3 基について述べる。土壤 1 は F-4 交点付近にある。建物 2 より新しい。東西に長い隅丸肩形を呈し、断面は逆台形である。東西約 120cm、南北 85cm である。底面は平坦で、深さは遺構確認面から 40cm 程である。

土壤 2・3 F-5 交点付近にある。2 は円形を呈し、直径は 110cm、深さ 45cm で底面がやや皿状である。土壤 3 よりも新しい。3 は捺円形を呈した大型の土壤である。東西 210cm 以上、南北 130cm 前後で、深さは確認面から 65cm で、底面は平坦である。

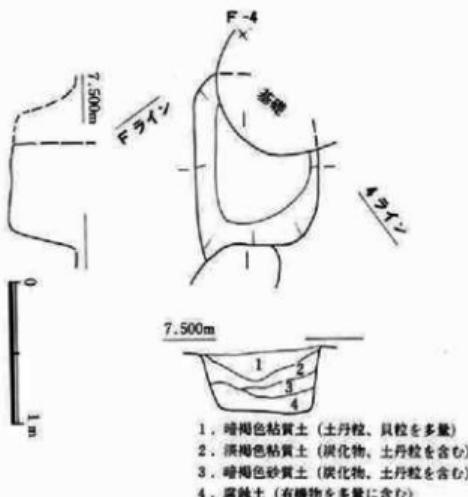


図10 土壌 1

## 溝

F-2~4に位置する南北方向の溝を検出した。規模は長さ5m以上、幅25~30cm、深さ20cm、底面幅15cmで溝の断面形はU字を呈する。

## 2 下層遺構

下層遺構は地山の黒褐色粘質土上面で確認した遺構である。検出した遺構には、掘立柱建物、溝井戸、井戸状遺構、土塁、匂炉裏などである。

### a 建物

#### 建物3

E・F-2~4にあり、3間×2間の規模をもつ南北棟の掘立柱建物である。

規模は桁行(南北)594cm、梁行(東西)372cmである。柱間は桁行が各198cm、梁行が198cmと174cmである、これらは尺寸で、桁行19.6尺、梁行12.3尺となる。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形を呈しており、直径は40~60cm、深さは遺構検出面から40~50cmである。底面の標高は6.70~6.80mとほぼ一定している。

桁行南側の4柱穴は平均して大きめに掘られている。桁行方向は若宮大路と平行関係にある。

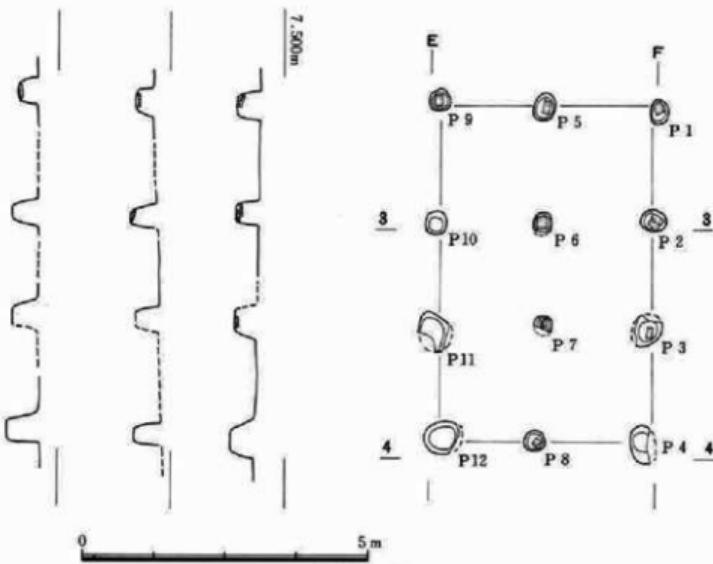


図12 建物3

#### 建物 4

E-2～5に位置し、建物3に重なる形で検出した。4間×2間の南北棟の掘立柱建物である。規模は桁行（南北）762cm、梁行436cmで、柱間は桁行が南から210cm・174cm・189cm・189cm、梁行が各218cmである。柱間の尺寸は桁行が25.4尺、梁行が約14.5尺である。柱穴の平面形は、円形もしくは椭円形を呈し、直径は40～60cmである。深さは遺構検出面から60～90cm程である底面の標高は最も浅いもので6.60m、深いもので6.25mである。柱穴15口のうち、P-4・13・14を除く12口には1～4枚の礎板と礎石が据えられている。建物3と同じく桁行方向は若宮大路と平行関係にある。

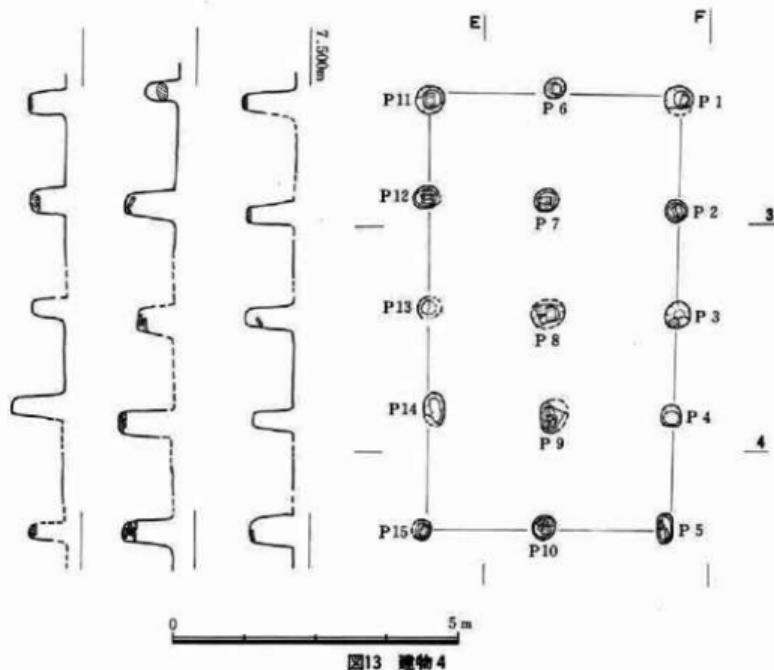


図13 建物4

#### b 溝

##### 東西溝 I

調査区の北壁に沿って走る木組溝で両端は調査区外へ延びている。布掘りした側壁に横板を沿わせ、その内側に直径5～7cmの自然木を杭にして打ち込んで木組の溝としている。幅は上端で約90cmで、遺構確認面からの深さは25～35cmである。底面の標高は東端で6.60m、西端で6.45mと東から

西に向かって流れている。若宮大路に対して概ね直交する。

#### 東西溝Ⅱ

調査区北端にあり、両端は調査区外に延びている。東西溝Ⅰ及び南北溝Ⅰ・Ⅱなどに切られてい るがさらに若宮大路に向かって延びている。切り合い関係と覆土、遺物からみて、本調査地点の遺構中最も古い段階のものである。

規模は幅3.5~3.8m、断面型は整ったV字形（薬研堀）を呈する。深さは遺構検出面から1.1m前後ほどであり、底面の標高は東端5.95m、西端5.7mで西に向かって流れていたと思われる。

覆土は概ね中世基盤層の黒褐色粘質土を多く含み、出土遺物からみて13世紀前葉まで遡らせるこ とができる。また東端が若宮大路に向かって延びていくことが確認されており、E軸付近の溝中では、橋脚状の木組みを検出している。

#### 東西溝Ⅲ

D~F~3軸付近に位置する。規模は長さ6.3m、幅約30cm、深さ約20cmである。部分的に土留め板と木杭が打ち込まれている。底面はほぼ平坦である。

#### c 井戸

F~4の交点付近に位置する。遺構の確認面は黒褐色粘質土上面である。

掘り方は南北に比べ東西のやや長い隅丸方形を呈し、規模は上端で東西1.4m、南北1.25m、下 端は約80cmで、深さは遺構確認面から1.7mである。壁面は切り立っており、断面は全体として箱 形に近い。覆土は上層が暗茶褐色土で、以下は青 色の主として砂質のもので、木片を多く含む。

#### d 井戸状遺構

井戸状遺構1・2はG~5にあり、2基が切り 合った恰好になっている。

井戸状遺構1の規模は東西1.25m、南北1m、 深さは遺構確認面から1.5mである。遺構の平面 形は梢円形を呈し、底面は平坦でなく丸みをもつて側壁に立ち上がっている。

井戸状遺構2の規模は東西90cm、南北1mである。深さは遺構確認面から1.4mである。底面は ほぼ平坦で、側壁は切り立っており、断面形はほ ぼ箱形である。

井戸状遺構3・4はG~3の交点付近にあり、 隅丸方形の井戸状遺構である。

井戸状遺構3の掘り方は南北85cm、東西80cmで

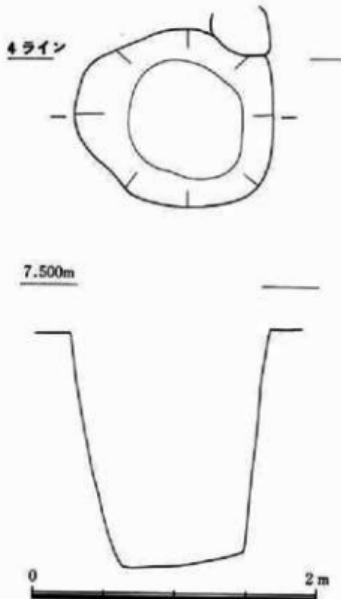


図14 井戸

ある。深さは遺構確認面から1.25cmで底面では平坦である。壁面は切り立っており、断面形はほぼ箱形である。

井戸状遺構4は3の北側にあり、掘り方は南北95cm、東西105cmである。深さは遺構確認面より155cmである。内壁は二段に落ち込んでおり、底面には円形及び隅丸方形の深い窪みが見られた。

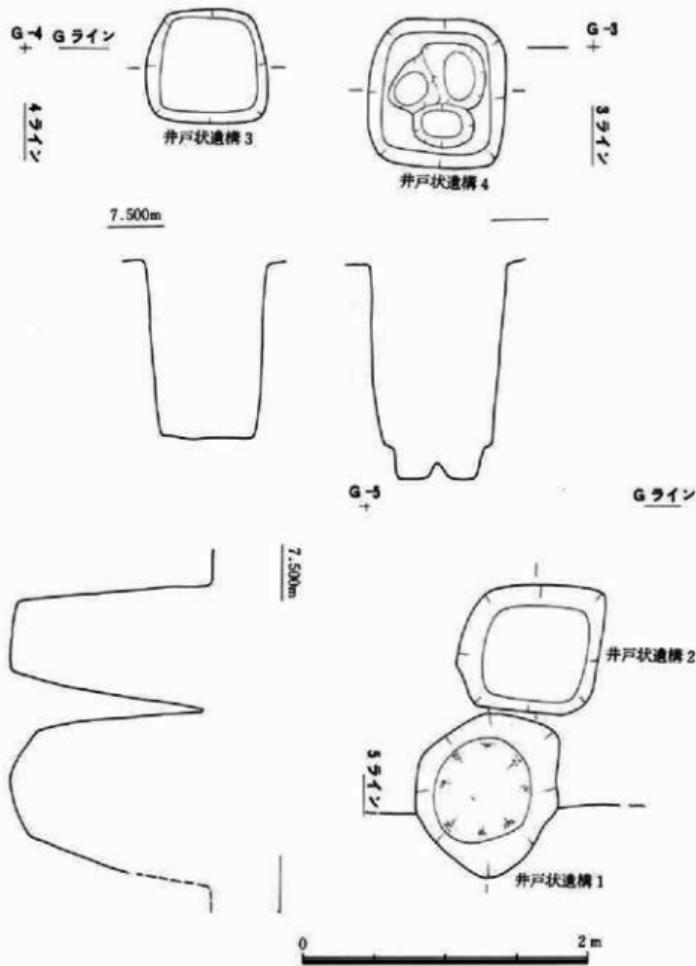


図15 井戸状遺構

### 囲炉裏

E-2の東域に位置する。一辺の長さが、東西60cm、南北55cmではほぼ方形を呈す。枠に沿って縦板が一部遺存し、枠内には浅い掘り込みが認められた。覆土は上層に灰層があり、下層に炭化物と焼土が堆積している。南壁上には曲物底が置かれていた。上層遺構の調査区西端では、建物に付随する形で良好な遺存状態の囲炉裏遺構が検出されている。

以上黒褐色粘質土の中世基盤層上面で検出した下層遺構について概要を述べてきた。以下、調査区北東隅の黒褐色粘質土中で表出した多量の木材について若干触れることがある。

東西溝IIの東端の底面を精査していた段階で木材の一部が確認されており、新たな遺構の存在が知られた。その為に東西溝IIの調査終了後に黒褐色粘質土を掘り下げて、この木材の検出を行なった。これらの木材は板材、角材、丸太材などで、

南北に置かれた丸太材の上下には、直交する形で板材、角材が折り重なった状態で検出された。この遺構は出土遺物を伴っていないため、年代観を知る手掛かりは得られなかつたが、少なくとも東西溝IIより古くしかも中世基盤層である黒褐色粘質土中からの出土であることは中世以前に遡りえる遺構と考えたい。

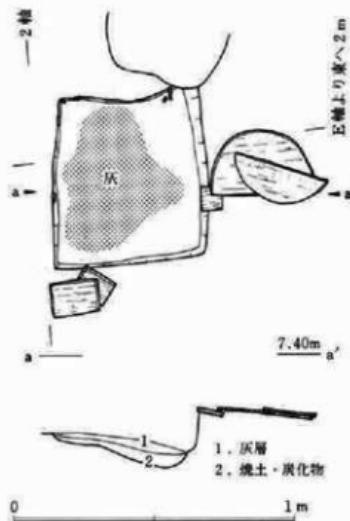


図16 围炉裏

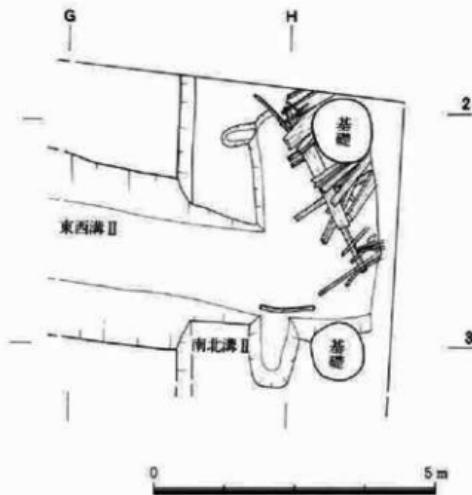


図17 中世以前の遺構

## 第四章 出土した遺物

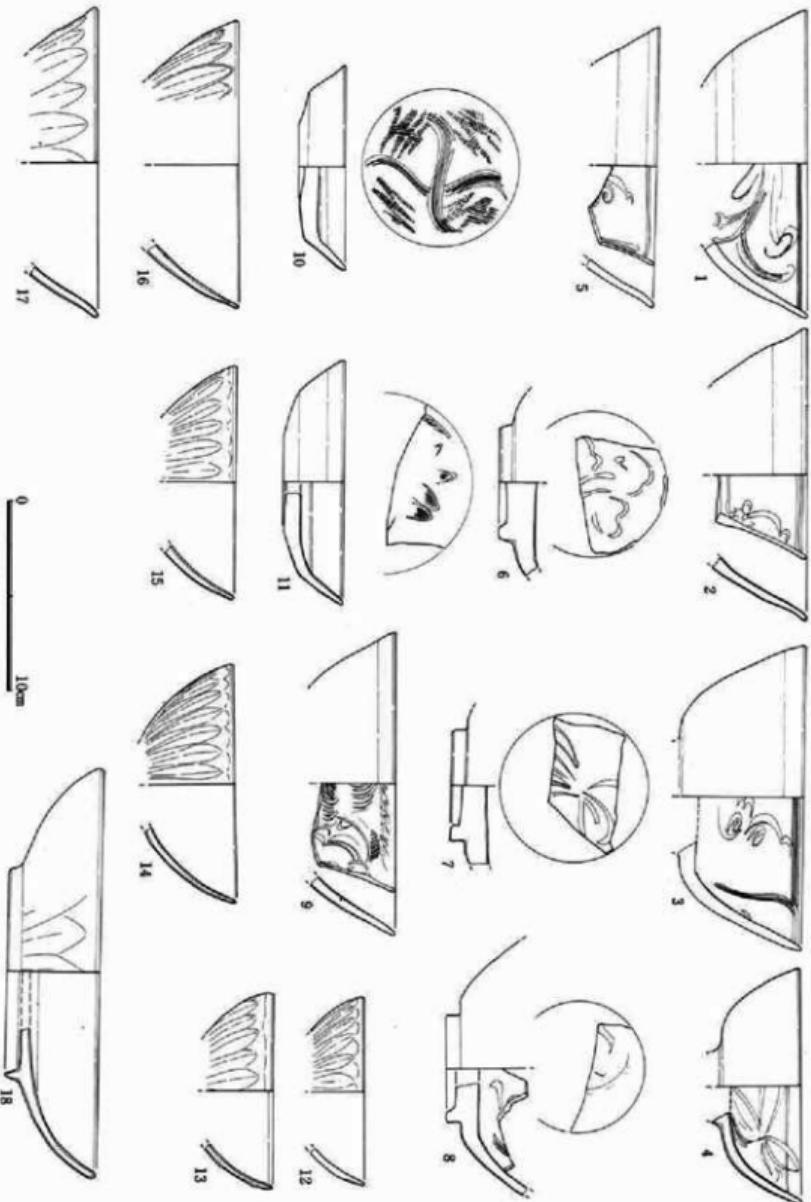
### 1 船載陶磁器（図18・19、図版9）

南北溝、東西溝、井戸などから中国産の青磁、白磁、青白磁が出土している。中でも建物1の掘立柱柱穴から吉州窯梅花天目茶碗、下層造構面上から定窯白磁鉢が出土している。

#### 青磁碗・鉢・壺

1は口径16cmである。体部から口端部にかけて内湾しながら立ち上がる。外面は無文で内面には蓮華唐草文を配する。素地は淡灰色を呈し粘性が強い。釉は淡黄緑色で透明。井戸出土。2は口径15.1cmである。内湾ぎみに立ち上がる体部は口端部でやや外反する。外面は無文で、内面には2条の沈線、体部に飛雲文を配している。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡黄緑色を呈し透明。井戸出土。3は口径15.8cmである。体部から口端部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面は無文で、内面には口縁に3条の沈線、体部に飛雲文を配している。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡緑色で透明。東西溝II上層出土。4は口径12.2cmである。体部の内湾が強く全体に丸みを帯びる。外面は無文で内面に蓮華文を配する。素地は暗灰色を呈し粘性は強い。釉は暗緑色で透明。東西溝II上層出土。5は口径14.5cmである。体部は口端部でやや外反する。外面は無文で内面に2条の沈線、飛雲文を配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡黄緑色で透明。東西溝II上層出土。6は底径5.7cmである。内底面に蓮華文を配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は暗緑色である。E-3区下層造構面出土。7は底径5.9cmである。内底面に蓮華文を配する。素地は灰白色を呈し粘性が強い。釉は淡緑色である。E-4区下層造構面出土。8は底径5.7cmである。内面に蓮華文を配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡緑色で透明。東西溝II下層出土。9は口径15.8cmである。体部は内湾ぎみに立ち上がる。外面は無文で内面には飛雲文と櫛搔きを配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡緑色で透明。東西溝II下層出土。10は口径10.7cm、底径4.4cm、器高2.4cmである。内底面には櫛搔きを配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡青緑色で透明。E-2上層造構面出土。11は口径12.7cm、底径5cm、器高3.2cmである。口端部はやや外反する。外底面は墨書があるが、判読はできない。内底面に花弁条のスタンプが配される。素地は灰色を呈し粘性が強い。釉は淡黄緑色で透明。G-1・2区下層造構面出土。12-21は蓮弁文である。12は口径9.8cmである。内湾して立ち上がる外面に蓮弁を配する。素地は灰白色を呈し粘性が強い。釉は淡青緑色で透明。南北溝II下層出土。13は口径10cmである。素地は灰白色を呈し粘性が強い。釉は淡緑色である。E-3区上層造構面出土。14は口径12.4cmである。外面に細い蓮弁を配する。素地は灰白色を呈し粘性が強い。釉は青緑色である。南北溝II出土。15は口径12cmである。素地は淡灰色を呈し粘性が強い。釉は青緑色である。南北溝II出土。16は口径14.9cmである。素地は灰白色を呈し粘性が強い。釉は青緑色である。南北溝II下層出土。17は口径16cmである。素地は灰白色を呈し粘性が

图18 梳齿珊瑚属(1)



強い。軸は青白色である。南北溝Ⅱ下層出土。18は口径21.3cm、底径10.7cm、器高4.9cmの鉢である。内面は無文で外面に蓮弁を配する。素地は灰色を呈し粘性が強い。軸は青緑色である。E・F-3区下層遺構面出土。19は底径9.4cmである。素地は灰白色を呈し粘性が強い。軸は青緑色である。上層遺構面出土。20は口径21.6cmである。内湾しながら立ち上がる体部が口端部で強く外反する。素地は灰色を呈し粘性が強い。軸は青緑色で透明。南北溝Ⅱ出土。21は底径4.1cmである。素地は灰白色を呈し粘性が強い。軸は淡緑色で透明。南北溝Ⅱ出土。35は口径5.5cmの小型の無頸壺である。素地は灰白色を呈し粘性が強い。軸は青緑色で透明。南北溝Ⅱ下層出土。

#### 白磁碗・皿

22は口径12.2cmである。口端部が軽く外反する。素地は白色を呈し粘性が強い。軸は透明。南北溝Ⅱ下層出土。23は口径13.9cmである。口端部が外反し、内面に1条の沈線が廻る。素地は白色を呈する。軸は透明。南北溝Ⅱ出土。24は口径12cmである。素地は白色を呈する。軸は透明。上層遺構面出土。25は口径11.5cm、底径6.3cm、器高3.2cmである。内碗しながら立ち上がる体部は口端部で大きく外反する。素地は灰白色を呈する。南北溝Ⅱ下層出土。26は底径8.4cmである。底部まで厚く軸がかかる。素地は白色を呈する。軸は透明。南北溝Ⅱ出土。27は底径6.4cmである。素地は白色を呈する。28口径10.2cmである。素地は白色を呈する。軸は透明。南北溝Ⅱ出土。29は口径9cmである。口端部はやや外反する。素地は白色を呈する。E-2区上層遺構面出土。30は口径9.9cm、底径6.4cm、器高1.8cmである。口端部はやや外反する。素地は灰白色を呈する。軸は透明で厚くかけられている。E-3区上層遺構面出土。31は底径5.4cmである。素地は灰白色を呈し粘性が強い。軸は青白色である。F-4区上層遺構面出土。

#### 青白磁皿・合子

32は底径3.4cmである。薄い器壁で素地は白色を呈する。南北溝Ⅱ出土。33は口径5.4cm、底径5cm、器高2cmの合子である。素地は白色を呈する。軸は白色で透明。建物2出土。34は口径6.5cm、器高2cmの合子蓋である。上面に唐草状の文様を配する。素地は灰白色を呈し粘性を強い。軸は青白色を呈し粘性が強い。上層遺構面出土。

#### 吉州窯梅花天目茶碗

36、口径11.6cm、底径4.2cm、器高4.4cmである。体部下半と高台は施状工具で削り出されている。口端部内面に段差が付き、黒色の梅花文様が付く。素地は淡灰褐色を呈する。軸は外面の上半に黒釉がかけられる。上層遺構建物1柱穴3出土。

#### 定窯白磁鉢

37、法量は小片のために不明である。全部で3点出土している。まっすぐに立ち上がる体部の内面に蓮華文を配し、外面に輪花状の切れ込みが見られる。素地は白色を呈し粘性が強い。A・B-2区上層遺構面出土。

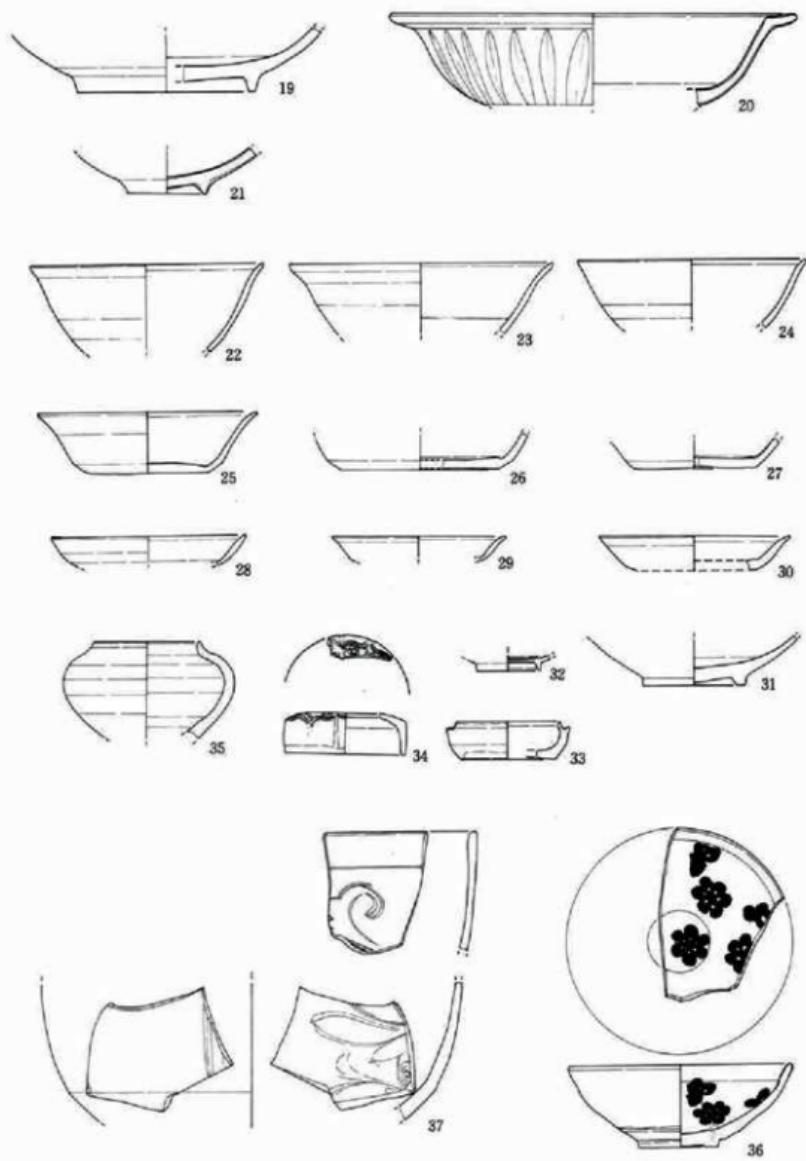


図19 舶載陶磁器(2)

## 2 国産陶器 (図20・21・22、図版10)

国産品には山茶碗、山皿、常滑、渥美などがあり、上・下層遺構の包含層や遺構から出土している。

### 山茶碗・山皿

7・8は渥美系の山茶碗、山皿である。胎土は粗胎。無釉で素地に石粒や砂を多く交え暗灰色を呈する。壺器に近い質感のものである。7は口径14.2cm、器高5.2cm、底径7cmである。底部からやや内湾して立ち上がり、口縁で外反ぎみになる。口唇肥厚し、端部が縁帯状になる。底部は糸きり後低い高台を貼り付けた糧高台である。8は口径8.7cm、器高3.1cm、底径4.1cmである。7と同様に内湾ぎみに立ち上がり、口縁部や外反し、端部外側が縁帯状を呈する。カーボンが付着しており、燈明皿として使用している。7は建物2、8はG-1・2区下層遺構面から出土している。

### 渥美

15-17は渥美窯の壺で、東西溝II出土。胎土は精良土で砂粒を含む。焼き締り粘性が強い。色調は灰褐色を呈し釉業の刷毛塗りが見られる。

15は口縁部片で端部を下方に折曲げている。16は口縁～頸部片である。頸部はくの字に外反し頸部と肩部の接合部に指頭痕を残す。口縁部折り返し上部に沈線状の軽い窪みが付く。17は口縁～頸部片で頸部は大きくくの字に外反する。頸部と肩部の接合部に強い指頭痕を残す。東西溝II上層出土。

### 常滑

出土壺器の中で最も多く出土している。そのほとんどが大壺である。この他に壺、捏鉢が出土している。

9は口縁～頸部片。口径49.5cm、外方に折れた口縁端部に軽く上方に引き伸ばした縁帯が付く。内、外面に淡緑色の降灰が見られる。岩石質に焼きあがっている。10は壺口縁～肩部片。口径39.6cm、口縁部は直立ぎみになり、N字状に折曲げた縁帯が付く。外面に灰緑色の降灰が見られる。胎土は砂を含む粗胎。南北溝II出土。11は壺口縁～肩部片で、N字状に折曲げた縁帯が付く。端部と外面に淡緑色の降灰。胎土は長石、砂粒は含んだ粗胎である。南北溝I出土。12は壺口縁部片。端部上縁に凸帶が付く。胎土は粗く岩石質で、長石、砂粒を多く含む。外面に灰緑色の降灰がある。E-1区下層遺構面出土。13は口縁～頸部片。外方に折れた口端部に、上下に引き伸ばした縁帯が付く。内面に淡灰緑色の降灰が見られ、胎土は粗く長石、砂粒を多く含む。E-3区下層遺構面出土。14は壺口縁～肩部片。端部は僅かに上方に向く。胎土は灰色で岩石質に焼きあがっている。外面に暗灰緑色の降灰が顕著である。E-4区下層遺構面出土。18は壺口壺である。口径6.4cm、器高9.2cm、底径8.2cmである。口縁部に範押しした片口を残す。底部から緩やかに開き、肩部の張る形で肩部に1条の沈線が巡る。頸部はくの字に外反し口縁から肩部にかけて灰緑色の厚い降灰が見られる。表土掘削中出土。

图20 指针·山茶属·山茶

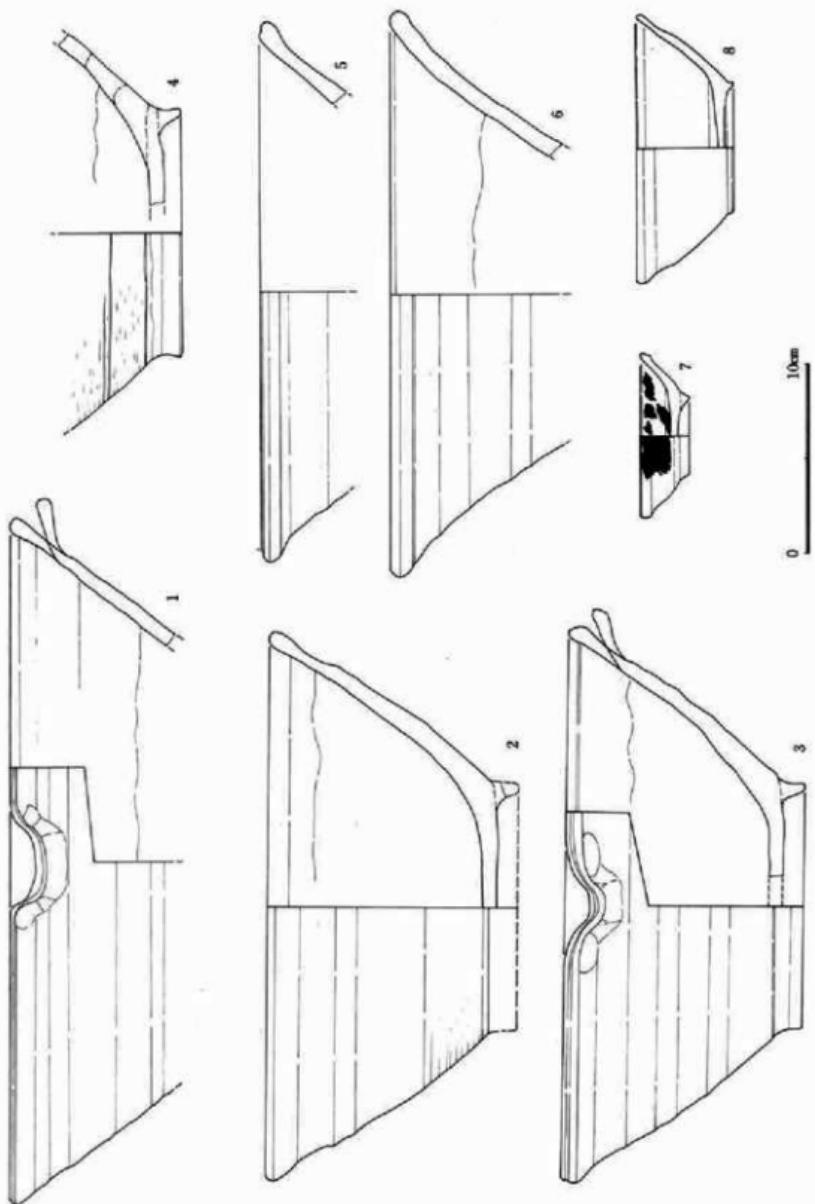
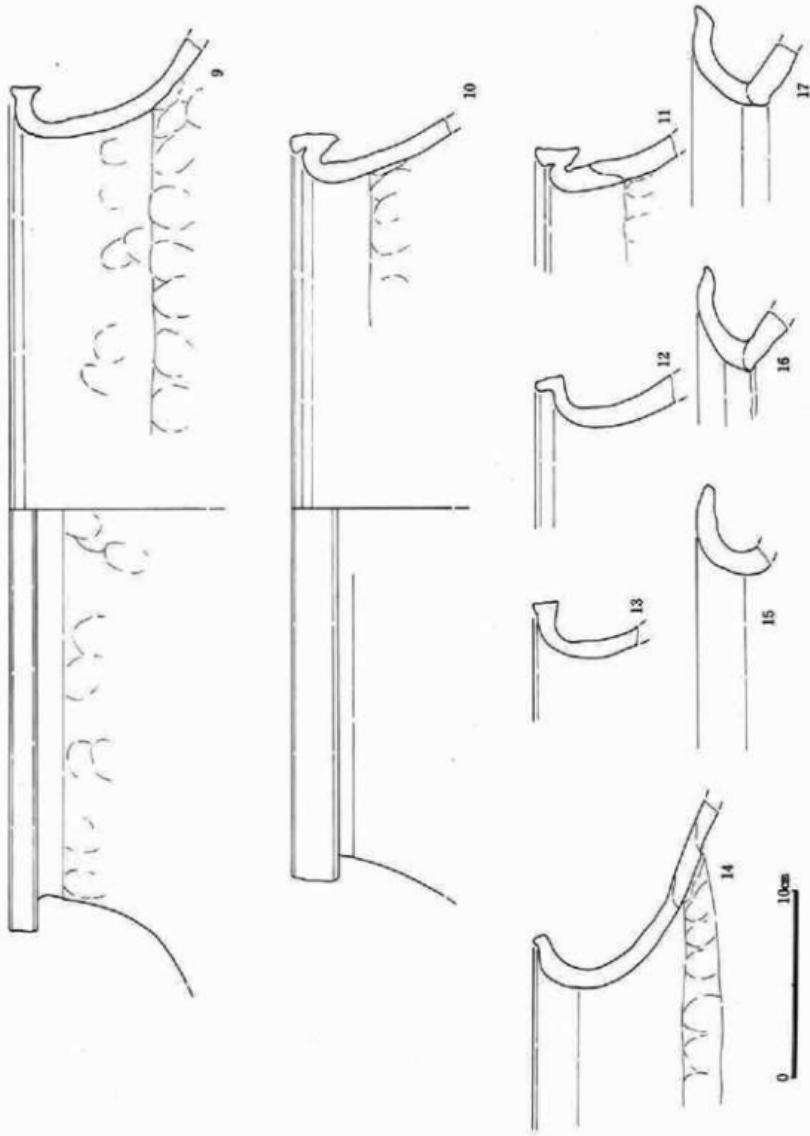


图21 常济·通美



### 捏鉢

1は片口が付き口径36.2cmである。口縁は丸みを帯びやや肥厚する。胎土はきわが粗く、灰黒色を呈す。G-3区上層遺構面出土。2は口径29cm、口縁は丸みを帯びやや肥厚する。胎土は粗く岩石質で灰色を呈す。F-3・4区上層遺構面出土。3は片口が付き口径29.4cm、器高12.6cmである。口端部は丸く外側直下が肥厚する。胎土は灰色で岩石質を呈す。F-2区下層遺構面出土。4は体部下半～底部片。高台は薄く、外反している。胎土は大粒の砂礫を含み、灰色で粗い。E-3区上層遺構面出土。5は口径28.6cmである。口縁部はやや肥厚し、端部に沈線を巡らす。胎土は岩石質で、灰色を呈す。南北溝I出土。6は口径30cm、口縁部はやや外反し端部を丸くおさめている。胎土は灰色を呈し、岩石質を多く含み粗い。南北溝II出土。

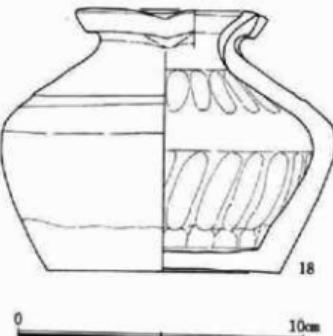


図22 常滑窯口壺

### 3 土器及び土製品（図23～26、図版10～12）

#### 手焼り

1～3は瓦質の鉢形を呈した手焼りである。側面觀は逆台形を呈し、底部は砂底である。外傾した側腹は口縁に到り肥厚する。1は口径42.5cm、器高9.4cm、底径31.7cmである。口端部は内側へ張り出す。外面は指頭痕と横位のナデを施す。南北溝II出土。2は口径42.8cm、器高10.3cm、底径32.5cmである。口端部は内面に張り出す。外面側中位には指頭痕と木口状工具による縱位の搔きナデがある。南北溝II出土。3も鉢形の手焼りである。南北溝I出土。

#### 瓦器

4は口径10.7cm、器高3.1cmである。胎土は精良、全体に墨灰色を呈す。内面に横位の暗文が巡り、内底面に菊花文が描かれている。外面下位に竈の押込みで輪花状を呈する。F-4区上層遺構面出土。5は口径9.7cm、器高3.3cmである。胎土は精良であり、炭素吸着が不完全の為か灰白色を呈する。内面及び外面上端に横位の暗文が巡り、内底面に菊花文が描かれ。輪花状を呈する。F-3区下層遺構面包含層出土。

#### 白かわらけ

7～10は口縁を内折れにつくる小皿である。口径7.6～7.9cm、器高1.2～1.4cmの手捏ね成形である。外底面は指頭痕をとどめている。7はF-1区下層遺構面上、8・9はE・F-3区下層遺構面包含層、10はE-4区下層遺構面上から出土。11・12は小型の手捏ね形成の皿である。11は口径8.5cm、器高2.3cm、12は口径9cm、器高2cmである。共に胎土は精良で、乳白色を呈す。口縁部は

やや丸く内湾気味である。13は口径13cm、器高3.8cmで胎土は乳白色を呈し、精良である。外底面は指頭痕を残し、外面上半は横位のナデを施す。12は建物2、13はE・F-1・2区下層遺構面上出土。

6は早島式土器の碗である。口径11.7cm、推定器高3.7cm、胎土はやや砂っぽく小石粒を含み、焼成は良好である。胴中位にやや弱い稜を造り、口縁は外反気味になる。南北溝II出土。

#### 墨書・穿孔かわらけ

14・15は墨書かわらけである。14は口径7.8cm、器高2.8cmで内底面と側壁に菊花文様を配し、その間に唐草文様を描いている。外側壁にも文様がある。E-3区上層遺構面包含層出土。15は口径8.2cm、器高1.4cmで平仮名の墨書とも考えられるが判読できなかった。南北溝II下層出土。

16・17は焼成後に穿孔されたかわらけである。16は中央部に1.3cmの孔を持つ。17は手捏ねかわらけで、中央部の穿孔は途中で終わっている。G-1・2区下層遺構面上出土。

#### かわらけ (図24-26、図版 - )

かわらけは南北溝I・IIや東西溝IIなどの遺構に伴って良好な資料が出土している。以下、上・下層遺構面の各遺構による大別に沿って述べていくこととし、記述は各遺構で出土したかわらけの形態の主たる傾向について説明しておきたい。

#### 南北溝I・II出土のかわらけ (1-42)

この溝に伴って出土した遺物は手捏ねかわらけを一点含む以外はすべて輪轤成形によるものである。

#### 南北溝I

大型のものは器壁がさほど内湾しないもの(2・3)と、器壁が内湾するもの(1)があり、底径はやや小さめである。小型のものは全体に器高が低く、底部壁がやや薄くなる。(22-25)。

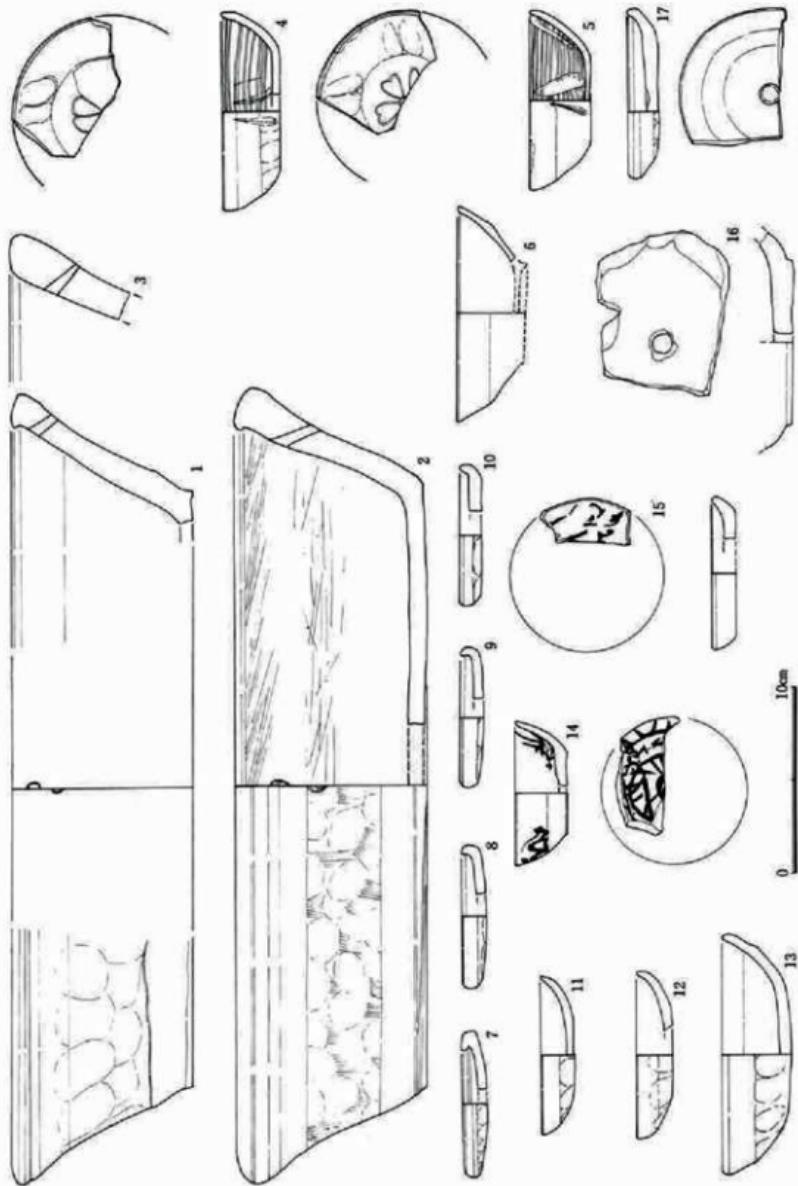
#### 南北溝II

大型のものは口径が12.4cm-13.3cmで、器高が3.5cm前後のもの(4-20)、小型のものは口径が7.7-8.5cmで、器高が1.5-2cmのもの(26-45)である。この他に極小ともいえる口径4.6-5.2cm、器高0.8-1cmのもの(45-52)がある。大型のものは全体的な特徴として、器高がやや浅く器壁は厚手で内湾傾向を示しているが、底部壁は若干薄くなるものが大多数を占める。小型のものは全体的に内湾傾向を示し、器高は低めであり大型品同様に底部壁がやや薄手に作られたものが多く見られる。21は中型の手捏ねかわらけで、口縁端部が丸く稜の弱い厚手のものである。これは混入品であるかも知れない。

#### 建物2出土のかわらけ (53-62)

すべて輪轤成形のものである。大型のものは53以外すべて器壁全体が厚ぼったくなり、全体的に内湾傾向が強い、口径・底径比が少ない。器高の深いもの(54・55)と、浅いもの(56・57)があり、口径は13cm前後である。小型品は器高が低く、器壁が内湾するが、口径・底径比が大きいもの(58-60・62)と、口径・底径比が少ないもの(61)とがある。

図2 五輪鏡・白わらけ他



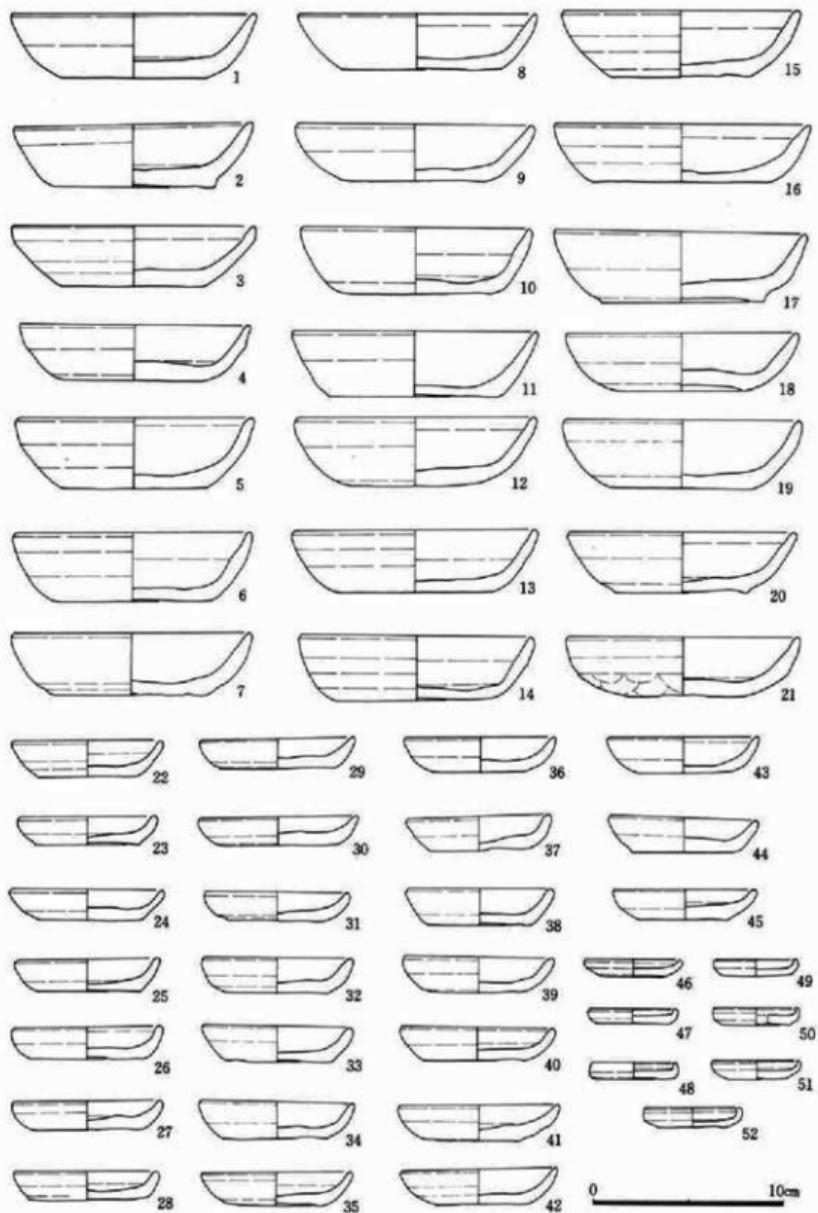


図24 かわらけ(1)南北溝I・II出土

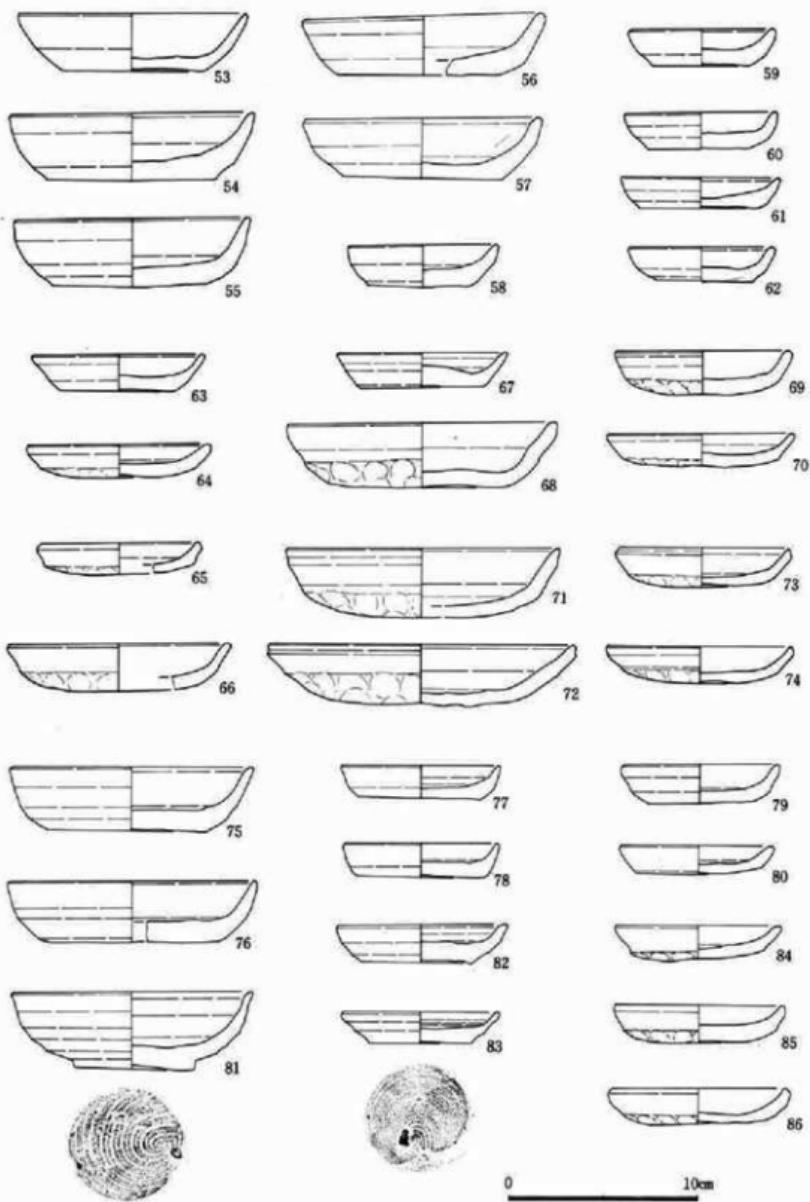


図25 かわらけ(2)

### 井戸出土かわらけ (63~66)

小型の轆轤成形のかわらけ1点以外はすべて手捏ね成形のものである。轆轤成形のもの(63)は、器高が低く、底径が大きくて直線的な器壁を持っている。手捏ね成形は中型で口端部がさほど尖らなく、体部の稜が不明瞭なもの(66)と、小型で外底部中央が窪み、体部の稜の弱いもの(64)と、体部の稜が強く口端部が尖るもの(65)がある。

### 東西溝I出土かわらけ (67~70)

轆轤形成と手捏ね成形がある。小型の轆轤形成(67)は体部直線的で、内底面が厚くなる。手捏ね成形の大型(68)は体部の稜が強く、口端部が尖る。小型(69・70)は体部の稜が強く開き気味に立ち上がるるもの(70)と、稜が弱く口端部を丸くしたもの(69)がある。

### 井戸状遺構I出土かわらけ (71~74)

すべて手捏ね成形である。大型(71・72)は大部に稜をもち、口縁部に沈線状の凹線が巡り、口端部は尖る。小型(73・74)は口縁部に沈線を巡らす(73)と大部の稜が強い(74)があり、ともに口端部が尖り、外底部中央に窪みが見られる。

### 東西溝II出土かわらけ (87~110)

溝中の上・下層からは、轆轤形成と手捏ね成形のかわらけが出土している。

上層出土(87~100)の轆轤形成のかわらけには、内底面及び体部内外面に轆轤痕を顕著に残し、底部糸きりの糸目が粗く一部に静止糸切りが認められる。大皿の深いもの(87・88)と小皿で底部が厚いもの(89・92・93)がある。(94)はこれらと共に通する幾つかの特徴を兼ねそなえているが、内底面に横位のナデ調整が施され、外底部に板压痕を残す点で異なる。また口径と底径比が小さく立ち上がり気味の大部をもつもの(90・91・95)がある。(95)は口端部を擦っており、内底面には糸切り痕を残す。

手捏ね成形のかわらけには、大型(96~98)と小型(99・100)に分けられる。大型のものはすべて大部に明瞭な稜を持ち、口端部が尖り、内面は内底部に横位ナデ後、体部内面を横ナデする。

(96)は厚手である。(97・98)は薄手で底部が平底状を呈する。小型は大部の稜が顕著で、口端部が尖る。

下層出土(101~109)の轆轤成形かわらけは、上層で出土した(88・89)と同じ大皿の深いもの(101)と、(93)に代表される小皿の底部が厚いもの(102)がある。また器形は(89)に類似するが内底面中央部に横位ナデを施し、底部糸きりの糸目が細かい小皿(105)がある。この他に器高が低く厚手で底径の大きな皿(103・104)がある。内底面は粗い横位ナデを施し、底部糸切りの糸目は細かい。

手捏ね成形のかわらけは、大型(106・107)と小型(108・109)に分けられる。大型は器壁がやや薄く、器高の低い底部平底状を呈し、口端部は尖るが、体部の稜線は不明瞭である。内面のナデは(96~98)と同じであるが、焼成は甘い。小型は体部の稜が顕著で口端部を尖らす。焼成は甘い。

図25(76~85)は下層遺構面上から出土したものである。

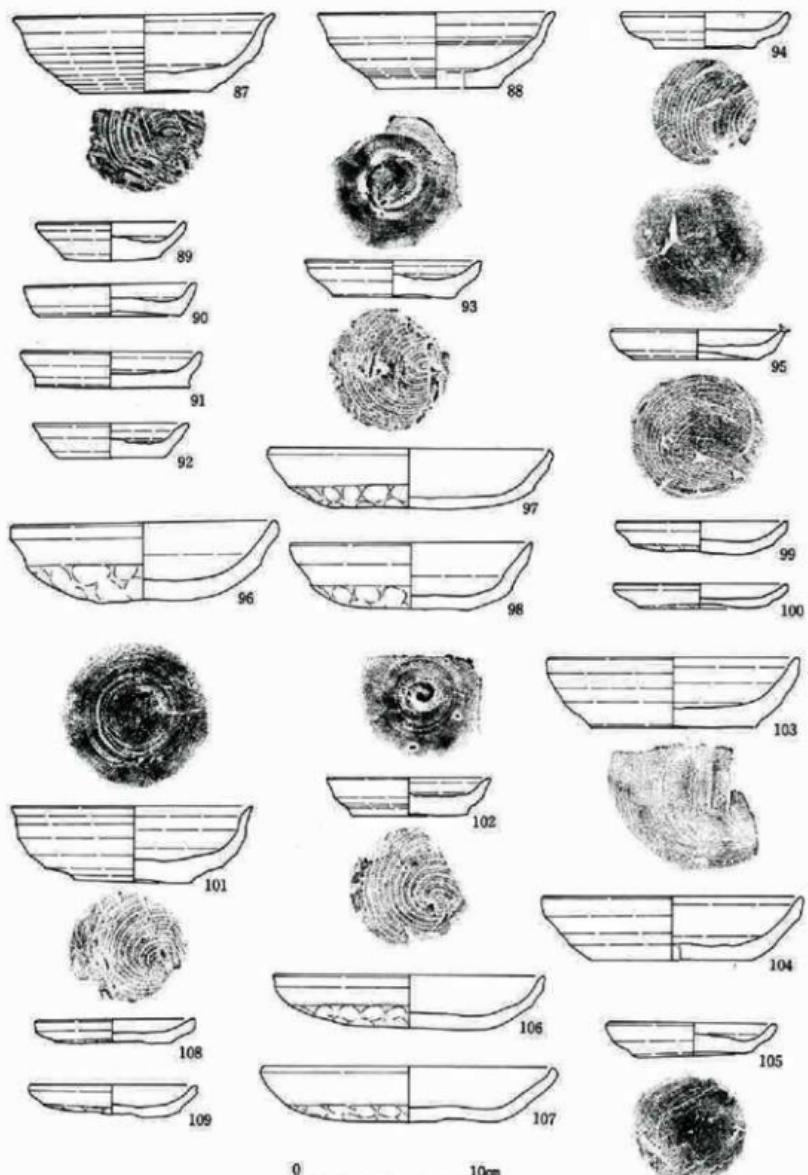


図26 かわらけ(3)

#### 4 金属製品 (図27・28、図版)

##### 1 野轡 [のぐつ]

外面の外側は銅の薄い板で、芯は鉄製である。銅板の縁を折曲げて鉄芯に巻き付けて被覆している。長さ23.9cm、中央部の幅2.8cm、厚さ約4mmである。左右対象形で両端は兜の錐形先端の形に似る・両端にはそれぞれ一孔の目釘孔が穿たれている。南北溝II下層出土。

野轡は馬具である。鞍の下に数かれる切付の保護と跨がる足の滑りを良くするために、切付の下部に付けられる金具である。

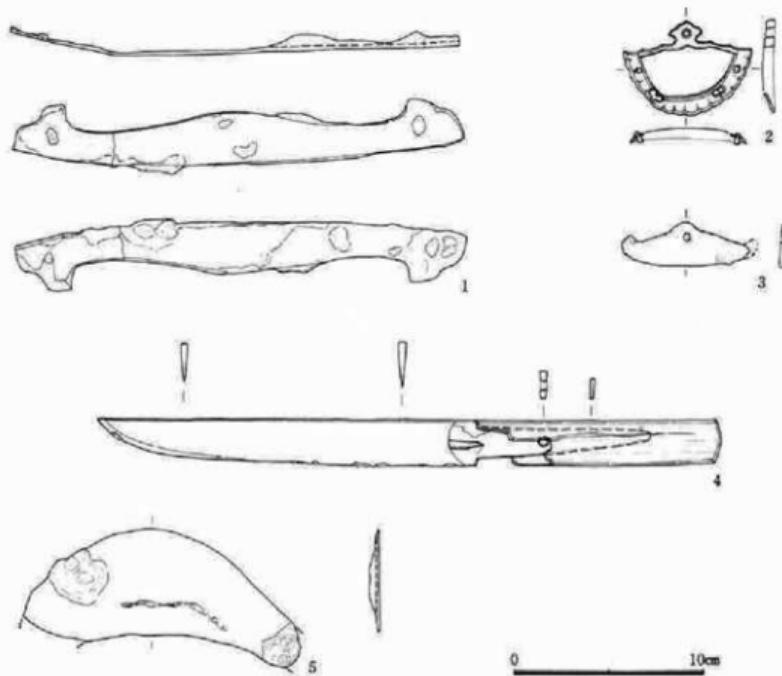


図27 金属製品

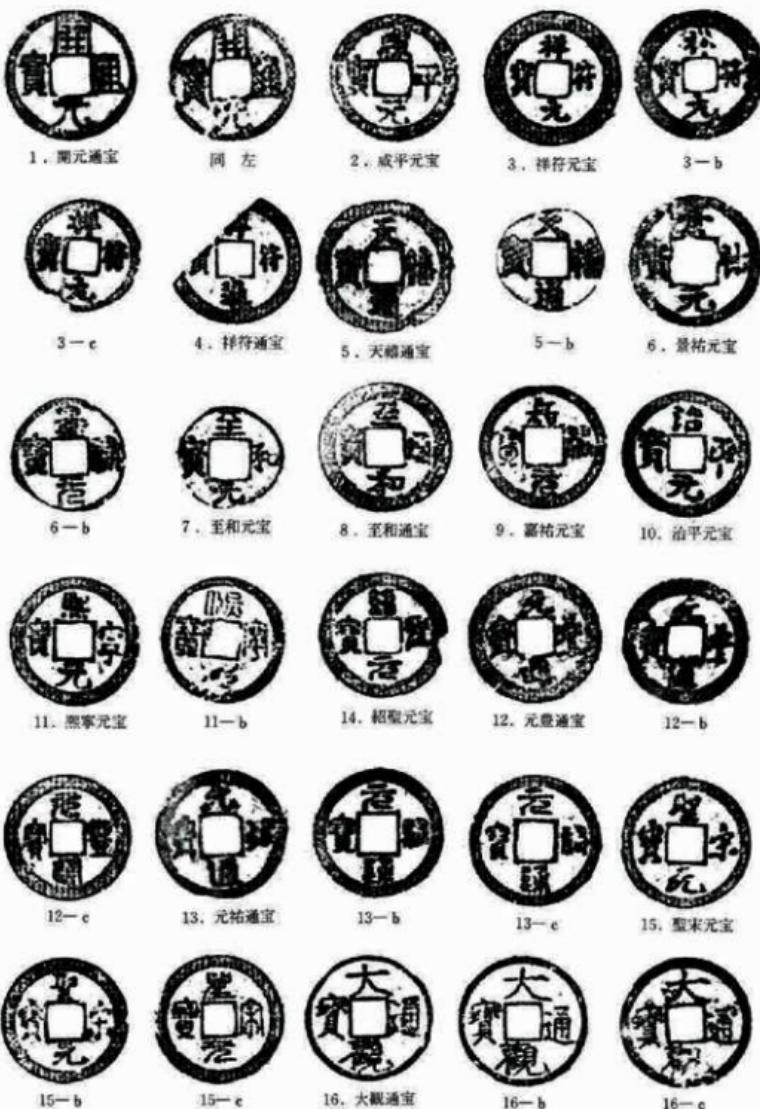


图28 出土古钱拓影

銭種	時代	初鉄	南北溝I	南北溝II	上層	その他	合計	備考
1 開元通宝	唐	621		1	1		2	加工銭A(1)
2 咸平元宝	北宋	998		1			1	
3 祥符元宝	北宋	1008		3	1		4	
4 祥符通宝	北宋	1008		1			1	
5 天禧通宝	北宋	1017		2			2	加工銭A(1)
6 景德元宝	北宋	1034		1		1	2	建物2(1), 加工銭A B(2)
7 至和元宝	北宋	1054		1			1	加工銭A(1)
8 至和通宝	北宋	1054		1			1	
9 嘉祐元宝	北宋	1056		1			1	
10 治平元宝	北宋	1064		1			1	
11 熙寧元宝	北宋	1068		1	1		2	加工銭B(1)
12 元豐通宝	北宋	1078		2	1		3	
13 元祐通宝	北宋	1086	1	2	1		4	
14 紹聖元宝	北宋	1094		1			1	
15 壬戌元宝	北宋	1101		4			4	
16 大觀通宝	北宋	1107		2		1	3	東西溝II(1)
計			1	25	5	2	33	

※加工銭は、Aが削経、Bが孔

表1 出土古銭一覧表

## 2 節り金具

銅製の分銅型の金具である。7ヶ所孔が穿たれ2ヶ所に釘が残る、弧を描く周縁に花弁が刻まれる。用途は不明である。東西溝II下層出土。

## 3 火打ち金

鉄製で、長さ約7cm、幅2.3cm、厚さは上部で1mm、下部で3.5mmである。粗通しの孔が1ヶ所穿たれている。F-2区下層遺構面上出土。

## 4 短刀

刃長20cm、柄長12.8cm（茎9cm）、刀幅2.4cmである。刀長と茎の境には刃区、棟区が付く。反りはほとんどつかず、刀の両面には鎬筋がない平造りの短刀である。東西溝II下層出土。

## 5 鎌

鉄製で三日月形である。内側に刃が付く。F-2区下層遺構面上出土。

## 6 銭

遺構、遺構面から33枚の銭が出土している。そのほとんどが南北溝IIからの出土である。2枚の開元通宝の他はすべて北宋銭である。

## 5 石製品・骨貝製品（図29、図版13）

### 硯（1～4）

5点出土しているが、1を除いていずれを粘板岩製の長方形硯である。

1は滑石製で実用性ではなく、雄形であろうか。中央部に鉢形の突出がある。E-2区下層遺構面より出土。

2は周縁及び海部は欠損しているが、海部が狭まる台形型のものであろう。陸部中央はかなり磨滅して凹面を呈す。E-3区下層遺構面包含層より出土。

3は2と同様の台形を呈す形で、周縁に波状の文様を彫っている。建物2より出土。

3は出土した5点の中では最も大型のもので裏面には線彫の沈線がある。南北溝Ⅱより出土。

### 砥石（5～9）

5は長方形を呈し、厚い板状のもので、片方向がかなり磨滅して薄くなっている。両側面も研磨されている。比較的硬質の砂岩質の石材で、荒砥に用いられたものか。建物2より出土。

6は硬質の泥眼製で、長方形を呈し、板状。底面は極めてなめらかで、裏面は比較的研磨が弱い。側面は鋸断の痕跡が認められる。仕上げ砥に用いられたものか。南北溝Ⅰより出土。

7は凝灰岩製で長方形を呈す。中心部がかなり摩耗しており、側面も良く研磨されている。中底に用いられたものか。南北溝Ⅱより出土。

8は硬質の凝灰岩製で、比較的大きな石材から作られたものか。中心部に向かってかなり摩耗している。側面も良く研磨されている。荒砥に用いられたものか。E-2区下層遺構面より出土。

9は硬質の泥岩製。仕上げ砥に用いられていたものと思われるが、底面にV字の溝状に鋭い削痕がある。側面及び裏面の研磨はごく弱い。E-1区下層遺構面より出土。

### 滑石製鍋（10）

口径15.4cm、器高8.4cmである。滑石製鍋としては比較的小型のものである。底面は剥離しているが、その面にも煤が付着しており、底面剥離後も使用されていた可能性がある。口縁部外周に小槌状のレリーフを装飾的に3ヶ所施しており、ごく特異な資料である。南北溝Ⅱ下層より出土。

### 骨製品（11～17）

11・12共に笄。南北溝Ⅱより出土。13は南北溝Ⅱより出土。笄の先端を削り二次的な加工を施して転用したものか。用途は不明である。14もこれとほぼ同様。E-3区上層遺構面より出土。15は針状に加工された製品である。一方の先端は欠損しており、用途は不明である。南北溝Ⅱ最下層より出土。16は鹿角と覚しきものを、部分的に滑らかに研磨しており、製品に加工する途中のものであろうか。G-1区下層遺構面包含層より出土。17は16と同様に鹿角を製品に加工する途中のものか。V字形の鹿角を角柱状に削っている。E-2区下層遺構面より出土。

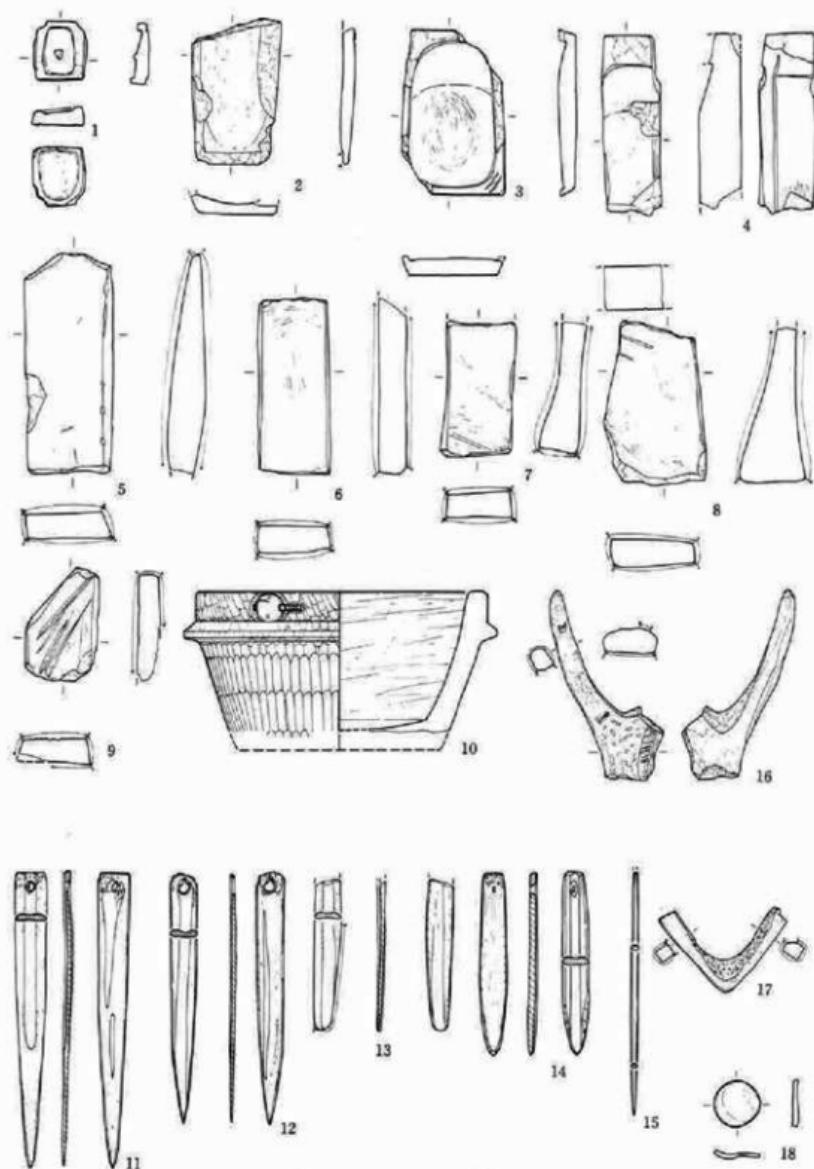


図29 石製品・骨貝製品

### 貝製品 (18)

厚さ2mm弱、直径約2.5cmのほぼ円形に加工された製品である。表は光沢を持ち、裏面は貝肌を残す程度に弱く削られている。E-1区上層遺構面より出土。

### 6 漆器・木製品 (図30-31、図版14)

#### 漆器 (図30-1~10)

小片は多く出土したが、比較的の残存状態の良い物を載せた。なお、ここに挙げたものはいずれも桙目材を用いて作られた製品で、黒漆を地として本地に直塗りをしている。

1は碗で、土圧によりかなり歪みを正している。おおかたの法量は、口径14.9cm、器高5cm、底径6.8cmである。内外面に朱漆で、格子、菊花の文様を施している。輪高台で体部への立ち上がりはなだらかである。南北溝Ⅱより出土。2は皿で口径9.8cm、器高1.2cm、底径7.9である。内底面に朱漆で菊花の文様を描いている。外面の文様は、剥がれ落ちたものか不明瞭でない。総高台状に残した底面を削って上げ底風にした、薄手のもの。建物2より出土。3は皿で口径10.9cm、器高は概ね2.5cmである。内外面に朱漆で萩・衆・鳥の文様を描いているが、小片のため全体の図柄構成は知りえない。高台部は欠損しているが、輪高台をなすものと観察される。南北溝Ⅱより出土。4は皿で口径9.9cm、器高1.5cm、底径7.6cmである。内底面に朱漆で施文されていた痕跡があるが、磨滅しており図柄は不明瞭である。総高台で、底面を粗く削って僅かに上げ底風にしている。E-2区遺構面包含層より出土。5は椀の底部を花弁状に加工したもので、底径7.8cmである。内底面には朱漆で花弁が描かれている。この中心部を穿ち、胴部を削って台状にしている。欠損も見られるが、8弁をなしていたものであろうか。用途は不明である。E-3区下層遺構面より出土。

6~10は無文の椀・皿である。

6は椀で底径7.7cm、気候は概ね6.5cmである。本地の仕上げは比較的粗く削られており、漆も薄く施されている。総高台で、底面を削り歪められ、胴下部の器肉は厚い。南北溝Ⅱ下層より出土。7は椀で口径14.4cm、器高5cm、底径7cmである。輪高台を持ち体部中程に3条の凹線が巡っている。器肉は薄手で、漆は比較的厚く塗られている。E-2区下層遺構面包含層より出土。8は皿で口径12.9cm、器高3.2cm、底径6.9cmである。輪高台で器肉は薄い。漆は厚く塗られている。E-3区下層遺構面より出土。9は椀で底径7.4cmである。高台の形態は6に近似しているが、胴下位から胴部にかけての器肉の厚みが比較的均等である。底面に円形の圧痕が見られるが、轆轤痕であろうか。東西溝Ⅱより出土。10は胴部から口縁部が欠損しており口径、器高共に不明の椀である。極めて特異な器形で、底部が丸く削られる。胴下位は段差を削り出している。東西溝Ⅱより出土。

#### 櫛 (図30-11、12)

2点ともいずれも黒漆塗りの横櫛で、南北溝Ⅰより出土している。

11は欠損のため幅は知り得ない。櫛の厚みは、約9mm、歯間は約2mmと粗い。12は幅8.5cm、櫛

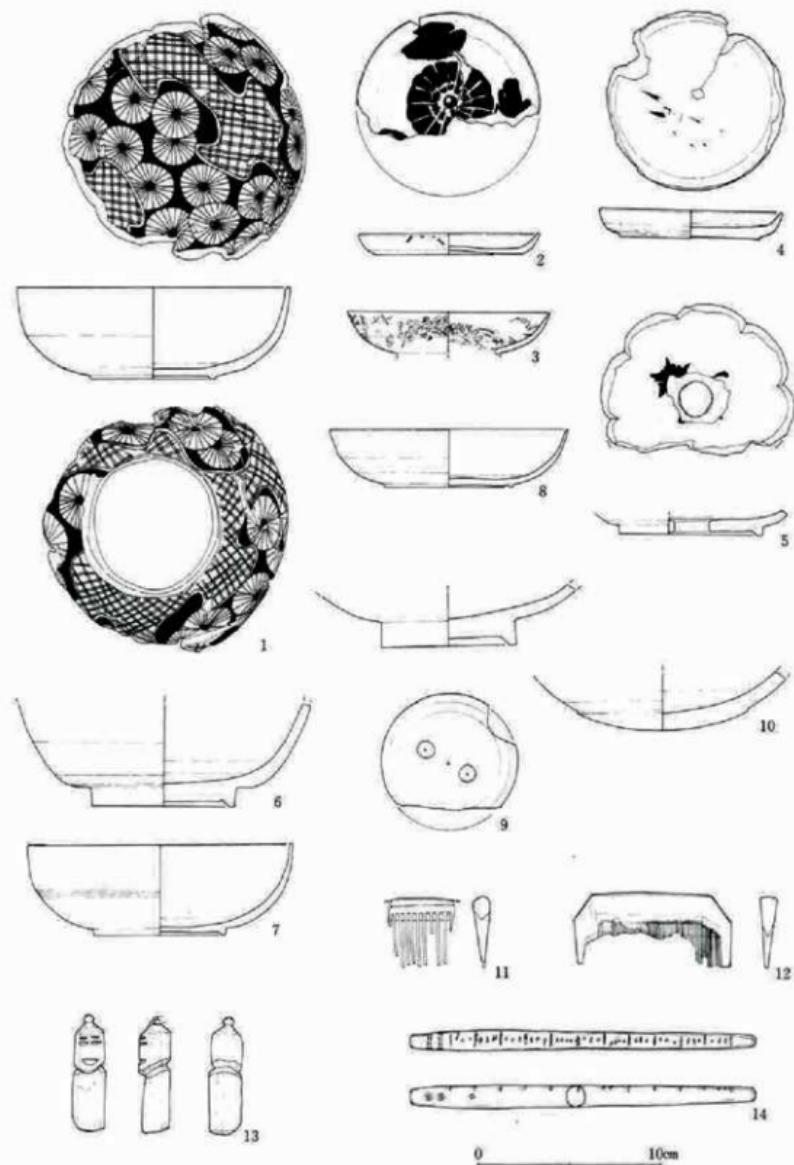


図30 漆器・木製品

の厚み9mmである。棟が広くその両隅を切り落とした六角形型で、市内遺跡出土の櫛としては非常に珍しい。歯間にごく密である。

#### 人形 (図30-13)

こけし状の武人像である。鳥帽子の先端部は欠損している。粗い削りで成形され、刃先で浅く肩、目、口を削り込んでいる。東西溝Ⅱより出土。

#### 棒秤 (図30-14)

棒状に削られた木製品で、長さ18.7cm、最大径1.1cmである。約1.4cmの間隔に大きな目盛りが刻まれ、さらにその間を四等分する小さい目盛りが刻まれている。先端から1~3.3cmの間に3ヶ所の穿孔があり、先端寄りの2孔が貫通している。

先端よりの2孔に紐を通して皿に下げ、残りの1孔にも紐を通してこれを支点として用いたものであろうか。土塙1より出土。

#### 墨書き木製品 (図31-1~5)

1は長さ62cm、最大幅3.4cmである。上部を主頭状に削り、下部を先細りにした札状のもので、片面に墨書きが見られる。「尺」又は「見」、「法」又は「徒」と覺しき二字が比較的明瞭であり、この上下にも墨書きの痕跡が認められるものの判読は難しく、従って二字の意味も不明である。東西溝により出土。

2は長さ16.3cm、最大幅2.3cmである。上部両端に切れ込みを入れ、下部は先細りに削ったもので、荷札として用いられたものか。墨書きは判読できない。南北溝Ⅰ下層より出土。

3は板の本來の大きさは欠損のために知り得ない。片面に墨書きが見られる。墨書きは比較的明瞭であるが、文字であるか、戲画的なものであるか判断できない。南北溝Ⅱ下層出土。

4は幅2.5cmで、上部を主頭状に整形しその両側に二ヶ所ずつの切れ込みを入れる、板牌伝。墨書きは「南无阿彌陀」と見える。裏面には墨書きはない。東西溝Ⅱ下層より出土。

5は幅34.1cm、厚さ約3mmの板に「田」「日」「一」状の墨書きが見られる。文字というよりは符印として用いている可能性が強く、呪符であろうか。裏面にも墨書きがあるが不鮮明で判読はできない。

#### 7 その他の遺物 (図版15)

調査区西側、E軸より西の調査区で出土した主な遺物について記すことにする。なお、定窯の白磁については出土した遺物1船載陶器 (図版19-37、図版9-9) に図示した。

#### 和鏡 (3)

B-3区下層遺構面上包含層出土。飛雲松鶴蝶鏡。面径11cm、高さ0.8cm、外区径10.2cm、内区径8.2cm、紐座2cmを測る。紐座は菊花文状に作る。文様は内外区に一对の鶴と蝶が向かい合って配され、松が界線を抉んで巡っている。

#### 鏡箱蓋 (2)

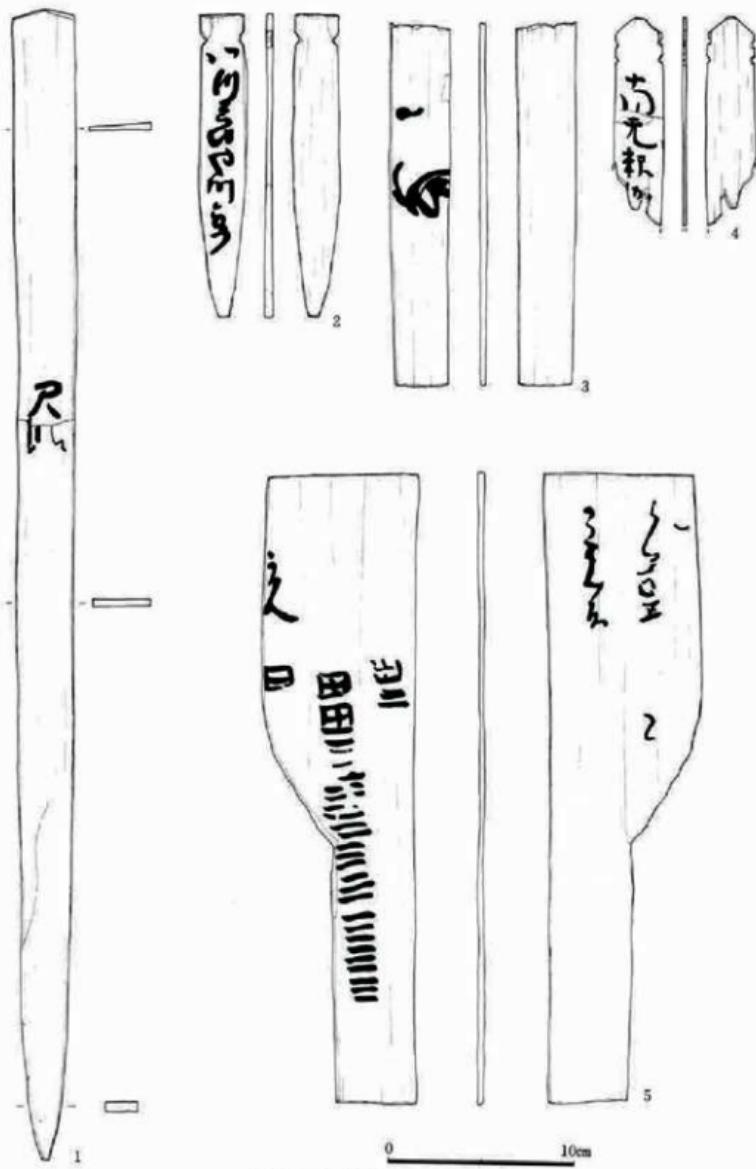


図31 図書木製品

B-4区下層遺構面上包含層出土。錫蒔絵の鏡箱蓋である。直径12.1cm、内・外面に蒔絵を描く。外面の文様は大半を欠くが力強い筆運びで、黒漆地に流水文と波紋を描いている。内面は水辺の小鳥に草木が生え、空に雁が飛ぶ姿は、自然の空間を構成し豊麗さが加わっているようである。周縁には上蓋の凸起の痕跡が見られた。

#### 双六盤（1）

B-4区上層遺構面上出土。

厚さ1cm程の杢目材を使用した双六盤である。平面を欠損するが、復元可能であり、縦35.8cm、横27cm程を測る。表面の盤中央部に「革」印を入れ、左右を均等に六つ割りした線形に墨入れされている。裏面には「雙六番也・・・奉為・・・花押」の墨書きが認められる。この墨書きはおそらく、双六盤の作者の手によるものであろう。遺存する双六盤の四隅には木釘穴が穿たれており（一部木釘有り）、箱物のこしらえと思われる。

#### 鞍（4）

D-2区下層遺構面上包含層出土。螺鈿造軍鞍の後輪片である。後輪の左半上部が残存し、幅16cm、高さ10cm、下部厚4.5cmを測る。黒漆による地に細かな螺鈿を飛雲文状に貼り付けている。欠損面は焼け焦げている。

#### 珠玉（5）

A-1区下層遺構面上柱穴出土。木製の数珠は大・小31点出土した。大型のものは1点で直径2cm、厚さ6mmであった、小型のものは直径1.2~1.4cm、厚さ5mmを測る。形状は算盤玉を呈し、中央に小さな孔をもうける。

## 第五章 まとめ

上・下層遺構の年代観について

### 上層遺構

この面で検出した遺構は、南北に走る木組溝（南北溝Ⅰ・Ⅱ）・柱穴列（柱穴列1～3）と、それに直交又は平行方向に位置する建物（建物1・2）や溝（調査区北壁直下）などである。南北溝Ⅰ・Ⅱは木組の構造や規模から推察して、若宮大路の側溝（西側）と考えられる大溝であり、この西側肩上で検出された柱穴列1～3は、大溝側溝とセットになる構列又は塀といった構築物が想定されよう。南北溝Ⅰ・Ⅱの構築方法は逆台形の箱状に掘った基底部の両側に枘穴をもつ角材を、各枘穴の位置が対応するように平行して置き、両側に枘のある東柱の各材を建てて、その裏側に横板を並べて土留めとしている。東柱の上部（下部にも使用か）には内部への倒壊を防止する為の梁（突張り）をわたした構造を持っていた。また南北溝Ⅰ・Ⅱは後代の改修や削平により埋されているが、南北溝Ⅱ検出の東材（角柱）の長さから推定して、大路側溝の深さは150cm程度になる。溝肩は現在の若宮大路歩道の標高とさほど変わらない高さまであったと推測される。この大路側溝の構造は、「北野天神縁起」<sup>11)</sup>の昔原は善邸前の溝や「蒙古襲来絵詞」<sup>12)</sup>の安達泰盛邸前の溝などに出てくる木組溝と似た構造を持っており、当時の溝の構築方法の一端を伺うことができた。

建物2は地面を浅く掘り込み、板を網代に組んだ側壁に立ち上げた建物で、中に2間×2間の柱穴が見られたことは、その構造から見ていわゆる方形堅穴建築跡とは異なった居住施設と考えられる。<sup>註3)</sup>

この上層遺構に伴う遺物は、蓮弁文青磁・口元白磁皿等が多く、またかわらけは厚手で器高の低いものが中心である。若干年代的に混乱しているように思うが、こういった諸様相は、およそ14世紀前半を前後した年代が考えられる。

### 下層遺構

上層遺構下から確認された遺構群のすべてを、この下層遺構面（中世基盤層上）で検出した。この面で検出した遺構は掘立柱建物（建物3・4）・溝（東西溝Ⅰ・Ⅱ）や井戸・井戸状遺構・開炉裏などである。

建物3・4と東西溝Ⅰなどの遺構は、若宮大路を基軸とした地割り（街割りか）の方向性を持つており、この地割りは先述のごとく上層遺構にも踏襲されていた。しかし調査区北端検出の東西溝Ⅱは、軸方位が若宮大路を基軸とした地割りの方向性とは異なる遺構である。この溝は黒褐色粘質土（中世基盤層）をベースにした締まりの強い覆土で、出土する遺物から見ても概ね13世紀前葉まで遡り得る遺構であることは、若宮大路の整備や計画的な街割りが形づくられる以前の様相を示しているのかも知れない。

開炉裏は小型の方形を呈するもので、板組の下部構造のみが検出された。開炉裏に関しては、未

報告分の調査区西端の上層造構で建物に伴う例を含めて3基の遺存状態良好なものが検出されている。この圓柱裏の構造は、四隅に支柱（枕状に打ち込む）を建て、各支柱に横桟を開拓状に渡す。横桟の内に差し込む形で縦板を横に並べている。本例もこれに近い構造を持っていた圓柱裏と思われる。

この下層造構に伴う遺物で、鉢載陶器の主体が龍泉窯系割花文碗と同安窯系櫛描文皿にあり、国产品では渾美や常滑窯の口縁に絞帯を持たずに、口端部を上方へつまみだしたものである。かわらけを見ると、手捏ね成形は薄手で器高の低いもの、体部下半に強い稜をもち口端部が尖るもの、体部後が弱く丸みをもつものなどがある。輪軸成形は内底面無調整で輪軸目の強い底部が高台状に残るもの、器高が低く底径の大きなものや、体部に強い丸みをもち底部の厚いものなどである。こういった出土遺物の諸様相は、およそ13世紀前半～中葉を中心とした年代が考えられる。

以上簡単に上・下層造構の年代を述べてきたが、本地点の中世造構群は13世紀～14世紀中葉頃に營まれたものと考えられる。

#### 若宮大路側溝について

ここでは本地点東端で検出した若宮大路側溝と思われる本組大溝の規模などについて触れ、さらにこの溝と似た構造を有した溝が周辺の発掘調査によって確認されており、この点も含めて若干述べて行くことにしたい。

まず本地点の南北溝Ⅰ・Ⅱについてみる。南北溝Ⅰ・Ⅱの幅は、両角材間の芯々で測ると、Ⅰが約270cm、Ⅱが約300cm程になり、これは尺寸に直すとⅠが9尺、Ⅱが10尺（1丈）となる。深さはⅠが不明であるが、Ⅱは束材の高さから150cm程であり、約5尺ということになる。

つぎに図32を見ながら本地点検出溝と、B～E地点（本報告のみの仮称）の本組溝を対比させて、若宮大路の幅員や街割りについて触れたい。若宮大路の幅員は本地点の側溝東肩（肩は角材の意味であり、以下同様）からC・D（雪ノ下一丁目327-7・同371-1地点）地点で確認された側溝西肩までの距離が33.6mであり、約112尺（11.2丈）となる（現在の幅員約25.5m）。E地点（雪ノ下一丁目233-9他地点）西端検出の南北溝東肩と、本地点側溝西肩までは南北溝Ⅰで測ると64.4m、215尺強（21.5丈）で、南北溝Ⅱで測ると64.3m、214尺強（21.4丈）程であり、また本地点側溝東肩までの距離は、67.3mで、224尺強（22.4丈）程である。この数値は、多少の誤差を考慮に入れても、若宮大路の幅員のはば倍に相当している。このことは、本地点及び周辺の調査地点で検出された造構の軸方位が若宮大路基軸と対応関係にあることと考え合わせて、大三輪龍彥氏が指摘しておられる鎌倉の丈尺制の問題を、今後検討していく必要があろう。<sup>註4</sup>

尚、中国陶磁窯跡同定は、故三上次男博士にお願いした。博士からは調査現場において種々の御指導をいただいたが、鎌倉で御指導いただいた最後の遺跡となってしまった。博士の御冥福を心よりお祈りしたい。

註

- 1 池沢敬三・日本常民文化研究所編「新版絵巻物による日本常民生活紹引」第1巻平凡社1984年、120図
- 2 「蒙古襲来絵詞」恩賛奉行安達泰盛邸の門前に板橋とともに描かれている。
- 3 未報告分の上層造構で調査区西端検出の間が裏をもつ建物と類似する。また、鶴岡八幡宮内発掘調査報告書「研修道場用地発掘調査報告書」森木秀雄「検出された遺構」Fig 15の第2方形堅穴建築跡と、規模等異なるが構造的には近いものがある。
- 4 大三輪龍彦「中世都市筆倉の地割制試論」「仏教藝術」164号毎日新聞社1986  
尚、若宮大路側溝に関しては、馬淵和雄氏から多大な御教示を受けた。記して感謝する次第である。

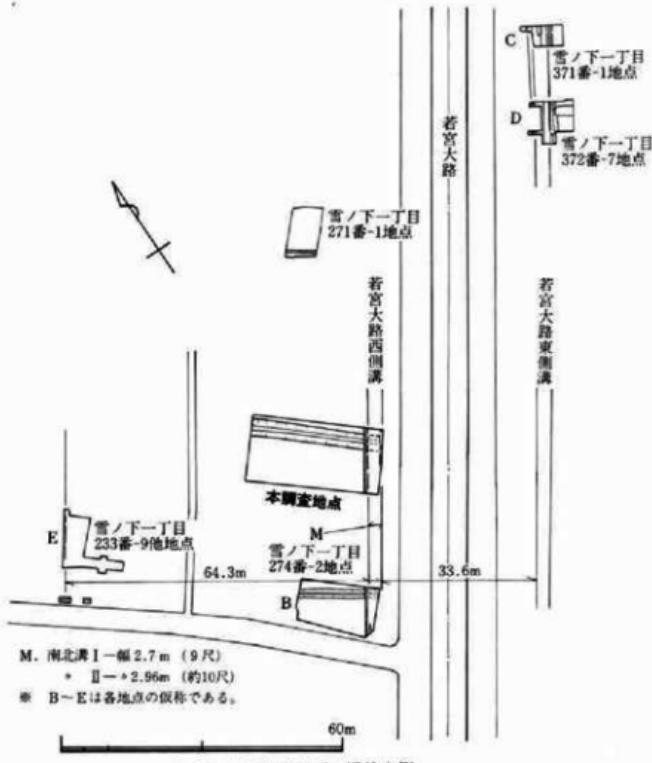


図32 調査地点付近の溝検出例



現地指導を行う故三上次男博士

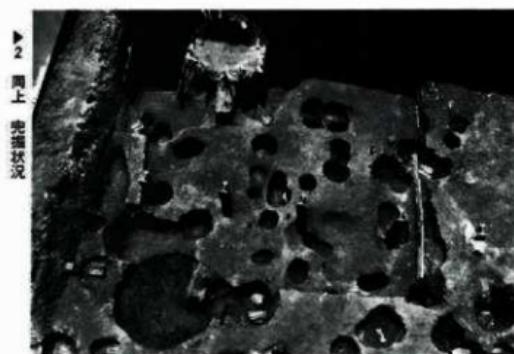


▲1 上層造構調査区西側全景（東から）

▼2 上層造構調査区東側全景（東から）



图版 2



▼ 3 同上 湖代壁 (西壁)



▼ 4 梅花天目出土状况(建物 1)



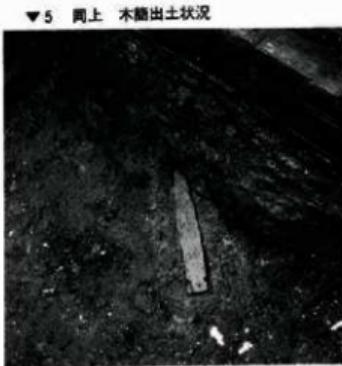
▲1 南北溝Ⅰ（南から）



▲2 同左（北から）



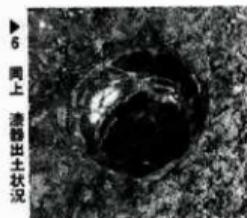
▲3 同上 桧（ひのき）



▼5 同上 木筋出土状況



▼4 同上 土留め桿



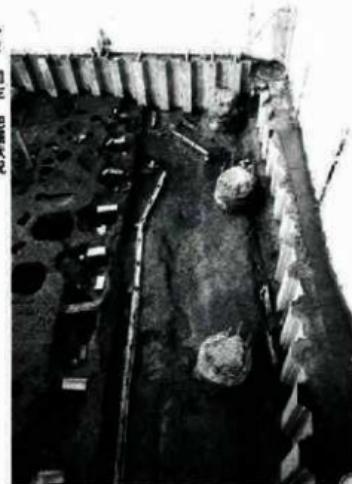
▼6 同上 陶器出土状況



▲1 南北河Ⅱ（東から）

▼2 同上 実測状況





▼4 同上 角材縫目部分



▼5 同上 蔽苔出土状況



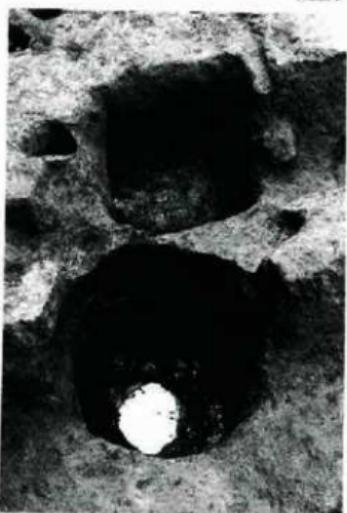
▲1 下層発掘調査区西側全景（東から）

▼2 東西溝Ⅱ 東端（東から）

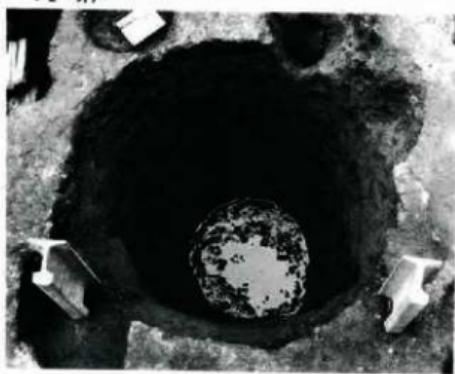




▲ 1  
出土状況



▲ 3 井戸状造構 1・2



▼ 2 井戸

▶ 4  
計測出土状況





▲1 東西溝Ⅱ検出状況



▲2 東西溝Ⅱの横脚状造橋



▶3

刀子出土状況(東西溝II最下層)



▶4

中世以前の造橋



▲ 1 莲花文青磁碗



▲ 2 带描文青磁皿



▲ 3 花卉文青磁皿



▼ 4 白磁口无皿



▲ 5 莲井文青磁碗



▲ 6 青磁小壺



▲ 7 青白磁合子



▲ 8 吉州窑梅花天目茶碗



船载陶磁器



▲1 山茶碗



▲2 指鉢



▲3 常滑・瀬戸



▲4 常滑直口壺



▲5 耳器・早島式土器



▲5 手焼



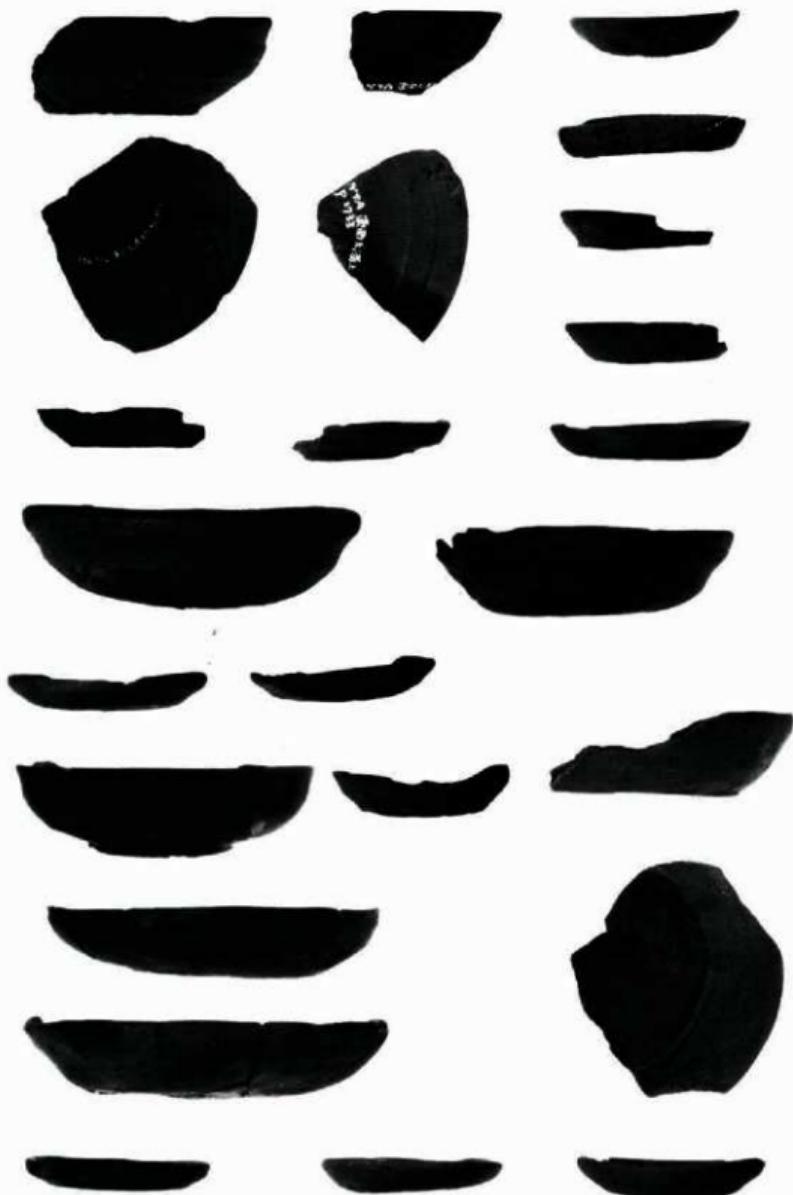
▲6 墓窯かわらけ



▲7 白かわらけ



国産陶器、瓦・土製品



かわらけ(1) 東西溝Ⅱ出土



かわらけ(2)



◀ 1 滑石鍋

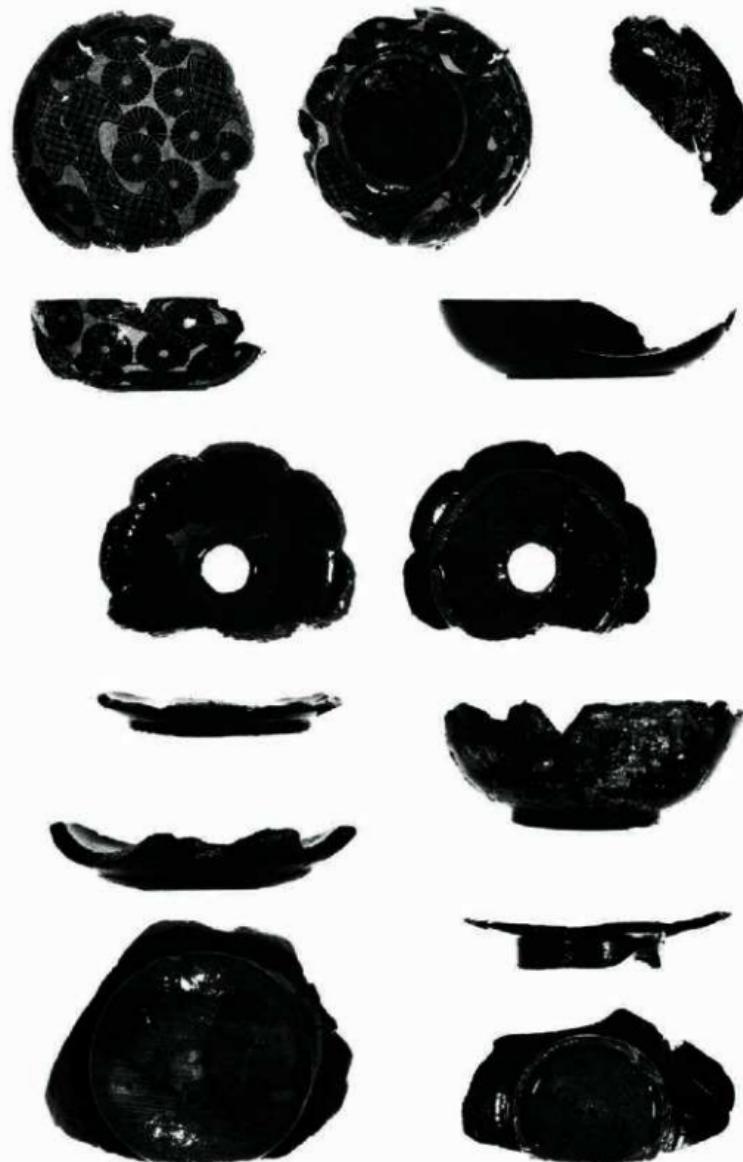
▶ 2  
視



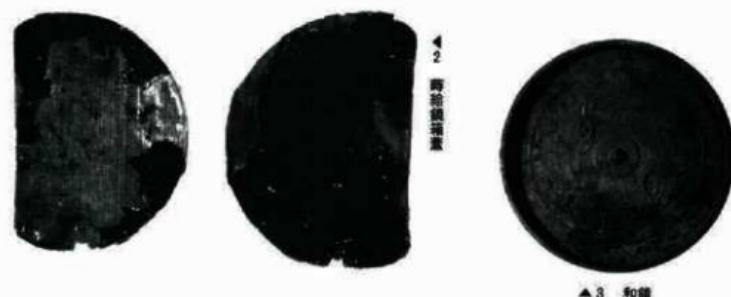
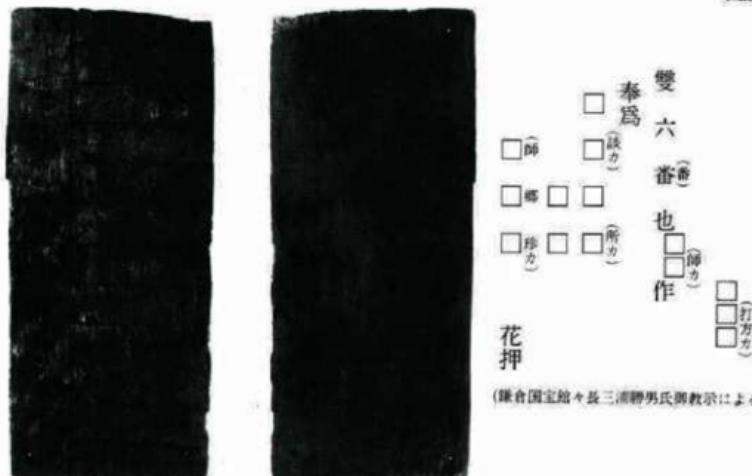
▼ 3 骨貝製品 石製品・骨貝製品



石製品・骨貝製品



漆器



その他の遺物

## 2. 若宮大路周辺遺跡群

由比ヶ浜一丁目128番7地点

## 例　　言

1. 本報は、鎌倉市由比ヶ浜一丁目128番7地點における店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる南側3分の1の報告である。

2. 本報の執筆は馬渕和雄が、図版作成には馬渕・渡部律子があたった。

3. 本報で使用した写真は、遺構・遺物とともに馬渕が撮った。

4. 調査体制は以下の通り。

担当者　　馬渕和雄（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員　　浜口 康・田代郁夫

調査補助員　田畠佐和子・宮田裕美・清水菜穂・渡部律子（資料整理）小林康幸

5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 発掘調査、および資料整理に際には、以下の諸氏、諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

手塚直樹・河野真知郎・齊木秀雄・大河内勉・原廣志・宮田真・宗豊秀明・木村美代治・菊川英政・武淳一・村上和久・瀬田哲夫・ホップ黄子・及川加代子・吉田章一郎・石井進・大三輪龍彦・清水信行・江上幹幸・伊藤正義・柳川清彦・中田英・佐久間貴士・成田サキ・川名由子・荒井その・鎌倉市高齢者事業団・大洋建設

## 目 次

例 言.....	(78)
目 次.....	(79)

## 本 文 目 次

第一章 調査地点の位置と環境.....	(81)
第二章 調査の概要と経過.....	(84)
第三章 遺構と遺物.....	(86)
第1節 層序.....	(86)
第2節 上層の遺構と遺物.....	(86)
第3節 中層の遺構と遺物.....	(95)
第4節 下層の遺構と遺物.....	(106)
第5節 古代の遺物.....	(109)
第四章 まとめ.....	(111)

## 挿 図 目 次

図1 近辺の主な発掘調査地点.....	(82)
図2 調査区設定図.....	(85)
図3 上層遺構群全体図.....	(87)
図4 土壌1・2.....	(88)
図5 上層遺構面上包含層出土遺物(1).....	(89)
図6 上層遺構面上包含層出土遺物(2).....	(91)
図7 上層遺構面上包含層出土遺物(3).....	(93)
図8 上層遺構面上包含層出土遺物(4).....	(95)
図9 中層遺構群全体図.....	(96)
図10 方形竪穴建物4.....	(97)
図11 方形竪穴建物4出土遺物.....	(98)
図12 方形竪穴建物5.....	(99)
図13 方形竪穴建物5出土遺物.....	(100)
図14 道路状遺構断面図.....	(101)
図15 道路状遺構泥岩敷面上出土遺物.....	(102)
図16 道路状遺構側溝1上層出土遺物(1).....	
図17 道路状遺構側溝1上層出土遺物(2).....	(103)
図18 道路状遺構側溝1下層出土遺物.....	(104)
図19 道路状遺構側溝2出土遺物.....	(106)
図20 下層遺構群全体図.....	(106)
図21 土壌27.....	(107)
図22 下層遺構面上包含層出土遺物(1).....	(108)
図23 下層遺構面上包含層出土遺物(2).....	(109)
図24 古代の遺物.....	(110)

## 図 版 目 次

図版 1-1 調査前近景	(113)	図版 6-4 備前	(118)
1-2 全景(南から)	(113)	6-5 潤戸	(118)
図版 2-1 全景(東から)	(114)	図版 7-1 常滑(甕・壺)	(119)
2-2 道路状遺構(東から)	(114)	7-2 同上(捏ね鉢)	(119)
図版 3-1 道路状遺構側溝1土層断面	(115)	図版 8-1 山茶碗窯系陶器	(120)
3-2 同上 側溝2土層断面	(115)	8-2 同上	(120)
3-3 土壌1(東から)	(115)	図版 9-1 かわらけ(手捏ね成形)	(121)
図版 4-1 方形竪穴建物4	(116)	9-2 同上(ロクロ形成)	(121)
4-2 同上(泥岩敷除去後)	(116)	図版 10-1 手培り他土器類	(122)
図版 5-1 青磁	(117)	10-2 白かわらけ	(122)
5-2 白磁	(117)	10-3 土製品	(122)
5-3 青白磁	(117)	10-4 石製品	(122)
図版 6-1 濡美(捏ね鉢)	(118)	図版 11-1 木製品	(123)
6-2 同上(甕)	(118)	11-2 古代の土器	(123)
6-3 魚住	(118)		

## 第一章 調査地点の位置と環境

由比ヶ浜一丁目128番地点は、「若宮大路周辺遺跡群」(県遺跡台帳番号242)の西南隅にあって、国道134号線に臨んでいる。東の若宮大路まで直線距離で約230m、西の今小路までは、同じく約40mを測る。この付近は海岸沿いの砂丘地帯の北辺に相当し、本地点の北約70mに位置する由比ヶ浜一丁目118番地点の調査<sup>注1</sup>(図1の32)では砂の基盤層が検出されているのに対し、同地点から通り一本挟んだ北側の今小路西遺跡(仮称社会福祉総合センター建設予定地)の調査<sup>注2</sup>(図1の13)では黒色泥炭質の基盤層が認められるので、確かに本地点のすぐ北側付近に砂丘地帯の北限があると思われる。

従来まで、鎌倉市内の発掘調査は駅付近から鶴岡八幡宮にかけての若宮大路沿いに多く実施される傾向にあったが、近年は国道134号線の長谷小路付近とそれ以南の、長谷、由比ヶ浜といった辺りにも調査が増えており、この近辺の砂丘地帯の様相は徐々に明らかになりつつある。長谷小路南遺跡<sup>注3</sup>(図1の4)をはじめとして、一辺4~6mに及ぶ大きな方形堅穴建物が必ずといっていい程検出されるのがこの一帯の遺跡の特徴で、その性格と分布、年代、市内の泥炭質土上に築かれる方形堅穴建物との明らかな構造の差異は何に由来するのか、等々の解明は急を要する課題である。

ところで、中世にあって、由比ヶ浜一帯は前浜と呼ばれ、民衆の自由な活動が許されていた場であり、葬地でもあった。1953年に鈴木尚、三上次男氏らが行なった簡易裁判所敷地内の大量の人骨群の調査<sup>注4</sup>(図1の9)はそれを裏付けるが、この前浜の範囲も早くに明らかにされねばならない。

海岸砂丘地帯の北限に位置する本調査地点は、このように、大型方形堅穴建物の分布や葬地の範囲を特定する上でも軽んじることのできない場所にある。

中世以前に目を転じると、鎌倉郡街と覺しき古代の大規模な掘立柱建物群を検出した今小路西遺跡(御成小学校用地)<sup>注5</sup>は目と鼻の先であり、また幾つかの古代の堅穴住居が検出された鎌倉駅周辺や長谷小路周辺、下向原古墳群といわれる古墳群が存在していたという和田塚周辺等、いずれも指呼の距離にあり、これらの遺跡に挟まれた本地点が古代集落の一部を占めていたことは、ます確実である。

### 註

1 1987年度に馬淵が担当して調査。

2 1987年度に河野真知郎氏が担当して調査。

3 「長谷小路南遺跡——ダイヤモンドクラブ保養荘建設に伴う由比ヶ浜所在道路の発掘調査——」長谷小路南遺跡発掘調査団 1986

4 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」日本人類学会編 岩波書店 1956

5 河野真知郎「神奈川縣今小路周辺遺跡(御成小学校内)」「日本考古学年報」38 1985年版

図1 近辺の主な発掘調査地点



#### 図1調査地点名と文献

- 1 由比ヶ浜一丁目128番地点（本地点）
- 2 伝安達泰盛邸跡 1977年度調査 「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」 鎌倉市教育委員会 1983
- 3 日産保養社建設予定地内遺跡 1978年度調査
- 4 長谷小路南遺跡 1985年度調査 「長谷小路南遺跡」 長谷小路南遺跡発掘調査団 1986
- 5 長谷小路南遺跡（仮称第2地点） 1987年度調査
- 6 長谷小路南遺跡（仮称第3地点） 1987年度調査
- 7 長谷小路周辺遺跡 1987年度調査
- 8 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（仮称第1地点） 1986年度調査
- 9 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（仮称第2地点） 1986年度調査
- 10 材木座中世遺跡 1963年調査 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」 日本人類学会編 岩波書店 1966
- 11 小今路西遺跡（由比ヶ浜一丁目148番11地点） 1982年度調査 「神奈川県埋蔵文化財調査報告」 26神奈川県教育委員会 1984
- 12 小今路西遺跡（御成小学校建設用地） 1985・1986年度調査 河野真知郎「神奈川縣小今路周辺遺跡」『日本考古学年報』 38 1985年版他
- 13 小今路西遺跡（仮称社会福祉総合センター建設予定地） 1987年度調査
- 14 千葉地遺跡 1980年度調査 「千葉地遺跡」 千葉地遺跡発掘調査団 1982
- 15 御成町228番-2地地点遺跡 1985年度調査 「御成町228番-2地地点遺跡」 千葉地東遺跡発掘調査団 1987
- 16 訪訪東遺跡 1981年度調査 「源訪東遺跡」 訪訪東遺跡調査会 1985
- 17 御成町806-3番地地点遺跡 1981年度調査 「御成町806-3番地地点」 鎌倉考古学研究所 1982
- 18 千葉地東遺跡 1984年度調査 「千葉地東遺跡」 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986
- 19 蔽屋敷東遺跡 1981年度調査 「蔽屋敷東遺跡」 江ノ電鎌倉ビル発掘調査会 1983
- 20 蔽屋敷遺跡 1982年度調査 「蔽屋敷遺跡」 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984
- 21 小町一丁目75番地1号地点遺跡 1979年度調査 「小町2丁目61番地21号地点・小町一丁目75番地1号地点」 鎌倉考古学研究所 1982
- 22 小町二丁目61番地21号地点遺跡 1979年度調査 21に同じ
- 23 二ノ島居西遺跡 1977年度調査 2に同じ
- 24 小町二丁目345番-2地点遺跡 1983年度調査 「小町二丁目345番-2地点遺跡」 小町二丁目345番-2地点遺跡発掘調査団 1985
- 25 鎌倉スミミングスクール用地内遺跡 1978年度調査 2に同じ
- 26 小町一丁目309番5地点遺跡 1982年度調査 「小町一丁目309番5地点発掘調査報告」（推定） 駿内定貝跡発掘調査団 1983
- 27 烏森書店用地 1979年度調査
- 28 （推定） 駿内定貝跡遺跡 1979年度調査 「（推定） 駿内定貝跡遺跡」 鎌倉市教育委員会 1985
- 29 本覚寺旧境内 1982年度調査
- 30 大巧寺旧境内 1986年度調査
- 31 小町一丁目106番地点遺跡 1987年度調査
- 32 由比ヶ浜一丁目118番地点遺跡 1987年度調査
- 33 和田塚（一帯が下向原古墳群）
- 34-38 立合い等その他の調査地点

## 第二章 調査の概要と経過

1986年6月に敷地内の二箇所で試掘調査をした結果、地表下70~90cmまで近・現代の客土層が確認されたので、本調査に際しては約70cmの深度まで機械力を導入して排土した。掘削面積は建物建築にかかる約250m<sup>2</sup>、調査期間は1986年7月14日から同年8月31日までである。

調査にあたっては、調査区の平面形状に応じて、長軸沿いにA・B・C以下のアルファベット軸と、これに直交する1・2・3以下のアラビア数字軸を、各5m間隔に配した。アルファベット軸方位はN-48.5°-Wである（若宮大路はN-27°-E）。また調査の際の便宜上、国道134号線からみた調査区の奥を北と称することにした。各方眼区画の呼称は、（便宜上の）北西角の軸線交点を充てることとした。

なお、本調査は原因者負担と国庫補助によるものであり、本報に掲載するのは、図2に示した如くその割合2対1に応じた南側3分の1である。つまり約250m<sup>2</sup>のうち約83m<sup>2</sup>分を本報で報告する。ただし、境界上に位置する道路状道構に関しては、道構の性質からいって境界線で分断することは不可能なので、境界を越えてはいるが道構全体を掲載することとした。

調査の経過は概ね次の通りである。

7月14・15日 重機掘削

7月16日 粗掘り開始

7月21日 道構検出作業開始

7月22日 道方方眼設定

7月25日 上層道構掘り始める

8月12日 中層以下の道構掘り始める

8月25日 事務所部分の調査開始

8月29日 全景写真撮影

8月30日 南側深掘り

8月31日 機材撤収

なお、本文中で使用する「土丹」・「鎌倉石」は、それぞれ泥岩・凝灰角礫岩の当地方における呼称である。

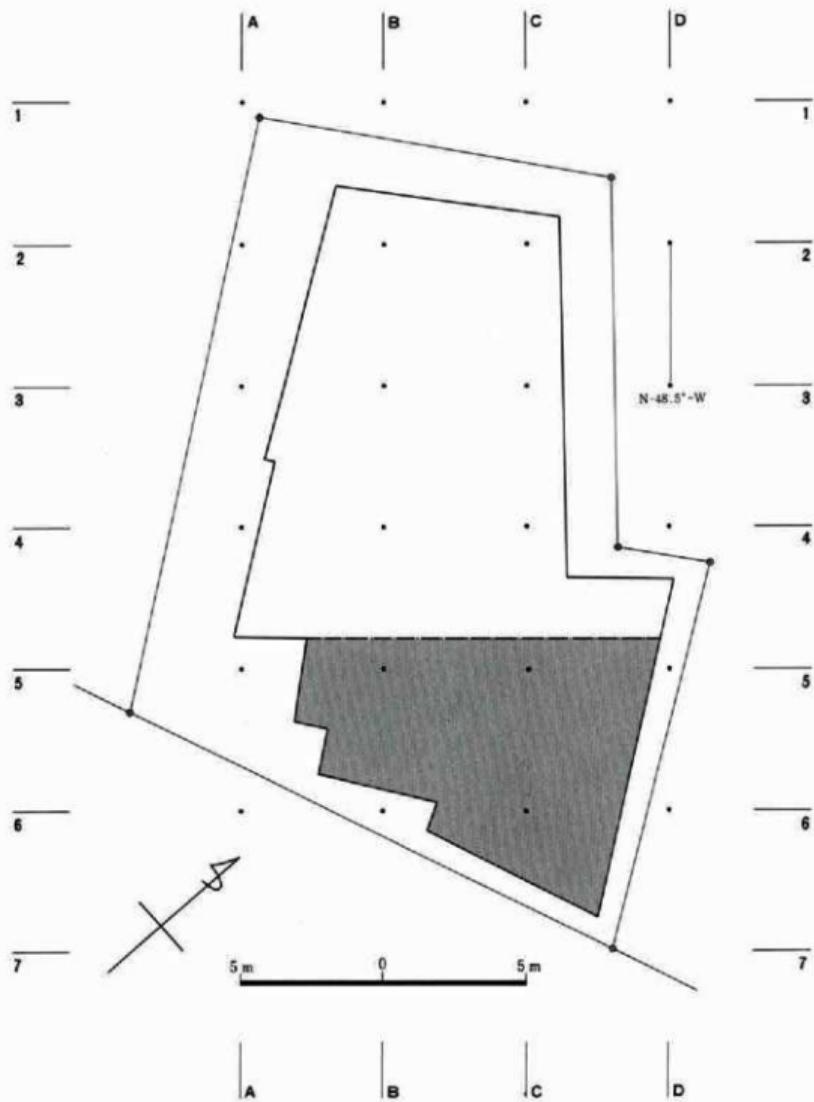


図2 調査区設定図（斜線部が本報掲載対象範囲）

### 第三章 遺構と遺物

#### 第1節 層序

調査区の全面にわたって、地表下70~90cm程度まで近・現代の客土層が入っており、これを除くとすぐに中世層に達する。この中世層は暗褐色で砂質、少量の土丹小塊や焼土等を含む比較的しまりの弱い土で、遺構面上の包含層を形成している。これは厚味が10~20cm程あり、遺構検出面はこの下にある（上層遺構面）。

上層遺構面は概ね暗灰色の砂層で、部分的に炭化物や貝片の散布する、ややしまりのある面である。中層の遺構群は上層遺構群と検出面は変わらないが、上層遺構群に切られる一群の遺構が確かに存在するためにこれを設定した。この事情は下層の遺構群においても同様であって、ここでは基盤層である黄褐色の砂層から切り込まれているものもある。

以上のことから推察されるのは、上層遺構群によって中・下層のそれが相当に削平されていること、大幅な年代の断絶は認められないこと、等である。なお本地点の基盤層は上層が黄褐色の砂層、深度を増すにつれて灰白色の細かな砂と褐色の粗い砂が互層を成す。基盤層上面は海拔6.6~6.7mであり、地表下110~120cmで検出される。

#### 第2節 上層の遺構と遺物

切り合ひ関係から層位的に上であると判断した遺構は図3に示した通りである。土壤22基、方形堅穴建物2棟、柱穴5口がその内訳であるが、その殆どが5軸より北側に集中しており、本報で詳報する対象となるのは土壤1・2である。

##### 1. 土壌1（図4）

C-6北西角にある。東端が切られているが、東西165cm以上、南北145cm、深さ22cmの不整指円形で、底面中央におそらく下層の柱穴の痕跡と思われる凹みがある。覆土は上層が泥岩粒子・炭化物を多く含む暗褐色弱粘質土、下層が少量の貝片を含む暗褐色砂質土である。

主軸方位 N-42°-E

##### 出土遺物

かわらけ片数点と常滑窯脣部片があるがいずれも固化できるほどのものではなかった。

##### 2. 土壌（図4）

A-5にあって、西側が調査区外に出ている。東西136cm以上、南北108cm、深さ24cmで、中央の

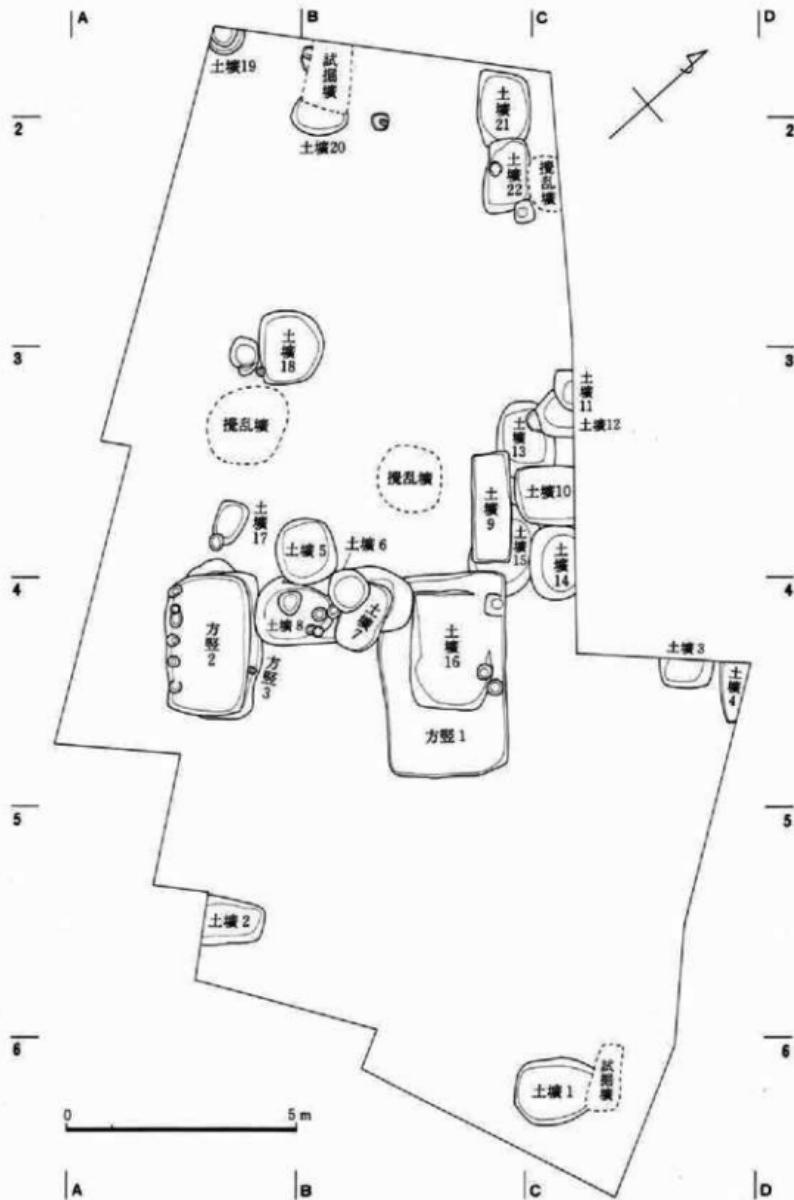


図3 上層遺構群全体図

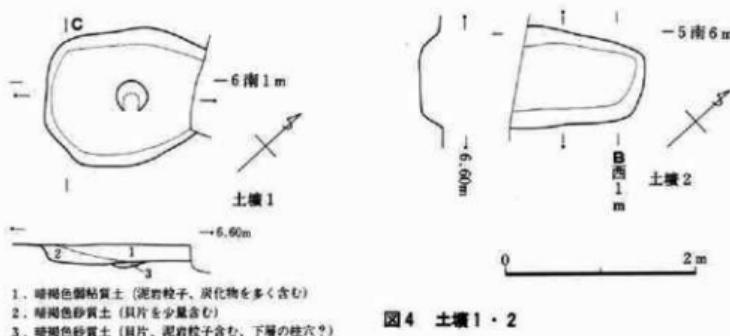


図4 土壌1・2

膨らんだ不整梢円形を呈する。断面形状は低い逆台形、もしくは皿状である。

主軸方位 N-46°-E。

#### 出土遺物

数点のかわらけ片があるが図化できるものは見られない。

### 3. 上層遺構面上包含層出土遺物 (図5~8)

#### 青磁 (1~9)

1一同安窯系の皿。口径9.9cm。釉薬は淡青灰色で透明、素地は灰白色。2一割花文碗。釉薬は暗青灰色透明、素地は灰色で非常に堅緻。3一割花文碗。底径6.4cm。釉薬は暗灰緑色で、気泡多く含むが透明、素地は黄灰色で、疊付部分のみ灰黒色に焼けている。高台内に熔着を刺した痕跡が見られる。4一割花文碗。底径6.2cm。釉薬は灰緑色透明、素地は灰色で非常にきめが細かく堅緻である。5一鍋蓋弁文碗。釉薬は灰青色半透明、素地は灰色、岩石質に近い。6一同前。釉薬は淡水青色半透明、素地は灰白色できめが細かい。7一同前。釉は水青色半透明、素地は灰白色で粘りが強い。蓮弁は幅が狭い。8一同前。釉薬は暗青緑色で気泡多く殆ど失透、素地は灰白色で堅緻。9一碗底部。おそらく鍋蓋弁文だと思われる。釉薬は水青色半透明、素地は灰白色で堅緻。疊付のみ露胎。

#### 白磁 (10~13)

10一端反り碗。口径16.1cm。釉薬は多少白濁、釉切れが見られる。素地は黄白色できめが細かい。焼成やや不良。貫入が外面左下から右上に走る。11一口兀げ碗。釉薬は透明度高く、素地は灰白色で結晶質。12一口兀げ皿。釉薬は僅かに白濁し、素地は白色で結晶質。露胎部分に酸化現象が見られる。13一口兀げ碗。器壁はきわめて薄く。11・12とは明らかに系統が異なる。釉薬はかすかに青味帯びるが透明、素地は白色で結晶質。

#### 青白磁 (14)

唐草文梅瓶肩部。釉薬は淡水青色で気泡が多く、若干濁る。素地は灰白色でややきめが粗い。二

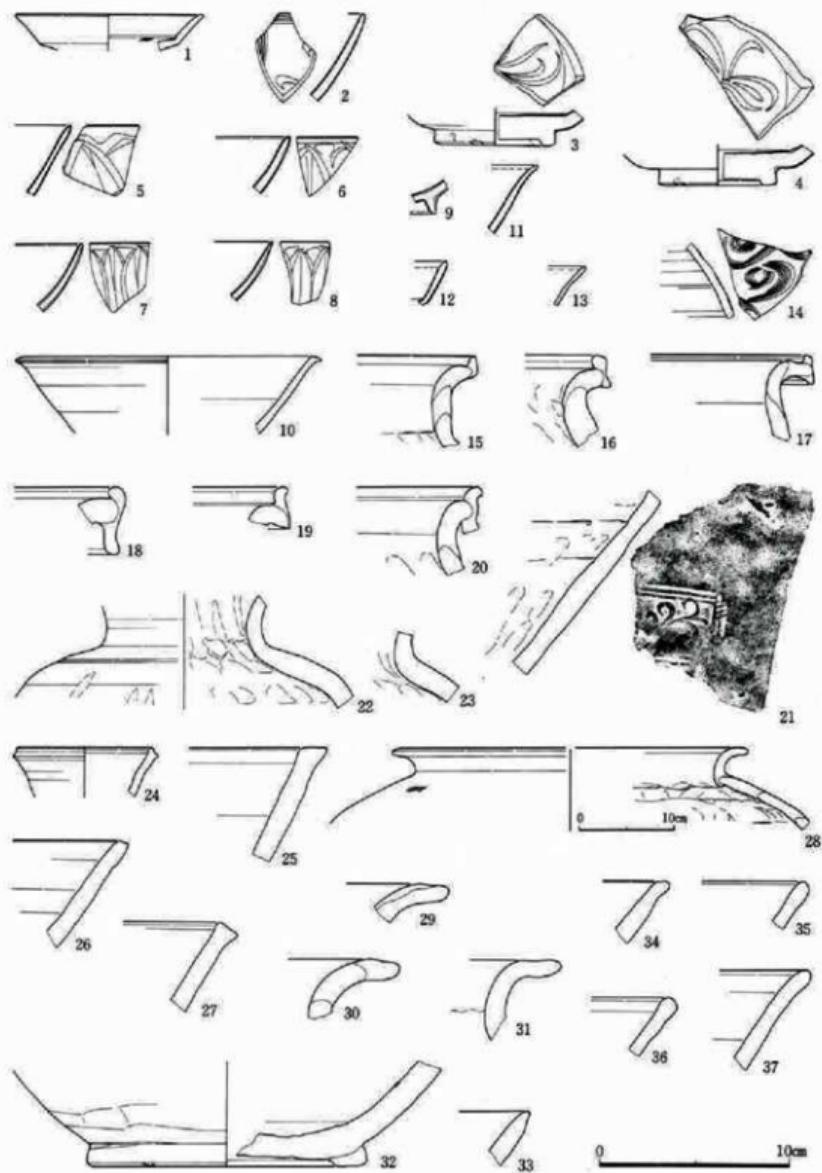


图 5 上层遗物面上包含层出土遗物(1)

次焼成を受けている。

常滑 (15~27)

15—壺口縁部。胎土は灰黒色できめが粗く、岩石質に焼けている。口縁~頸部に自然軸の流下が見られる。16—同前。胎土は灰色で砂質、器表面は黒褐色を呈する。17—同前。胎土は灰黒色で岩石質。器表面は黒褐色を呈し、二次焼成を受けて自然釉が白くかせている。18—同前。胎土は芯部で灰色、器表近くで灰黒色を呈し、岩石質に焼けている。縁帯は下に長く垂れる。19—同前。胎土は芯部で茶褐色、器表近くで灰黒色を呈し、堅緻で、流紋が観察できる。20—同前。胎土は灰黒色できわめて堅く、きめが細かい。21—壺胴下半部。唐草文の叩き文様が見られる。胎土は灰色で岩石質、ややきめが粗い。

22—壺肩部。頸部径8.3cm。胎土は長石を多く含む灰~灰黒色の粗いもので、気孔を散見する。肩部に厚く自然軸がかかる。23—同前。胎土は灰色で、22よりややきめが細かい。二次焼成を受けている。24—小型壺口縁部。片口が付く可能性がある。口径7.1cm。胎土は長石を多く含み、灰黒色できめが粗い。

25—捏ね鉢口縁部。胎土は暗褐色に近く、きめが粗い。器表は全体に明褐色を呈する。焼成やや不良。26—同前。胎土は赤褐色~黒色できめが粗く、長石粒子を多く含む。器表面は茶褐色。内面はよく使いこまれてひどく磨耗している。27—同前。胎土は全体に灰黒色で、器表近くが部分的に赤褐色を呈する。岩石質で非常に堅緻。

渥美 (28~33)

28—壺口縁~肩部。口径35.3cm前後。胎土は灰色で砂っぽく、岩石質に近い。釉薬は灰緑~灰黒色を呈する。29—壺口縁部。胎土は灰黒色で非常に堅緻、釉薬は黒色。30—同前。胎土は暗赤褐色で岩石質、きわめて堅く締っている。釉薬は暗緑色、二次焼成を受けて気泡が吹き出している。31—同前。胎土は灰白色で砂質、釉薬は灰緑~灰黒色を呈する。

32—捏ね鉢。底径14.6cm。胎土は砂質で若干きめが粗い。内面はよく使いこまれているが、器表の剥離が目立つ。33—同前口縁部。灰黒色の堅緻な胎土で、内面には降灰が見られる。

山茶碗窯系陶器 (34~41)

34—捏ね鉢。胎土は長石を多く含み、きめが粗く気孔が目立つ。若干酸化氣味で淡褐色を呈する。35—同前。黄灰色のきめ粗い胎土で、長石を多く含む。36—同前。胎土は灰色できめが粗く、大粒の長石粒子を含む。37—同前。淡灰褐色、岩石質に焼けた胎土で、内面に墨か煤のような、黒色の付着物が見られる。38—同前。口径31.5cm前後、底径16.3cm前後、器高12.8cm。胎土は灰色で、きめが粗くやや軟質。内面はよく使い込まれているが、器表面の剥落が目立つ。39—同前。口径24.3cm、胎土は灰色で、きめは粗いが縮り良く、岩石質。二次焼成を受けている。40—同前。灰色で、やや軟質、きめの粗い胎土。内面は磨耗が激しい。

41—山茶碗。胎土は岩石質で、きめは細かめ、灰色を呈する。

魚住 (42)

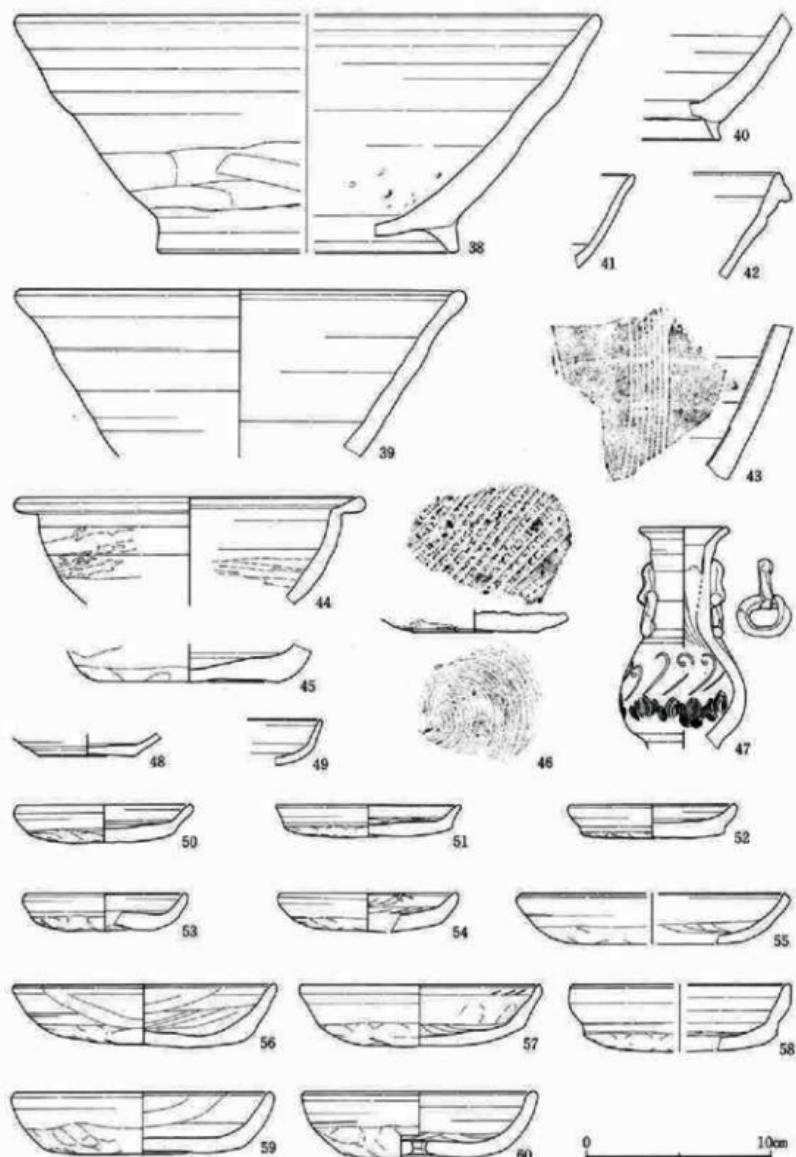


图 6 上层堆积面上包含层出土遗物(2)

42-口縁部は楔状に上方に尖り、下方にも少し垂れて、縁帶を形成する。胎土は黒灰色で、挟雜物はあまり見られないが、きめは粗い。

備前 (43)

43-播鉢体部。カキ目は1束7条。胎土は芯部で暗赤褐色、器表近くで黒色～灰黒色を呈し、流紋が観察できる。非常に堅緻に焼けている。器表面は内外とも黒褐色。

瀬戸 (44~47)

44-折縁皿。口径19cm。外面下半部はヘラ削りされる。釉薬は灰緑色透明の灰釉、胎土は黄白色で、やや軟質、きめは細かい。

45-行平鍋底部。底径9.8cm。釉薬は灰緑色透明で灰釉で内底面と外面下半部までかけられている。胎土は灰色できわめて堅く焼き締り、きめが細かく量感がある。外底面は糸切のまま。

46-卸し皿。底径6.8cm。釉薬は淡灰緑色透明で、外面下半部までかかっている。胎土は黄灰色で挟雜物は少ない。内底面に目痕らしき熔着痕が三箇所見られる。

47-仏花瓶。口径4.9cm、胴部最大径6.8cm。頭部に不遊環、胴部に蓮華唐草文が配される。釉薬は黒褐～褐色の、半失透性のアメ釉、胎土は黄白色できめ粗く、やや軟質。

白かわらけ (48~49)

48-ロクロ成形。底径5.2cm。外底面は糸切りの後に丁寧なナデを施す。内底面には指頭によるナデが見られる。胎土は芯部が黒色、器表面が黄白色できめ細かく、白色針状物質を含まない。

49-手捏ね成形。器表面は内外とも淡い褐色に焼けている。胎土は黄褐色できめが細かく、白色針状物質を含まない。

かわらけ (50~92)

50~54-手捏ね成形の小型。器壁が貧弱で、底部と器壁の境界に明瞭な稜線のつくもの (50~52) と、全体に厚手の作りで底部と壁部の境界が不明瞭なもの (53・54) の二群に分けられる。

55~60-同前大型。薄手で低い作りもの (55・57)、ロクロ成形品のような側面觀を呈するもの (56・59)、全体に厚手で体部が強くくびれるもの (58) とくびれないもの (60) 等がある。60の底部は穿孔されている。

61~80-ロクロ成形の小型。大半が器高の低い楔形の小さな器壁を持つものであるが、80のようにやや器高の高いもの、薄手で内壁する高い器壁を持つ、明らかに時期が降ると思われるもの (61) が含まれている。

81・82-同前中型。口径10cm足らずのもの (81) と11cm前後のもの (82) であり、器形的にはこれらの同時代の大型品を反映したものである。薄手で内壁する高い器壁のものを縮小した器形は時に散見するが、この器形のものはあまり多くはないと言える。

83~92-同前大型。概して器高の低い、斜め上方に器壁の伸びるものが多いが、なかにいちだんと器高の低いものがある (84・90)。これは他のものよりも、若干時期の遅るものであろう。

手培り類 (93~100)

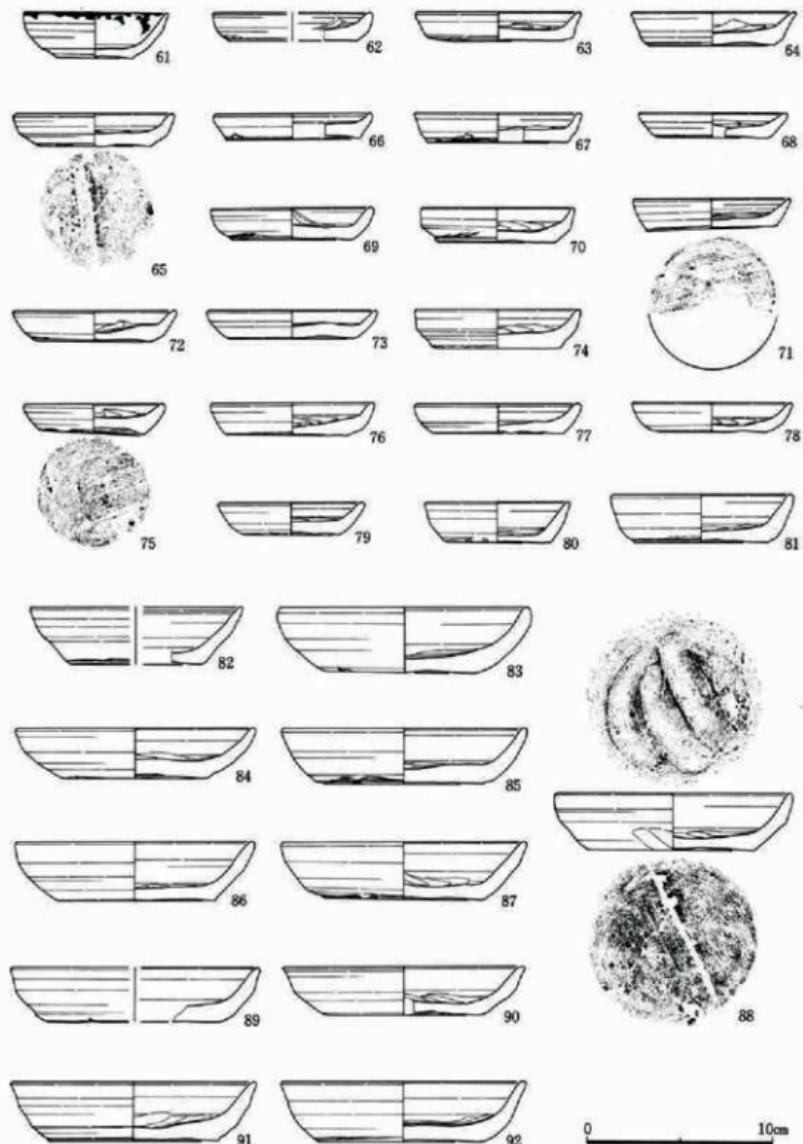


图7 上层遗物面上包含出土遗物(3)

93—白っぽくてきめの細かい、白かわらけのような胎土で、内外面とも櫛歯状工具で整形されている。内面には上部に煤が付着しており、同じく内底面近くは焼けている。

94—土器質のもの。胎土は黒褐色～茶褐色で、きめが粗く、大粒の砂礫が見られる。口縁部にナデ、全体に二次焼成を受けていると思われる。

95—瓦質のもの。胎土は灰白色で非常にきめが粗く、気孔が多い。器表面は灰色を呈する。内面に二次焼成痕あり。96—同前。但し95に較べると丁寧な作りできめが細かい。器表面は内外とも、よくヘラで磨かれている。胎土は淡褐色で、外面は灰黑色で、内面は二次焼成を受けて淡褐色を呈している。

97—脚付きのもの。胎土は淡灰褐色で砂粒を多く含み、きめは粗いが、おそらく頻繁な二次焼成のせいで堅く焼けている。内底の器面は二次焼成による剥落がひどい。

98—炻器質に近い焼きのもの。内面は刷毛で調整されている。胎土は赤褐色で焼き締り良く、砂粒は見られるがきめは粗くはない。内面に二次焼成による油煤と煤の付着があり、外面も火を受けている。99—同前。胎土・調整とも98に共通しており、同一個体の可能性があるが、底部の厚さは該品の方が薄い。

100—土器質で、ぶ厚い体部を持つ。胎土は灰色できめが細かく、雲母らしき光沢ある微粒子を含む。内面にナデ、外底面に板状圧痕が残る。二次焼成痕は見られない。

#### 土鍋 (101)

101—伊勢型。胎土は石英・長石を多く含み、灰色～灰色できめが粗く、流紋が見られる。

#### 土器鉢 (102・103)

102—ロクロ成形。口径16cm前後、底径8.5cm前後、器高5.8cm。胎土は橙色できめがやや粗く軟質。白色針状物質を含む。外底面の余切痕は確にヘラ削りされている。103—ロクロ成形。胎土は黄褐色を呈し、102よりもいちだんときめが粗く、白色針状物質を目立って多く含む。外面に二次焼成痕が見られる。

#### 瓦器香炉 (104)

104—口径6.8cm、底径4.6cm、器高2.8cm。外面口縁直下に一列の雷文帯、その下に貼付の列点文、それ以下を三段の雷文帯で充填している。内面には、何かを搔き取ったような傷が付いている。胎土は灰色で粘りが強く、器表面は灰黑色を呈する。

#### 不明土器 (105)

105—柱状になった高台部分。底径5.4cm。ロクロ成形で内底面にナデが見られる。胎土は橙色で軟質の、かわらけと同じもの。

#### 土玉 (106)

106—焼成されたものだが陶丸と呼べる程陶質にはなっていない。土玉、又は土丸。直径3.9cmの球状。胎土は淡褐色～灰褐色で雲母らしき光沢ある微粒子、白色針状物質を含み、焼きが良いので質感に富む。こうした小球はしばしば出土するが、用途は詳かにしない。何か中世の飛鏢の風習に

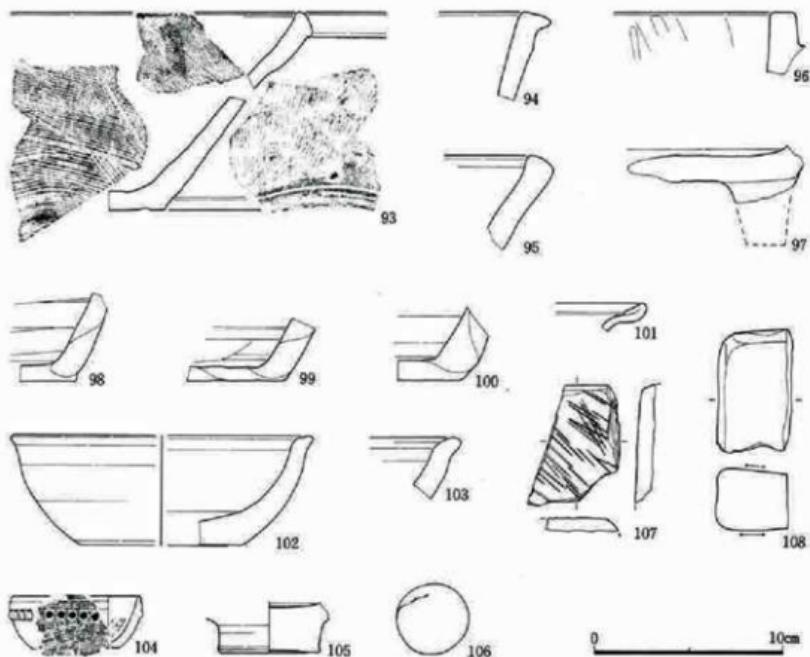


図8 上層造構面上包含層出土遺物(4)

関係があるのだろうか。

#### 砥石 (107・108)

107—粘板岩製。刃物より鎌のようなものを砥き出すのに使われたと思われる。火に遭って明褐色に焼けている。108—玄武岩製。砥石というよりは磨り石のごときもの。

### 第3節 中層の造構と遺物

上層の造構と切込み面は変わらないが、一時期古い一群の造構を擁めた。内訳は土壙2基、方形堅穴4棟、柱穴24口、および道路状造構とその側溝2条である。このうち本報に掲載する対象は方形堅穴建物2棟と道路状造構南側側溝であるが、側溝に関しては、道路そのものの一部であって、道路とは不可分なため、北側側溝を含めた全体を掲載することにした。

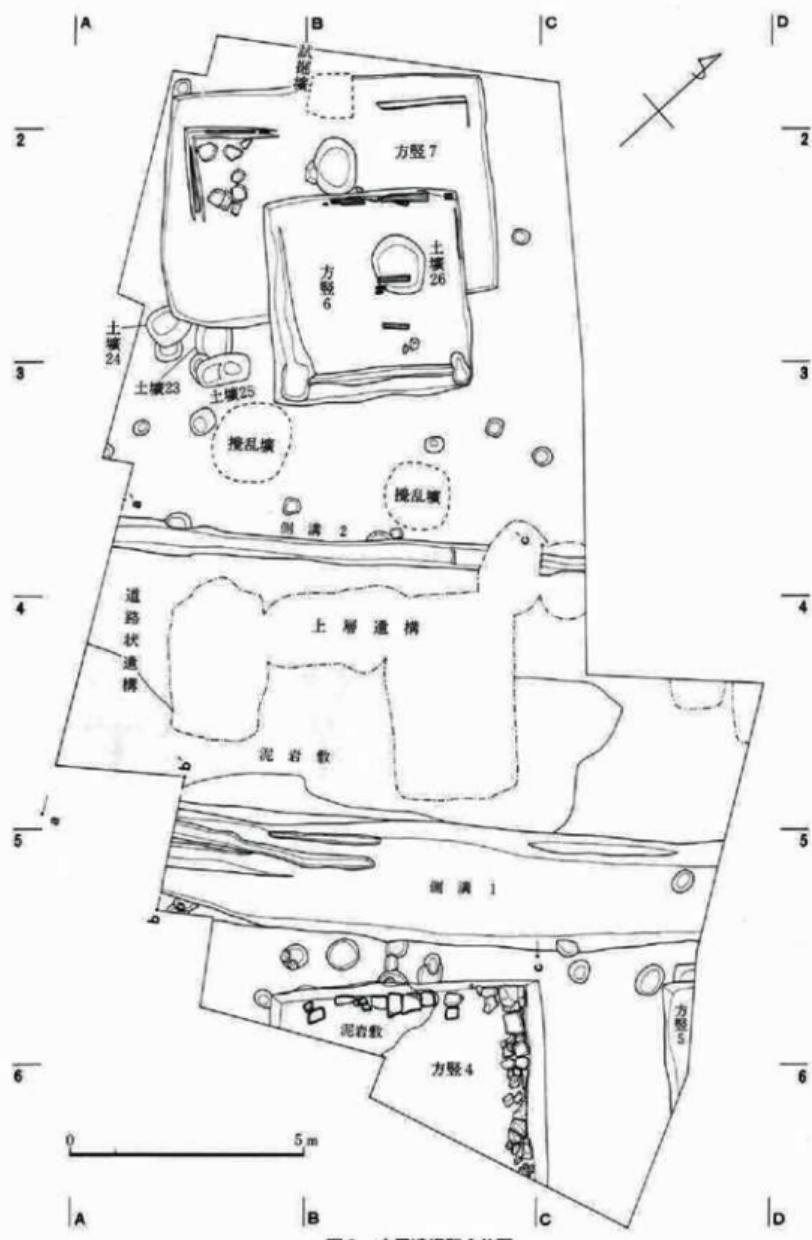


図9 中脇造構群全体図

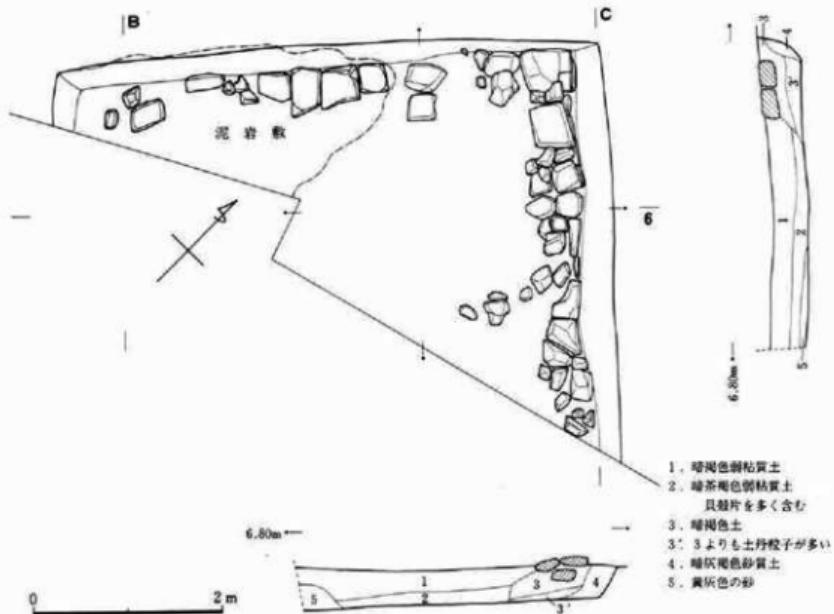


図10 方形豎穴建物4

### 1. 方形豎穴建物4（図10）

A・B・5・6にあり、西南部は調査区外に出ている。東西辺5m75cm、南北4m45cm以上、深さは切込み面から37cm-45cmを測る。

壁際に凝灰角礫岩（錆倉石）が雜な並べ方で、覆土上層に置かれている。また、西側には泥岩（土丹）が敷かれており、これらのことから本址は建物というより、豎穴を利用した。基壇状の遺構である可能性がある。ただ石が相当抜かれているので詳しいことは不明である。

東西軸方位N-43°-E。

#### 出土遺物（図11）

##### 青磁（1）

1-「金玉満堂」の押印ある碗。底径6.2cm。釉薬は灰緑色透明。素地は灰白色で、非常にきめが細かく、岩石質に近い。焼成に若干むらあり。高台内側に熔着痕がある。

##### 白磁（2・3）

2-口元げ皿。釉薬は微妙に灰味を帯びた透明釉、素地は白色で結晶質。3-同前。口径12.4cm。釉薬は灰緑色がかった失透気味、素地は灰白色で結晶質。口縁の露胎部分に黒色の油煤が付着して

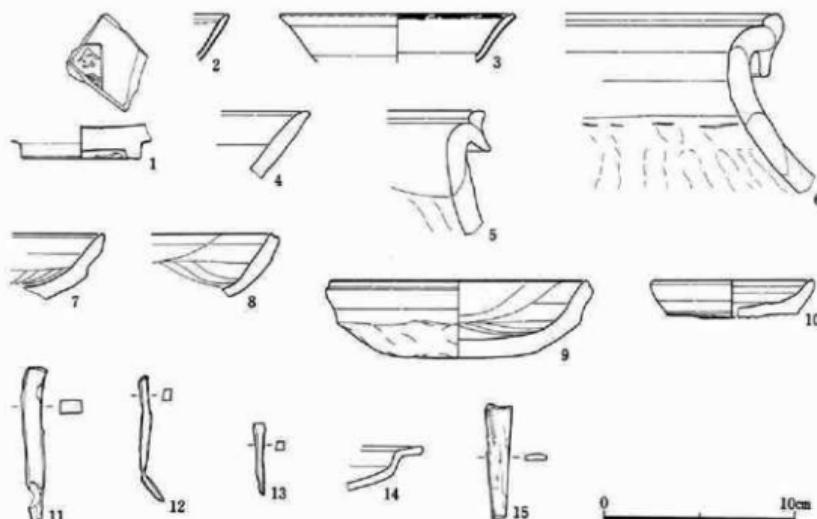


図11 方形堅穴建物4 出土遺物

いる。

#### 涅美（4）

4—捏ね鉢。口縁部内側を強くなでてるので端部が尖り氣味。胎土は灰色できめ細かく、岩石質に焼き上っている。薄手だが堅牢な作り。

#### 常滑（5・6）

5—甕口縁部。胎土は淡褐色と灰褐色の混ったもので粘性が非常に強く、模様の流紋が観察できる。器表面は暗褐色で光沢がある。6—同前。幅広の縁帯を持つ。胎土は灰黒色で岩石質。器表面は褐色を呈する。

#### かわらけ（7～10）

7～9—手捏ね成形の一群。7は口縁端が尖り、8は沈線を持ち、9は全体に厚い作りで体部に縦を持つ。

10—ロクロ成形の小型。器壁は小さめで、斜め上方に伸びる。口縁端は丸い。

#### 鉄釘（11～13）

11—幅1.2cm、厚さ7mm、長さ8.3cm、重量18.5g。12—幅6mm、厚さ4mm、長さ6.7cm、重量6.3g。13—幅5mm、厚さ5mm、長さ3.9cm、重量3.4g。

#### 鉄皿（14）

14—厚さ4mm程の浅い皿。無論供膳具ではなく、外面に煤が付いているところからも、煮沸具の

一種であると思われる。

#### 斧 (15)

15—淡黄褐色の牛角製。厚さ 3 mm。

#### 2. 方形堅穴建物 5 (図12)

C-5・6 にあり、大半が東側調査区外に出ている。調査区内で確認できるのは、本址の西北角と西辺の北側である。規模は不明であるが、切込み面からの深さ 41 cm ~ 44 cm と方形堅穴建物 4 と変わらない。西辺はほぼ 5 の東辺に平行しており、両者の間隔は 255 cm ~ 270 cm である。

西辺方位 N-48°-W であり、5 の東西軸とは直交していることが判る。

#### 出土遺物 (図13)

##### 青磁 (1)

1—同安窯系皿。底径 4.9 cm。釉薬は淡青灰色透明、素地は灰色、粘性がありきめが細かい。

##### 白磁 (2)

2—口元げ皿。釉薬は若干濁った透明釉。素地は白色結晶質できめ細かい。

##### 渥美 (3)

3—壺口縁部。灰黒~黒色の器表面に暗緑色失透の灰釉が塗られている。胎土は灰~灰黒色で非常に堅緻に焼けている。

##### 常滑 (4・5)

4—捏ね鉢。胎土は褐色で長石等の粒子を多く含み、非常にきめが粗い。器表面は褐色を呈する。内面に降灰顯著。

5—壺。肩部径 17 cm。胎土は灰色、気孔多くきめが粗い。肩部をヘラナデ。降灰が顯著。割れた後に二次焼成を受けている。

##### 山茶碗窯系陶器 (6・7)

6—捏ね鉢。口径 26.1 cm、底径 13.1 cm、器高 14.5 cm。片口が付く。胎土は灰色で非常にきめが粗く、様々な粒子を含む。内面は磨耗。7—同前。胎土は灰~灰褐色で細かな気孔多く、きめが粗い。常滑系である可能性もある。

##### かわらけ (8~14)

8~10—手捏ね成形の一組。8 は小型の薄手のもので、口縁部が肥厚する。9 は体部の稜があまり目立たず、10 は明瞭な稜を持ち体部上半が大きく外に広く。



図12 方形堅穴建物 5

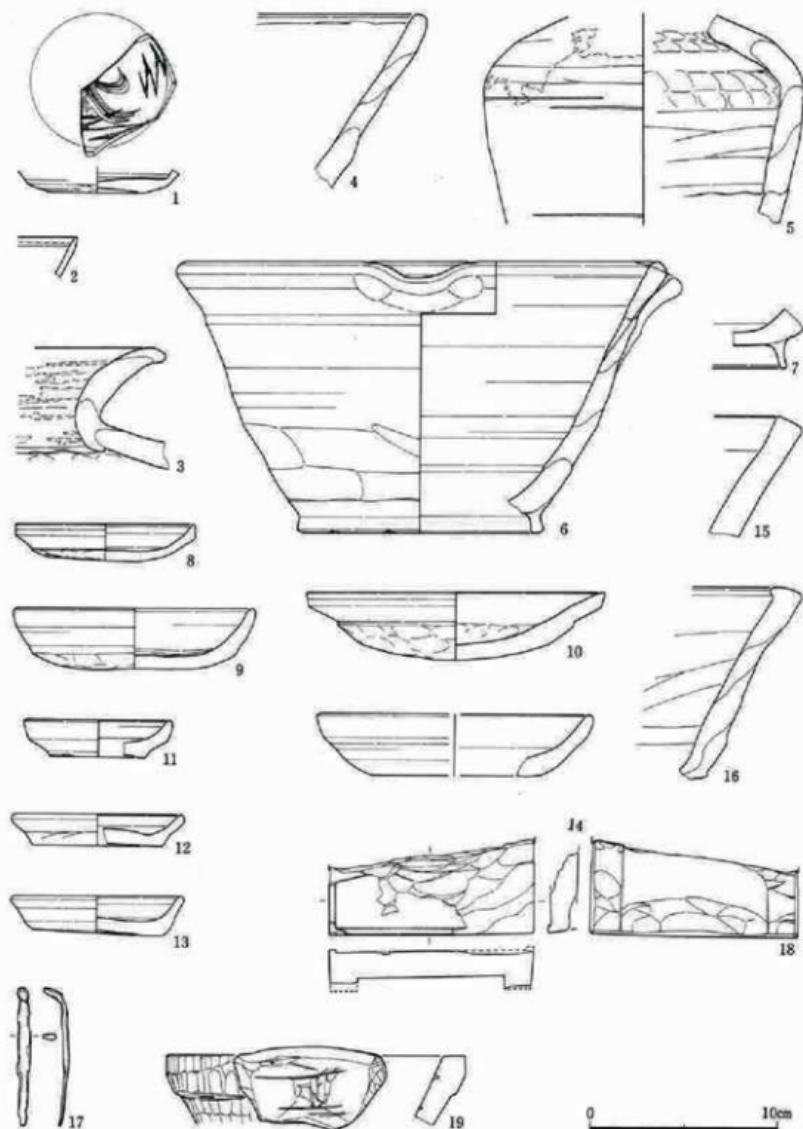


图13 方形竖穴建筑物5出土遗物

11~14-ロクロ成形の一群。小型の11~13はそれぞれ形態は異なるが、いずれもやや古式（13世紀代）の様相を持っている。大型の14は、外面口縁下に浅い棱を有する。

#### 手焼り（15・16）

15-土器質。灰色の、非常にきめの粗い胎土を持っている。内外面とも二次焼成を受けた痕跡が目立つ。

16-瓦質。これも非常にきめの粗い胎土で、芯部は黄灰色、器表は灰黒色を呈する。内面に二次焼成痕。

#### 鉄釘（17）

17-幅7mm、厚さ3.5mm、長さ7.5cm、重量4g。

#### 石製品（18・19）

18-長方規。底面の両縁を削り残して脚にしている。残存部は腹部のみで、深さ2~3mm。石材は褐色の粘板岩質。幅11cm、厚さ1.4cm。

19-滑石鍋転用品。滑石鍋の破片の再加工を試みたもの。鋤を落とし、割れ口を削り、内面に深い2条の切れ込みを入れただけの未成品。鍋としては口径15.9cmに復元できる。銀灰色の滑石製。

### 3. 道路状遺構（図9・14）

4・5軸付近を中心に東西に走っており、南北両側に側溝を伴っている。幅は道路面で5m30cmのほぼ一定した幅員を保っている。道路面は基盤層上に拳大の泥岩塊を敷き詰めて構築されており、その上層には部分的に明褐色の砂も撒かれている。

側溝は南側（側溝1）と北側（側溝2）とでは様相が大きく異っている。先ず側溝1は、数次の

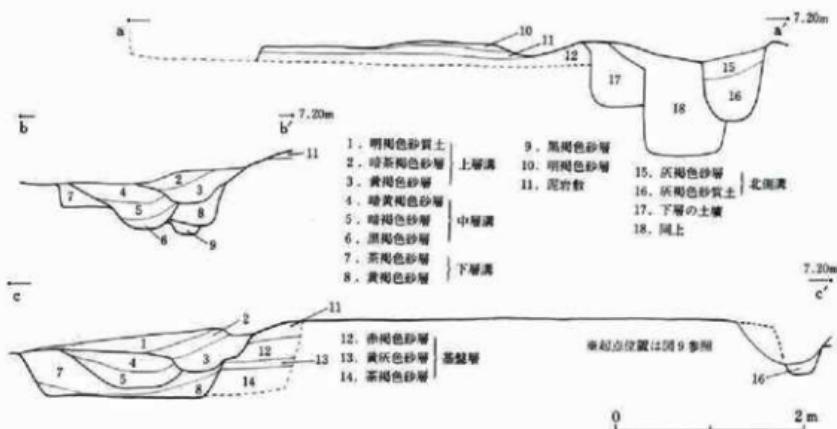


図14 道路状遺構断面図

掘り直しが観察できるのに対し、側溝2にはそれが見られない。何よりの違いは全体の幅と形状で、側溝1は当初上端幅約240cm、下端幅160~170cm、深さ約50cm(南岸)~約70cm(北岸)、箱型の断面形状を呈するが、側溝2は上端幅約70cm、下端幅20~25cm、断面形状は整ったU字形を呈する。

溝1の掘り直しは、1回目2回目とも逆台形、もしくは鉢型の断面である。

主軸方位N-46°-Eで、これは若宮大路と直交も平行もしていない(先述のように若宮大路方位はN-27°-E)。

#### 泥岩敷面上出土遺物(図15)

##### 青磁(1~3)

1-同安窯系皿。釉薬は灰緑色透明、素地は灰色できめが細かい。外面体部下半は露胎。

2-割花文碗。界線がのぞく。飛雲文であると思われる。釉薬は暗灰緑色透明、素地は灰色で非常にきめ細かく挿雜物を含まない。

3-折腰小鉢。釉薬は暗緑色ではほぼ完全に失透。素地は灰色できめがやや粗く、岩石質に近い。

##### 白磁(4)

4-口元げ皿。口径9.4cm。釉薬は若干白濁、素地は乳白色結晶状。

##### 青白磁(5~6)

5-唐草文梅瓶肩部。釉薬は淡水青色透明、素地は乳白色で結晶状。

6-碗底部。底径4cm。釉薬は灰青色半透明、素地は灰色で岩石質。貫入が外面左下から右上に走る。釉表は二次焼成を受けて荒れている。

##### 常滑(7)

7-堺口縁部。胎土は灰色岩石質で、器表面は褐色を呈する。内面に降灰が目立つ。

##### かわらけ(8~15)

8~11-手捏ね成形。小型(8・9)は器形は異なるが共に薄手で、大型(10・11)は厚手で器

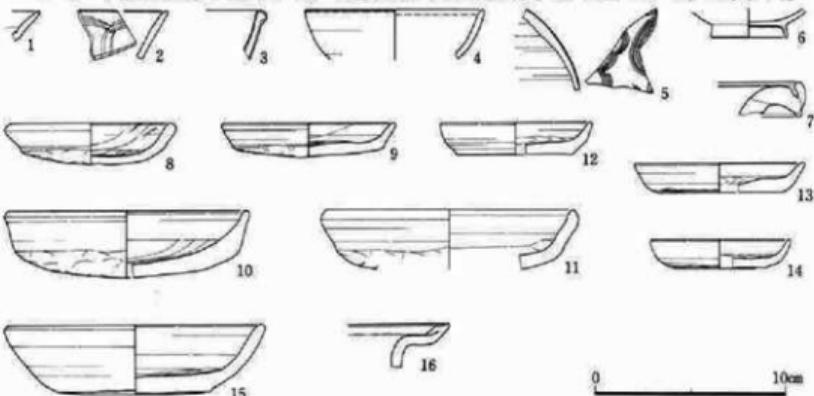


図15 道路状遺構泥岩敷面上出土遺物

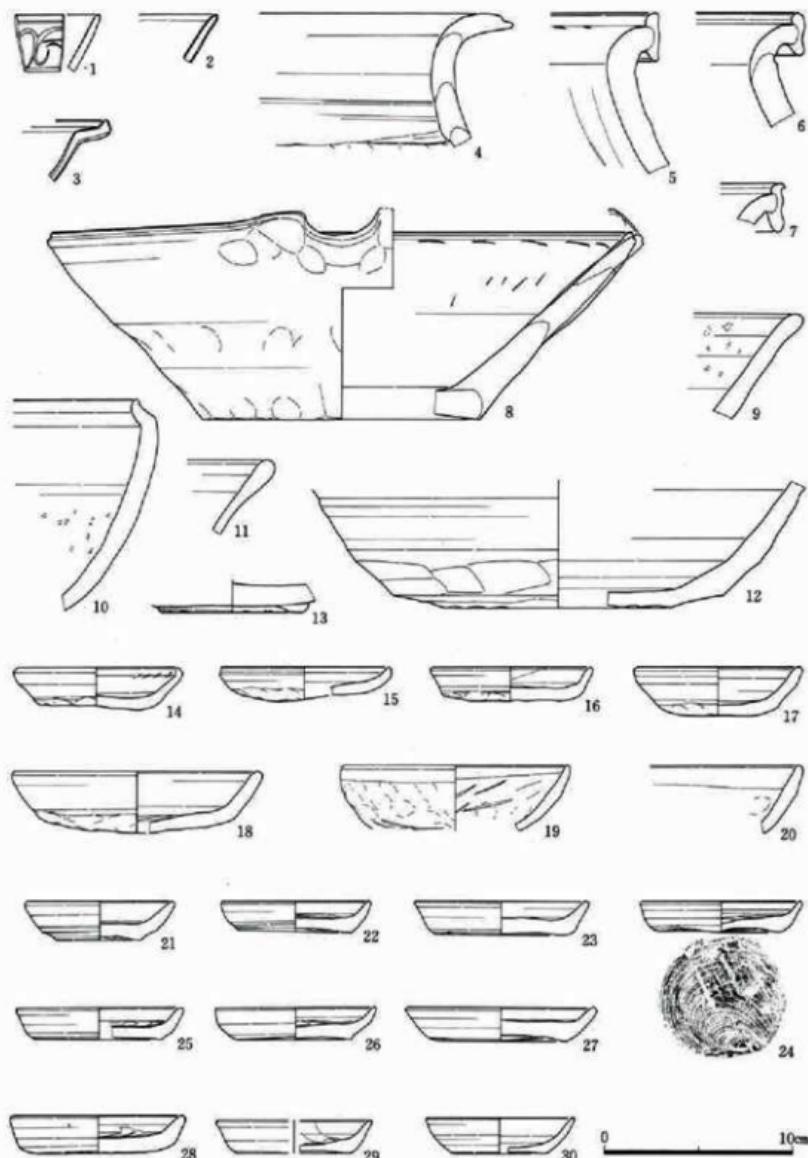


图16 道路状造構側溝1上層出土遺物(1)

壁の小さなもの（10）と口縁部の内側に折れるもの（11）がある。

12～15—ロクロ形成。小型（12～14）はいずれも薄手で、ほぼ均一の厚味の器壁を持つもので、器高が低いのはやや古式（13世紀）の様相を残している。大型の15は口縁部の丸い、器壁の内側するもの。

#### 土鍋（16）

16—伊勢型。胎土は灰色で、長石・雲母等様々の挟雜物を含み、非常にきめが粗い。内外ともに二次焼成を受けている。

#### 側溝1上層出土遺物（図16・17）

#### 青磁（1～3）

1—割花文碗。蓮華文であろう。釉薬は明灰褐色透明、素地は灰色で堅緻、やや岩石質に近い。

2—割花文系無文碗。釉は青灰色で気泡のために殆ど失透、素地は灰色で岩石質。

3—無文鉢。釉薬は暗青緑色で、その厚さと無数の気泡のために失透。素地は灰白色で非常にきめが細かい。

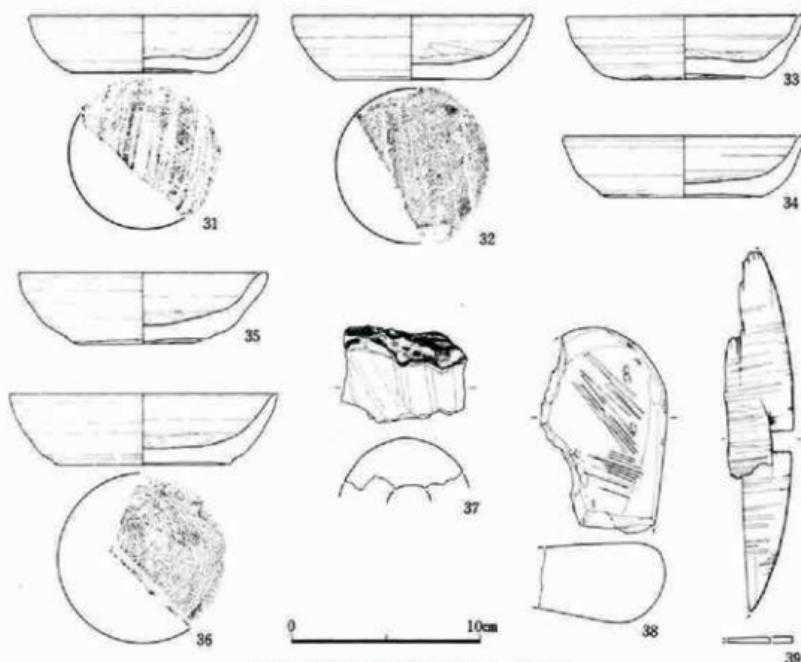


図17 道路状造構側溝1上層出土遺物(2)

### 常滑（4～9）

4－堺口縁。縁帶を持たず、尖り氣味で上面に沈線の廻る端部を持つ。胎土は淡い褐色できめは細かく、器表面は褐一灰褐色を呈する。焼成不良。5－同前。縁帶を有する。胎土は灰色できめが粗く。岩石質で気孔が多い。内面は褐色に焼け、外面は灰緑色の自然釉がいちめんにかかっている。6－同前。胎土は灰黒色で岩石質。器表面は灰黒～黒色を呈する。内面に漆喰のようなものが付着している。二次焼成を受ける。7－同前。灰黒～淡褐色の非常にきめの粗い胎土で、器表面は黒褐色に焼けている。

8－捏ね鉢。口径31.2cm、底径14.8cm、器高11cmで、片口が付く。胎土は灰黒色岩石質の、きめは粗いが非常に堅緻なもの。器表面は黒褐色を呈する。内面は磨耗が激しい。9－同前。口縁端部は丸く、やや外反気味になる。胎土は灰褐色で渣雜物多く、きめが粗い。やや焼成不良。

### 山茶碗窓系陶器（10～13）

10－口縁部にくびれを持つ鉢。胎土は灰色で長石など多く含み、きめが粗い。内面は磨耗しており、下半部の器面の剥落も顕著。捏ね鉢としても使われたらしい。

11－捏ね鉢。口縁部が肥厚し、端部は丸い。胎土はきめ粗く、灰色。12－同前。底径17.5cm。高台はきれいで剥がれている。胎土は灰色、きめが非常に粗い。内面はよく使い込まれて磨耗が著しく、外面は底部と、体部中位に煤が付着しており、捏ね鉢としても鍋としても使われたと思われる。

13－山茶碗。底径7.7cm。幅の広い、低く潰れた高台を持つ。胎土は灰色で岩石質、きめがやや粗い。

### かわらけ（14～36）

14～17－手捏ね成形小型の一群。いずれも概ね薄手の作りで、16を除いて内側する口縁部を有する。

18～20－手捏ね成形大型の一群。18は体部下半に浅い棱が形成される。19・20は赤褐色の、きわめて堅緻な焼成で、叩くと硬質の高い音を発する。

21～30－ロクロ成形小型の一群。概して低く、貧弱な器壁を持つが、21は厚手で体部下半にくびれを有する焼きのよいもので、13世紀代前半の様相を持つ。また30は薄手で内側する器高の高いもので、これは14世紀代にまで降ると思われる。

31～36－ロクロ成形大型の一群。口径／底径比がさ程大きくなり、やや厚手で器高も高くない。焼成が良好で、これらはおよそ13世紀後半の諸相を持っている。

### ふいご羽口（37）

37－土器質であるが、かわらけ等とは異なり、堅く焼けている。表面はナデで整形。

### 砥石（38）

38－凝灰岩を利用。刃物用というよりは鐵あるいは尖頭器類の研ぎ出しに用いたとみられ、表面に細い筋が刻まれている。

### 板草履（39）

39—大半を欠失するが、推定で長さ約20~22cm前後、幅7~8cmか。表面には、わらの圧痕が残る。

### 側溝1下層出土遺物（図18）

#### 渥美（1・2）

1—捏ね鉢。外面口縁直下が凹帯状にくびれ、尖り氣味の端部が形成される。胎土は灰褐色でやや粗いが、挟雜物は少ない。2—同前。底径13.1cm。がさっとした灰白色の粗い胎土で、二次焼成を受けて外面には煤が付着。

#### 常滑（3）

3—捏ね鉢。外面口縁直下がくびれ気味になる。胎土は淡褐色で非常にきめが粗い。器表面は褐色を呈し、内面は降灰著しいが二次焼成で荒れている。

#### 山茶碗窓系陶器（4）

4—山皿。灰色できめ細かく、堅緻な胎土で、岩石質、若干焼成ムラがある。

#### かわらけ（5）

5—手捏ね成形の大型。全体に均一な厚味で、僅かに内擣する器壁を持ち、焼成が良好。

### 側溝2出土遺物（図19）

瀬戸合子蓋。口径7.2cm前後、頂部径6.6cm前後、器高2.1cm。頂部に双鳳文が見られる。釉薬は暗黄褐色半透明、胎土は黄灰色で、きめは細かいが焼成不良のためやや軟質。

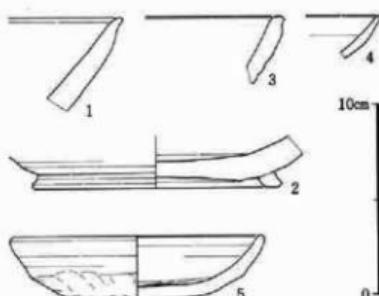


図18 道路状造構側溝1下層出土遺物



図19 道路状造構側溝2出土遺物

## 第4節 下層の遺構と遺物

上層・中層の遺構群に切られる一群の遺構がある。その殆どが土壤であり、調査区北域に集中している。この遺構群の切込み面は上層・中層形成の際に削平を受けているため、面上の包含層は南域の狭い部分にしか残っていなかった。

この層で確認したのは土壤19基、井戸2基、柱穴数口である。このうち本報掲載範囲に該当する南域に位置するのは僅か1基であった。

### 1. 土壙27（図21）

B-6にあり、南側は調査区外に出ている。東西150cm、南北160cm以上、深さ55~60cmで、ほぼ

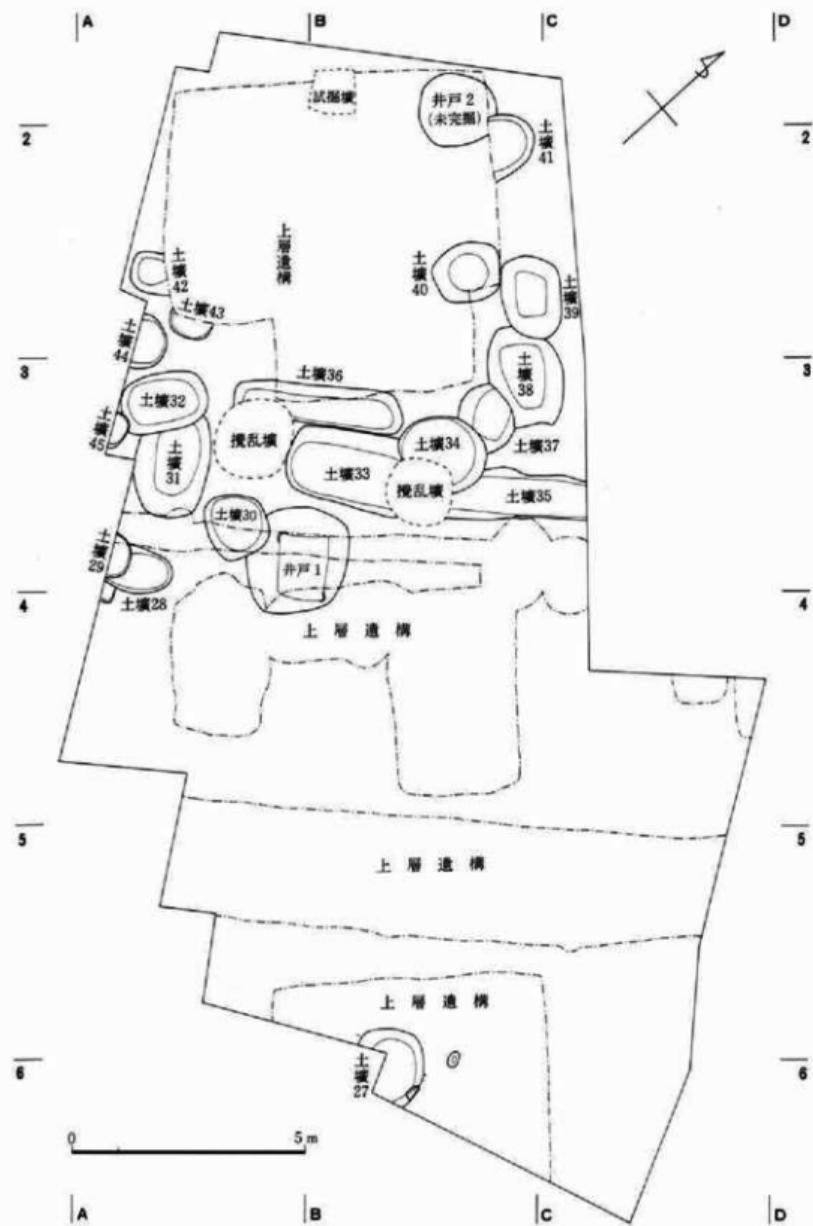


図20 下層造構群全體図

楕円の平面形を呈し、断面形は逆台形、もしくは箱形である。形態的には、この層で検出された他の土壌と共に通している。

主軸方位 N-44°-W。

#### 出土遺物

常滑とかわらけ片がそれぞれ数点があるが、いずれも固化するには至らなかった。

#### 2. 下層遺構面上包含層出土遺物（図22・23）

前述のようにこの層は大半上層遺構に削平されていたが、南城に若干包含層が遺存しており、そこからの採集品を提示する。

##### 常滑（1・2）

1-甕口縁部。頭部は直立に近く、口縁部上縁に粘土紐を接ぎ足して縁帯を形成する。胎土は灰褐色できめが粗く、大小様々な挟雜物を含む。器表面は黒褐色を呈する。

2-捏ね鉢。角型の口縁端を持つ。胎土は黒褐色でがさっとした粗いもの。

##### 山茶碗窯系陶器（3）

3-捏ね鉢。口縁部ないしは体部上半が外傾し、角型の端部を持つ。胎土は灰色でややきめが粗く、気孔を含む。

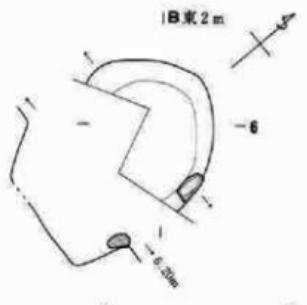


図21 土壌27

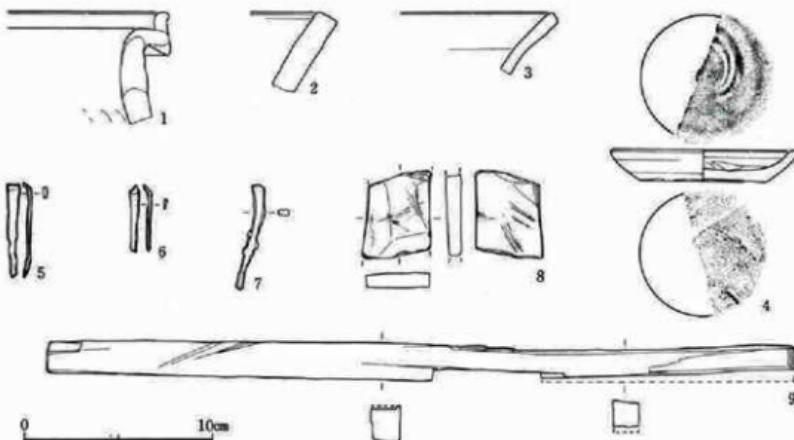


図22 下層遺構面上包含層出土遺物(1)

#### かわらけ (4)

4 - ロクロ成形の小型品。薄手の器壁で、器高が低い。13世紀代の様相を持っています。

#### 鉄釘 (5~7)

5 - 幅6.5mm、厚さ2.5mm、長さ5.1cm、重量1.85g。6 - 幅4.5mm、厚さ2.5mm、長さ3.6cm、重量1g。7 - 幅6mm、厚さ3.5mm、長さ5.7cm、重量5.15g。

#### 砥石 (8)

8 - 灰黄色の粘板岩製の仕上げ砥。両端を欠失するが、幅3.5cm、厚さ0.8cm、長さ4.5cm以上、よく使い込まれている。

#### 建具部材 (9)

9 - 指物の一部であろう。長さ39.8cm、幅1.9cm、厚さ1.6cm。

#### 銭 (図23)

唐の乾元重宝。乾元二年(759)のものと思われる。なお乾元重宝にはこの他に乾元元年(758)、会昌五年(845)のものがある。



乾元重宝

乾元二年(759)

図23 下層遺構

面上包含層出土

遺物(2)

### 第5節 古代の遺物 (図24)

調査中に採集したものを一括した。遺構そのものは検出できなかったが、本地点の立地からみて、すぐ近くに遺構も存在するのは確実であると思われる。

#### 土師器 (1~6)

1 - 覆口縁部。内外とも櫛歯状の工具で整形した後、磨きを受けている。胎土は芯部が灰黒色、器表面が黄褐色を呈し、挟雜物は少ない。和泉期であろう。2 - 同前。小型。胎土は非常にきめが細かく、芯部で灰黒色、器表面で赤褐色を呈する。これも和泉期であろう。

3 - 高壺。直線的に伸びる器壁を持つ、口径の大きなもの。胎土は肌色でやや軟質の焼き上がりであり、きめが粗め。和泉期であると思われる。4 - 同前。脚部。最大径5.6cm。胎土はきめ粗いがよく縮り、白色針状物質を多く含む。脚柱部で灰黄色、裾部で明褐色を呈し、焼成ムラが若干あるが焼きは良い。鬼高II期、6世紀代に属しているよう。

5 - 壺。体部上半はナデを与えて外反する尖り気味の口縁部を形成し、下半はヘラで削る。胎土は明褐色できめ細かく、白色針状物質を含む。5世紀前半頃のものであろう。6 - 同前。口径11cm前後。口縁端部が玉縁状に外側に折れる。胎土は明褐色で非常にきめが細かく、白色針状物質を殆ど含まない。鬼高IIからIII期、おそらく7世紀代のものであると思われる。

#### 須恵器 (7~12)

7 - 長頭壺。頭部径5.2cm。中央部に2条の平行沈線が廻る。胎土は灰色で岩石質、きめが細かい。



図24 古代の遺物

二次焼成を受けている。古墳時代後期のものであろう。

8-壺。黒色の、油煤のような釉が内外に塗られている。胎土は灰黄色で非常に堅緻、きめが細かい。9-同前。内面に微かに青海波文様の叩き目が残る。胎土は灰色で岩石質。10-同前。内面は丁寧になでられている。胎土は灰色できめは粗いが挟雜物は少ない。11-同前。胎土は灰黒色のきわめて堅緻なもの。

12-壺。底径5.8cm。外底面は糸切りのまま再調整されていない。胎土は灰黒色できめ細かく、良好に焼き上がっており、ずしりとした質感がある。10世紀頃のものであろう。

## 第四章 ま　と　め

本報の報告対象範囲は、調査地点の南側3分の1の遺構と遺物であり、北側3分の2については全体図を掲げるにとどまった。従って本地点調査の本格的なまとめは、北側3分の2の結果を俟たねばならないので、今回は若干の遺構についての年代観の提示と、問題点を指摘するにとどめたい。但しこれらの見解は、北側3分の2を報告する際修正されることも充分にあり得る。予察として理解されたい。

### 上層遺構

13世紀前半代に属するものから明らかに14世紀後半以降のものまで、遺物の年代にかなり混乱が見られる。これはおそらく、この面の遺構群構築の際に、下層の遺構群を相当削平したためであるのと（従って古式のものが混入）、後代まで面そのものが残存していたためである（従って新しいものが混入）とのによる。北側3分の2からの出土遺物の仔細を未だ把握するに至ってはいないが、大雑把に言って14世紀代であると考えられる。

### 中層遺構

この遺構群は、東西方向に走る道路状遺構と、その南側、北側に方形堅穴建物が配される、という構成を示している。この、南側の二棟の建物と北側の二棟の建物とは（詳報していないので、全体図から判断して）、主軸方位を同じくしている。つまり、この軸方位による規制が存在していることが判る。若宮大路とは $16^{\circ}$ ものずれがあるので、明らかにここでは別の要素が働いていると思われる。これは道路状遺構も同様であって、主軸方位のN- $46^{\circ}$ -Eという数値は、先述のように若宮大路とは直交も平行もしておらず、大路を軸とした街割の規制を受けていない。

道路状遺構が往時の長谷小路であったかどうかという問題は、周辺の調査例が増えるまで保留したい。この道路の幅員は5m-30cmであり、これは千葉地道路検出の道路の幅より約80cm程広く、かなり幹線に近いとは思われる。また側溝が南と北で全く異なる様相を見せている点や、さらに上層遺構面の年代にはこの道路は調査区内ではなく、どこかにつけ替えられている点など、今後追求されねばならないであろう。

この遺構群の年代は大体13世紀後半代-14世紀初頭期であると考えている。

### 下層遺構

遺構群の主体が北側にあり、当該区域には僅かに土塁1基しかないので、詳細については北側部分報告の際に委ねたい。



▲1 調査前近景

▼2 全景（南から）



図版2



◆2 道路状況  
(東から)

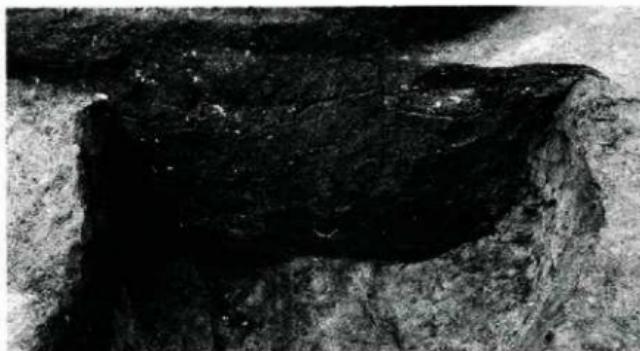


図版3

▲1 通路状遺構側面1 土塁断面



▲2 同上 側面2 土塁断面



▲3 土塁1 東から



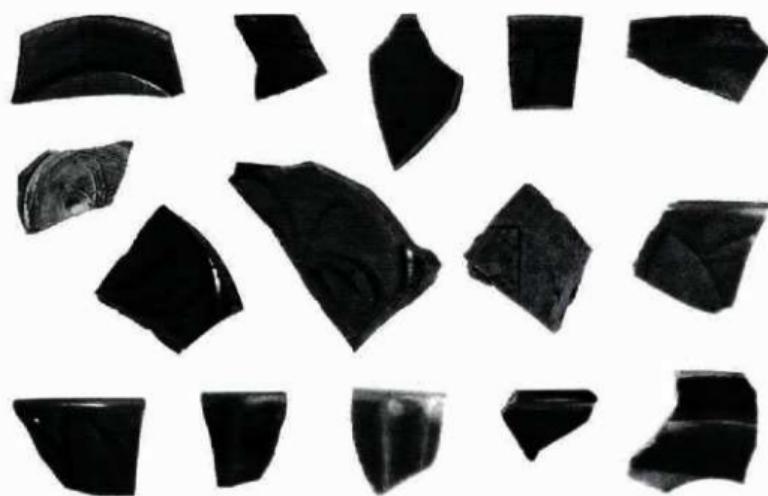


▲ 1 方形堅穴建物 4

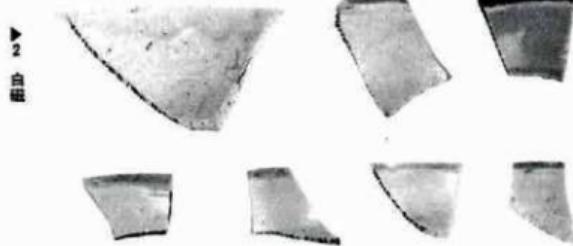
▼ 2 同上 (泥岩敷除去後)



圖版 5

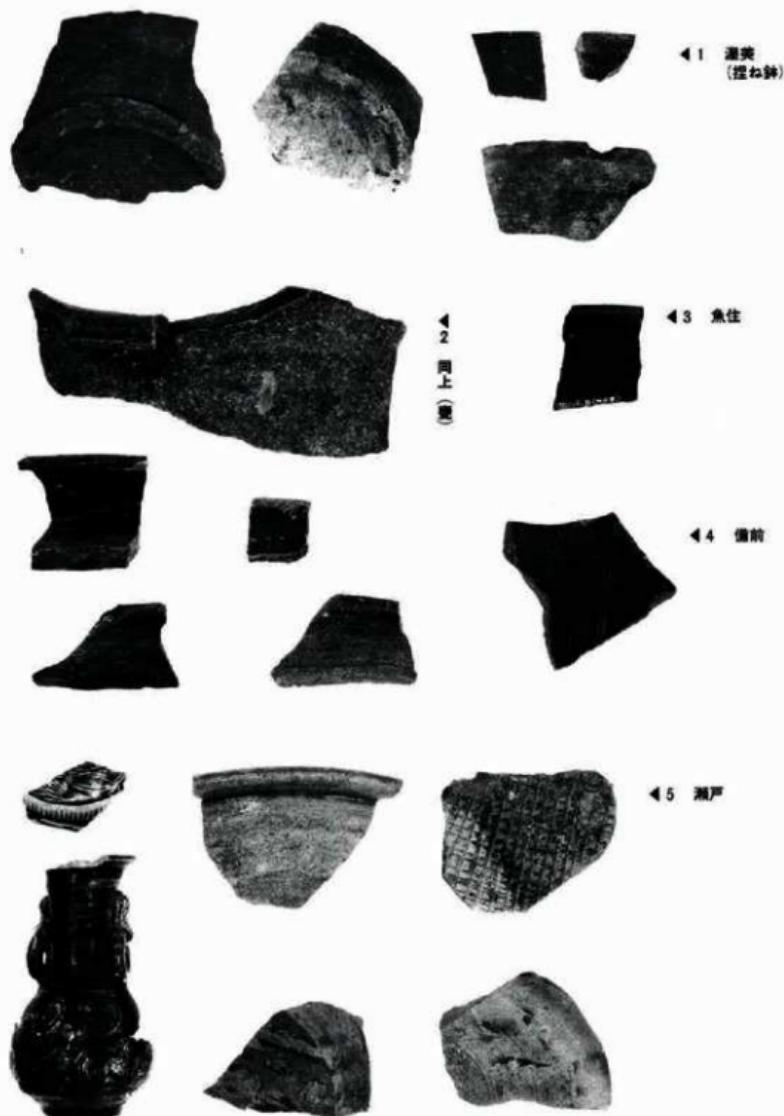


▲ 1 青磁



◀ 3 青白磁

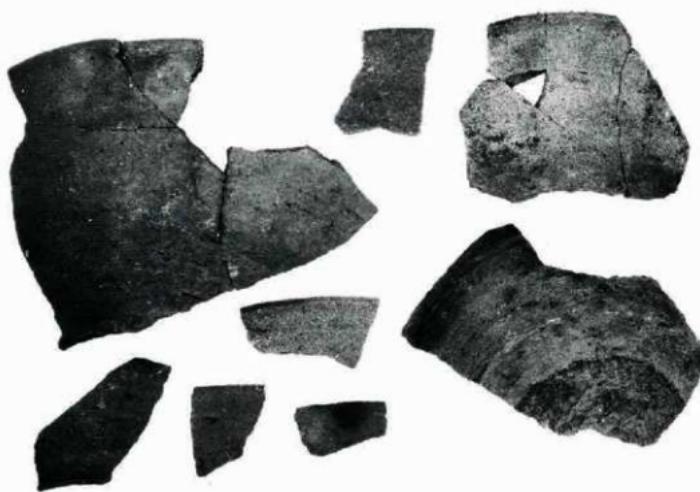
図版6





▼2 同上 (捏ね跡)





▲ 1 山羊坑窑系陶器

▼ 2 同上





▲1 かわらけ（手捏ね成形）

▼2 同上（ロクロ成形）



図版10



▲1 手作り陶土器類



▲2 白かわらけ

▲3 土製品



▲4 石器類

図版II



▲1 木製品

▼2 古代の土器



### 3. 妙本寺遺跡

大町一丁目1158番1 地点

## 例　言

1. 本報は鎌倉市大町一丁目1158番1における個人専用住宅建設にともなう発掘調査の報告書である。
2. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、図版作成、及び編集は福田が行なった。
4. 調査体制は以下のとおりである。  
担当者 福田　誠(鎌倉市教育委員会嘱託)  
調査員 馬渕和雄(鎌倉市教育委員会嘱託)  
調査補助員 桜田　守・村上和久・小柳津シゲ子
5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

## 第一章 遺跡の位置及び歴史的環境

遺跡は、本覚寺山門の東にある夷堂橋を渡り、妙本寺惣門の所を右に折れ八雲神社に向かって約100m程行った左手にある。この場所は旧妙本寺境内の一角にある。さらに50m南にはばたもち寺の名で親しまれている常榮寺がある。

この妙本寺惣門を横切り八雲神社の前を通り、名越に通じる三浦道にぶつかるのである。この道を妙本寺惣門より北にたどると、現在はとぎれてしまうが、かつては滑川を越えて宝成寺近くまで通じていたという。

妙本寺は山号を長興山と号し、開山は日郎である。開基は、比企大学三郎能本で文応元年（1260）開創と伝えられている。本尊は三宝祖師で、現在境内には祖師堂、客殿、庫裡、宝蔵、經藏、蛇苦止堂、惣門、二天門、倉庫等がたちならんでいる。塔頭として「新編鎌倉志」には十六坊、「風土記稿」では十二坊をあげているが現在は一坊もない。

妙本寺の寺地の在る比企ヶ谷は建仁3年9月、比企一族滅亡の地といわれ、宗祖転法論の靈場といいう。遺跡は西に向かって広がる比企ヶ谷の南部に位置する。



図1 調査地点位置図

## 第二章 検出した遺構

調査地点は、南北に延びる幅約2.5mの道路に接して約14m、奥行き約4.5mの範囲である。この敷地は道路面より約170cm程高い。道路に面して駐車場をつくるため段差の削平と道路面下1mまで掘削するため、発掘調査を行なった。調査の深度は掘削の根切り底として、一部深掘りのトレンチを入れた。地表下約130cmまで近、現代の埋め土で覆われていた。

### 調査第1面

地表下150cmのところで検出した版築面は碎いた土丹（泥岩）を突き固めて面を構築している。調査区の東側では、調査区に平行して石組の構築物を検出した。縁石石製（凝灰岩）の切り石で、幅1~1.3m、高さ33cm、厚さ15cmである。二列の溝状に並べた切り石の上面には等間隔で、また対になるように窪みがつけられていた。溝としての機能は考えにくく、むしろ墓地の基礎部分ではないかと思われるものの委細は不明である。

この他に不規則に点在する土壙、柱穴を検出した。

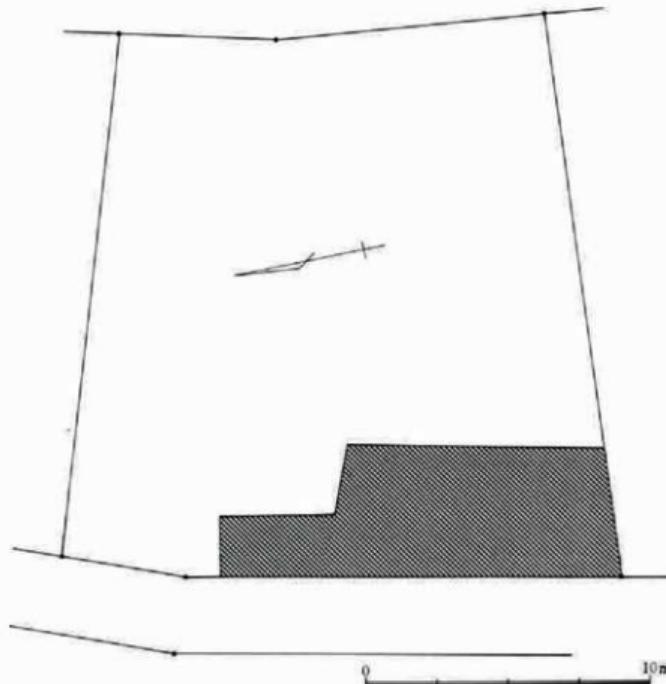


図2 調査区設定図

#### 調査第2面

地表下170cmのところで検出した版塗面で、土丹を砕き突き固めて面を構築している。第1面との間層には、灰色の砂質土が堆積していて容易に面をたどることができる。第1面と同様に面は硬く突き固められて、ほぼ水平である。

#### 調査第3面

地表下185cmで検出した土丹版塗面である。第1、2面と同様で、面上に灰色の砂質土が堆積している。調査区と平行して溝を3本検出した。東壁に沿う溝は、第1面の石組の下にあたり、版塗面の東側の限界を示すものと思われる。他の2本の溝も、東壁に平行して南北に走っている。これらの溝は約160cmの間隔で並んでいる。

#### 調査第4面

地表下250cmのところで検出した版塗面である。第3面が調査区の中央付近からなだらかに落ちて行き、第4面となる。この面も第1~3面と同様に、土丹を突き固めて版塗している。

#### 調査第4面下

調査深度が根きり底を越える第4面下について2個のトレンチを入れて地層を確認した。基本的に、土丹を突き固めた版塗面が続く。トレンチで地表下340cmまで掘り下げ少なくとも2面以上の版塗面を確認したが崩壊の危険がある為にこれ以上の調査を断念した。

### 第三章 出土した遺物

遺構のはほとんどが版塗された面だったので、いわゆる包含層はほとんど見られなかった。その為に遺構に伴う遺物はなく、すべて版塗された土層の中からの出土である。

#### 第1面出土遺物

##### かわらけ（1~7）

1は口径7.4cm、器高1.7cmの完形品である。明褐色で焼成は良好。2は口径7.4cm、器高1.7cmである。淡褐色で焼成は良好である。3は口径12.2cm、器高3.7cmの薄手で内湾するかわらけである。明褐色で焼成は良好である。4は口径13cm、器高3.5cmの内湾して開く形のかわらけである。5は

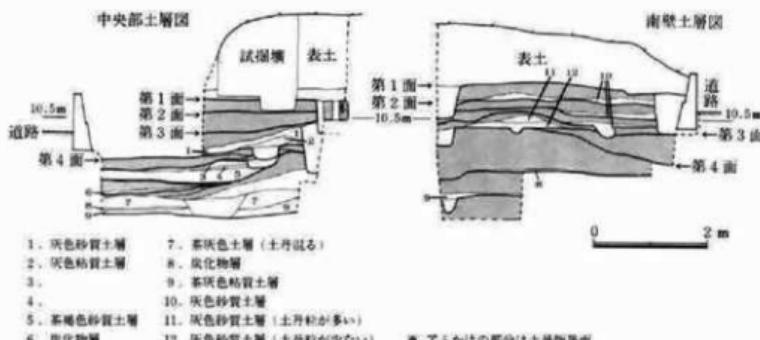


図3 土層堆積図

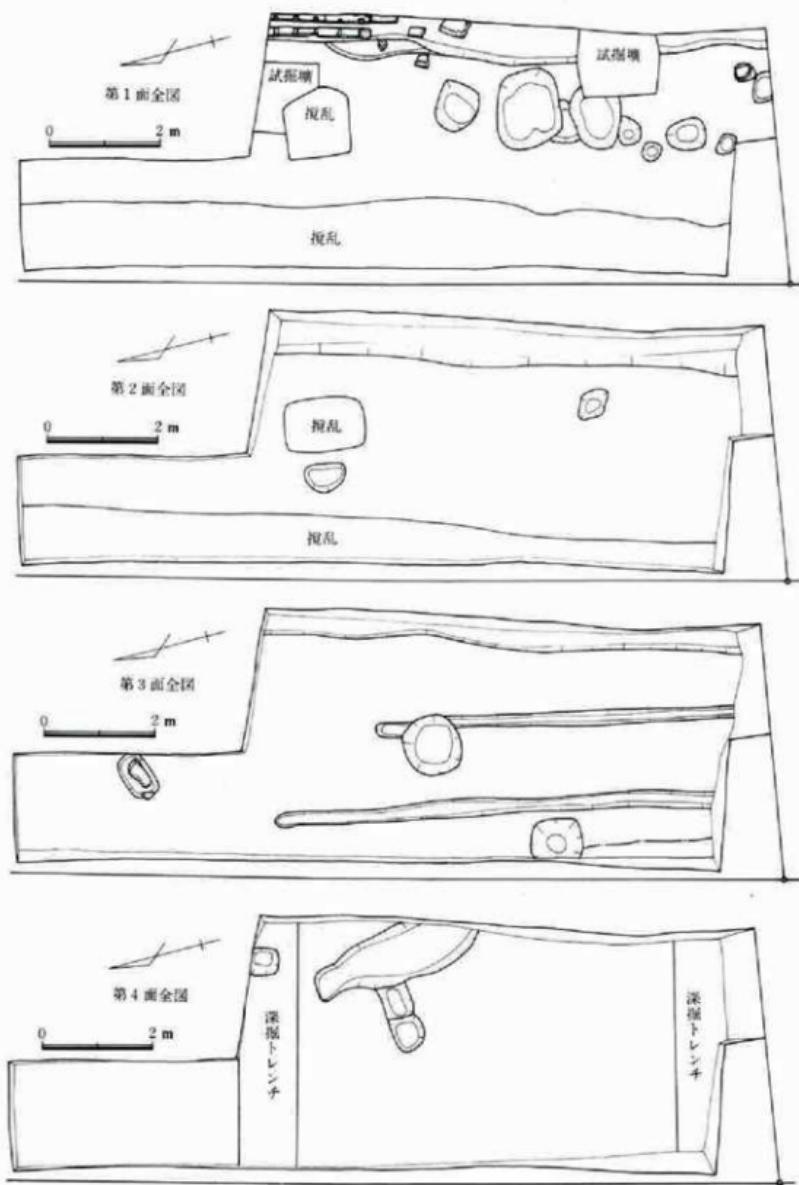


図4 造構全測図

口径12cm、器高3.4cmの内湾して、丸みの強いかわらけである。胎土の砂粒の動きから、口クロは時計廻りであることがわかる。6は口径11cm、底径5.7cm、器高3.4cmの薄く、内湾しながら立ち上がる硬く焼き締まった胎土である。口径と比べて底径が小さい。7は口径16.2cm、底径8.5cm、器高4.5cmの大型品で内湾しながら開いていく、胎土はきめ細かい素地で明褐色である。

#### 火鉢（8～10）

8～10共に口縁が直立する火鉢である。8と9は大型の菊花の印花を配し、輪花となす。10は小型の菊花の印花の下に球文帯を配する。

#### 国産陶器（11～21）

捏鉢、11は常滑で口径は27.4cmである。底部より直線的に開いてゆく。体部下半には指で撫であげが、明瞭に残っている。口縁端部は上方につまみ上げられている。内面はすり減っている。赤褐色で大粒の石英を多く含んでいる。20も常滑で口径は27.7cm、断面は角ばっており口縁端部はシャープに上方へつまみ上げられている。満赤褐色で焼き締まっている。21は常滑の摺鉢で、内面の条線は6本である。

瀬戸 12と13は平行鍋である。口縁部は折り返されてやや内湾ぎみになる。14は折縁皿である。口縁部は内湾ぎみに折まげられている。体部下半に笠削りが見られる。15はおろし皿である。口縁端部がやや上方につまみあげられている。16は天目茶碗である。体部は内湾ぎみに立ち上がり端部でやや外に開く、釉は鉄釉で厚くかけられている。17は小壺である。釉は鉄釉で内外面共に厚くかけられている。18と19仏壇瓶である。18は底径4.2cm、残高7.1cmである。釉は灰釉で、頸部に螺旋状の沈線が巡っている。19は大型の仏壇瓶の底部である。糸切り底で外面には灰釉がかけられている。復原底径は9.2cmである。

#### 中国磁器（22～26）

22と24は青白磁である。22は小皿で内底面の外周に雷文、内側に花文状の模様を配する。素地は白色で堅緻である。24は合子の蓋である。素地は白色で堅緻である。釉は透明な水青色である。内側まで厚く釉をかけている。23と25は白磁である。23は皿で口元になるものと思われる。25は白磁壺の底部である。復原底径は7.4cmである。底部は削り出されている。四耳壺と思われる。26は青磁の鉢である。復原底径は9.6cmである。素地は灰白色で堅緻である。釉は透明な緑色で厚くかけられている。

#### その他の遺物（29～33）

27と28は銭である。計4枚の銭が出土しているが、判読できたものはこの2枚である。27は元祐通宝、28は熙寧元宝である。いずれも北宋銭である。

29～32までは砥石である。31以外は仕上げ砥で形は長方形になる。石質はきめの細かい泥岩質である。31は荒砥で形も六角形になる。

33は須恵器壺の体部片である。

#### 第2、3面出土遺物

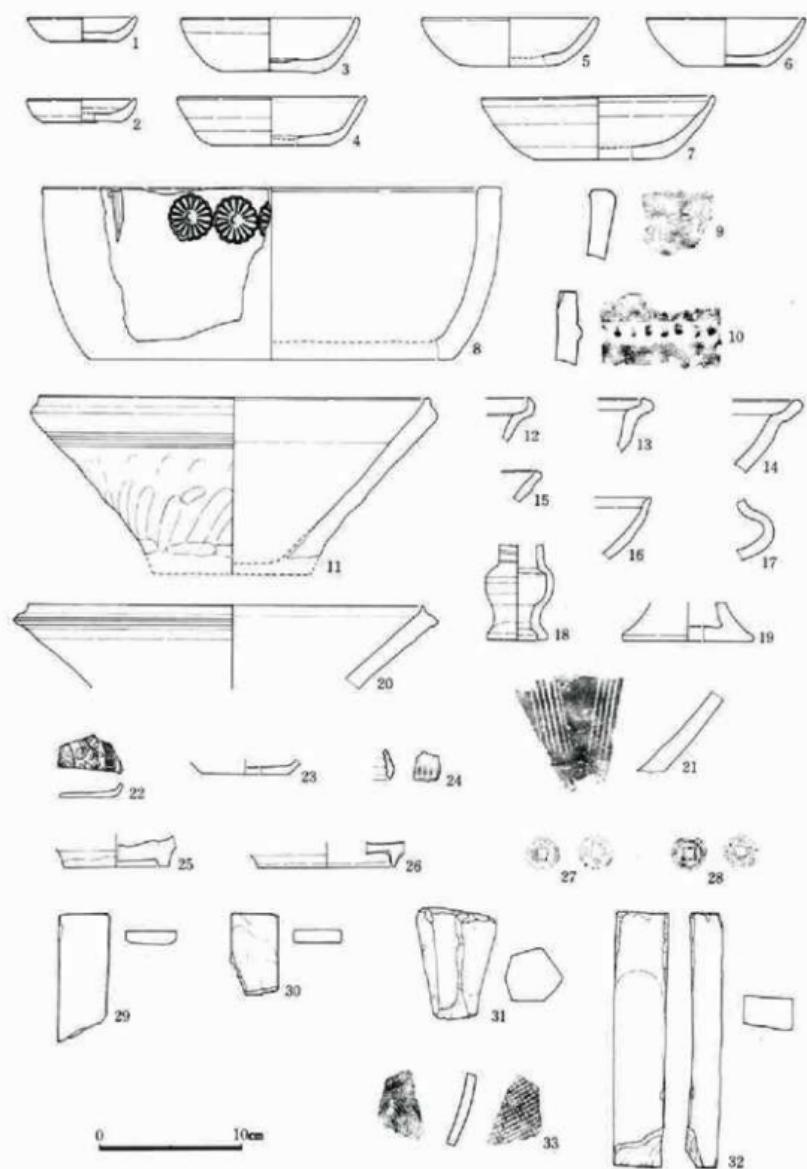


図5 第1面出土遺物

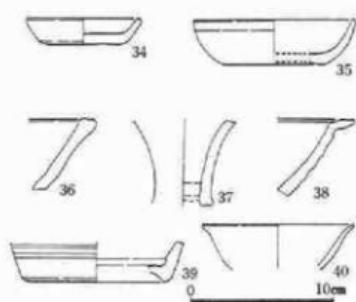


図6 第2・3面出土遺物

### かわらけ (34、35)

34は口径7.6cm、器高1.7cmである。胎土は褐色で端部は内溝しながら立ち上がる。35は口径11.2cm、器高3.1cmである。赤褐色で薄手の体部は内溝して立ち上がる。

### 国産陶器 (36~38)

36は山茶碗空系の捏鉢である。37は瀬戸の大型の仏華瓶である。胎土は灰白色で堅緻、釉は灰釉で不透明な緑色である。38は瀬戸の折絞皿である。外面にロク口成形痕が明瞭に残る。

### 中国磁器 (39、40)

39は青白磁の梅瓶底部片である。胎土は灰色で堅緻である。40は白磁口元碗である。口径は10.4cm、胎土は白色で堅緻である。

### 第4面出土遺物

#### かわらけ (41~54)

41は口径7cm、器高1.6cmである。体部中程に軽く段差がつく。明赤褐色で焼成は良好である。底部にスノコ痕が明瞭につく。42は口径8cm、器高1.7cmである。褐色で体部は丸みを帯びる。43は口径7.7cm、器高1.5cmである。体部中程に段差がつき、淡褐色で焼成は良好である。44は口径8.2cm、器高2cmである。体部中程に段差がつき、淡褐色で焼成は良好である。45は口径7.3cm、器高1.9cm

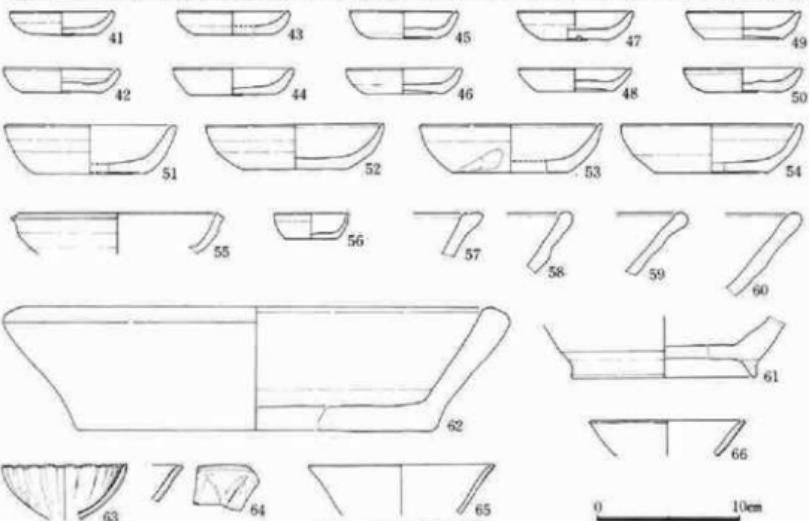


図7 第4面出土遺物

である。体部の立ちがきつく深い印象を受ける。明赤褐色で焼成は良好である。46は口径7.9cm、器高2cmである。体部は薄く仕上げ、淡赤褐色である。47は口径7.9cm、器高2cmである。体部中程に段差がつき、淡赤褐色で焼成は良好である。48は口径7.8cm、器高1.7cmである。薄く仕上げられており明赤褐色で焼成は良好で焼き締まっている。49は口径8cm、器高1.9cmである。体部中程に軽く段がつく。淡褐色で焼成は良好である。50は口径8.2cm、器高1.7cmである。淡褐色で焼成は良好である。51は口径11.7cm、器高3.4cmである。体部の立ちがきつく深い印象を受ける。明赤褐色で焼成は良好である。54は口径11.8cm、器高3.4である。内湾しながら立ち上がる体部中程に軽く段がつく。53は口径12.7cm、器高3.4cmである。器高が高く体部中程に段がつく。明赤褐色で焼成は良好である。54は口径12.5cm、器高3.4cmである。内湾しながら立ち上がる体部は薄く仕上げられて外面に強いナデがまわる。

#### 第4面出土遺物

##### 国産陶器(55~61)

55は瀬戸のおろし皿で、口径13.8cmである。淡褐色できめが細かい素地である。断面が角ばってつまみあげられている。焼成は良好である。56は瀬戸の入子で、口径5cm、器高1.8cmである。輪花にはならない。底部は先で削っている。口縁端部から内面にかけて降灰が見られる。

57~61は山茶碗窓系の捏鉢である。いずれも小片の為に口径は不明である。外面に強いナデがあり、口縁端部を丸くおさめている。61は底部片である。体部に大粒の石英を含む。

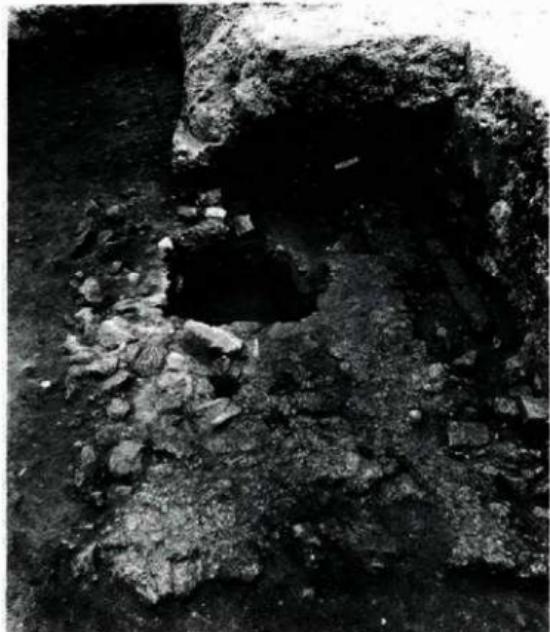
62は火鉢である。口径33cm、器高8.7cmである。無文でやや口が広がる体部を持つ。

##### 中国陶器(63~66)

63は輪花状に刻みが入る青磁碗である。復原口径が8.6cmで小さな底部が付くものと思われる。胎土は白色で堅硬、釉は淡緑色である。64は鶴蓮弁文碗である。直線的に開き、口縁端部が僅かに外反している。65、66は白磁口兜である。65の口径は13cm、66の口径は10.9cmである。外反しながら開いて行く。

## 第四章 まとめ

当遺跡は、第1面から第4面まで基本的に土丹で版塗された道路状造構であった。現在妙本寺から八雲神社へと抜けている道路と平行していることから道路の位置は大きく変化していないと思われる。造構に伴って出土した遺物はない。すべて土丹版塗された客土からの出土である。その中に新旧の遺物が混在している。概ね第4面が14世紀前半に、第1面が14世紀後半から15世紀初めまでの年代が与えられる。第2、3面については遺物の量が少ないが、第1面に統く14世紀代の年代が与えられる。第4面下については調査が及ばなかったが人為的に積み上げられた土層が続いていることから、更に古い時期の道路が存在している可能性がある。今回不明であった道路西側の限界も今後明らかになろう。



▲北区第1面

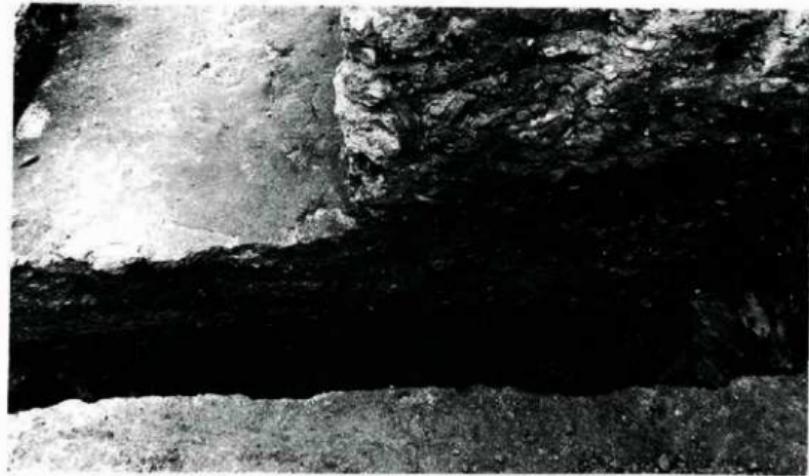
▼北区第1面 石組





▲北区第1面 石组

▼北区土层断面

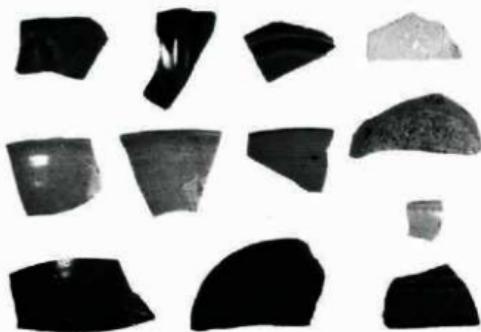




▲南区第2面道路遺構

▼南区第3面道路遺構

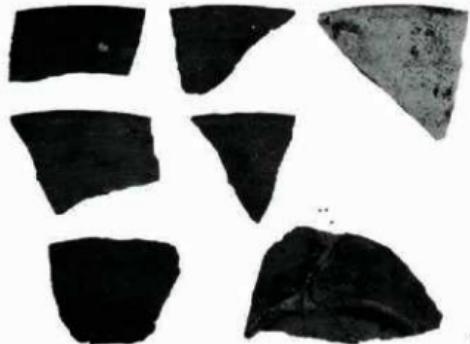




◀ 1 船載陶磁器



▶ 2 船戶



◀ 3 山茶碗蓋系捏鉢



▲ 1 1面出土かわらけ



◀ 2 3面出土かわらけ



▼ 3 4面出土かわらけ





▲2 常滑り鉢



▲1 手拂り



▲3 振鉢



▲4 斑石



▲5 錢



▲6 須恵器

## 4. 玉繩城跡

城廻字中村654番地点

### 例 言

1. 本報は鎌倉市城廻字中村654番1他における渡辺清氏邸新築工事に伴う発掘調査の報告である。

2. 発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は昭和62年4月27日から5月19日迄である。

3. 調査参加者名は本ページ下段に示した。

4. 本書は、原稿執筆を大河内勉、図版作成を木村美代治・大河内勉、写真撮影を木村美代治・大河内勉、菊川英政がそれぞれ担当した。

5. 発掘調査に関しては、東久建設株式会社の協力を受けた。

### 調査参加者

主任調査員 大河内 勉

調査員 木村美代治・菊川英政

調査補助員 梅木信之・新国哲也・汐見一夫

村上和久・浜口 康・武 淳一

## 第一章 玉縄城の地理的・歴史的環境（第1～3図）

玉縄城は鎌倉市の東北端に位置し、藤沢市及び横浜市戸塚区に接する。地形的には相模台地の南端、三浦半島の基部に位置する。城郭施設は広い範囲で確認でき、城廻を中心には植木、打越、間谷に及んでいる。本城の立地個所は台地の一部が周囲から隔絶した地点で、主郭部付近を中心として尾根・谷戸が複雑に延び、独立した地形を形成している。いわゆる平山城である。標高は最高部で約80mである。城の前面には柏尾川があり、自然の要害としての役割を果たしている。城内の地名には第2図に示したように、城山、諏訪塙、七曲、相模陣、城宿、陣屋坂、ふあん坂、清水小路などがある。また支城が戸塚区長尾台（長尾砦）、藤沢市渡内（二伝寺砦）、高谷（高谷砦）、大鍋（おんべ山砦）にある。

玉縄城域では昭和30年代から学校建設、大規模な宅地開発、集合住宅建設が行われ、大きく様相が変貌している。ただ未開発の地域では、曲輪、堀切、土塁などが部分的に遺存しているのが現在でも確認できる。大規模開発以前の状況は、赤星直忠氏による詳細な踏査記録によって、玉縄城の造構の全容が理解できる（『鎌倉市史』考古編）。この記録は現在では大変貴重な資料であるといえる。これによると、城の存在する丘陵の東半部を中心部（複郭陣地）、西半部を付属地帯陵としている。主要部分は「本丸」を中心として、その周囲に土塁・堀を隔ていくつもの曲輪を配置し、それから各方向に延びる尾根には曲輪と堀切が多数構築されていて、各所の崖には幾段もの切岸と狹

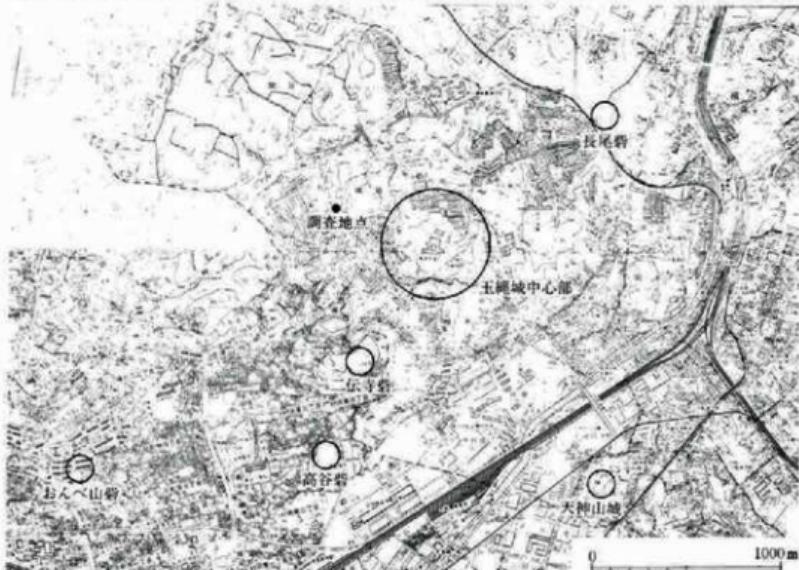


図1 玉縄城と周辺の砦 (1/30000)



図2 玉綱城での発掘調査地点（昭和62年5月現在）(1/10000)



図3 玉綱城周辺の地形（昭和29年） 図中の数字は農地地図（1/2万版）（1:3000）

い削平部が見られるという。さらに支城を含む周囲の丘陵地帯が広義の玉繩城であり、主防衛方向は南方にあるとした。城内の各曲輪、支城の状況については赤星氏の詳細な記録を参照されたい。

玉繩城は永正9年（1512）10月に北条早雲（註1）が、三浦半島から相模一円に勢力を広げていた三浦氏を制圧するために、交通の要地であり地形的に適した当地に築いたものである（註2）。北条氏は勢力を関東各地に拡大するに従い、各地に多くの支城を設けているが（註3）、玉繩城もその一つである。支城は既に存在していた城郭を利用した例が多いが、玉繩城は新たに城を普請したもので、北条氏の築城方法を知る上で重要な城郭と言える。初代の城主は北条氏時、以後綱成、氏繁、氏舜、氏勝の順で城主を勤めた（註4）。その間数度にわたり当城は戦乱に係わるが（註5）、落城することはなかった。天正18年（1590）4月豊臣秀吉の小田原討伐に伴い、山中城落城後本城は開城した。北条氏の滅亡後は、徳川家康により家臣が配置されていたが、ほどなく廃城となつたものと思われる（『新編相模国風土記稿』円光寺の項では、元和5年〔1619〕廃城とされる）。その後玉繩藩の陣屋が城の南に置かれていたが、元禄16年（1703）玉繩藩は廢された。

城内の施設は築城後頻繁に改修、改修が行われたと思われるが、永禄6年（1563）には5年に一度ずつの城堀の修理を定めている。また同2年（1559）に城を増築し、同8年（1563）に清水曲輪の堀の修理を行っている。

玉繩城内では過去に數箇所で発掘調査が実施されている（第3図）。北東外周部に位置する城廻字打越165地点の調査（4）は丘陵部を対象にしたため、建物址などは見られないが、縦堀・堀切・曲輪・溝状造構・平坦面などが良好に検出され、堀切でのローム質土の地業を元和偃武後の廃城の際の措置であるとしている（註6）。主郭内の調査（1）では石積みの井戸・溝などが検出され、16世紀の中国製陶磁器が出土している（註7）。南西外郭部（2）では平坦面・段築部・土壤状造構などが検出されているが、北西外周部での調査と同様の廃城後の地業が認められた箇所がある（註8）。第3図には示していないが、今次調査後に植木地内の2箇所で発掘調査が実施されている。

## 第二章 調査地点の概況及び調査概要（第4図、図版1）

今回の調査地点は玉繩城の北西外周部に位置する。赤星氏によれば、付属地帯の一部である。玉繩城主郭部から北西に延びる尾根の西側斜面下部にあたり、玉繩城の主郭部からは約550m離れている。この尾根の主郭部寄りの地点は既に宅地開発が進み、旧状を失っているが、今回の調査地点を含む北西側は現在でも雑木林として往日のおもかげをかなり残している（註9）。尾根の西側には尾根と同方向に細長い谷戸が延びて（註10）、この谷戸の対岸には清水小路に続く複雑に入り組んだ尾根が存在していた（宅造により現状変更されている）。この谷戸の入口部付近には左右の尾根が迫り出している箇所が見られ、敵の進入に備えた何らかの防御施設の存在が想定できる。

調査地点の南側及び北側は小さな沢になっているが、それぞれ数段の曲輪状施設が構築されている。特に北側は遺存状態が良い。また調査区内には半円形のプランで岩盤を切り崩し、切岸が現れ

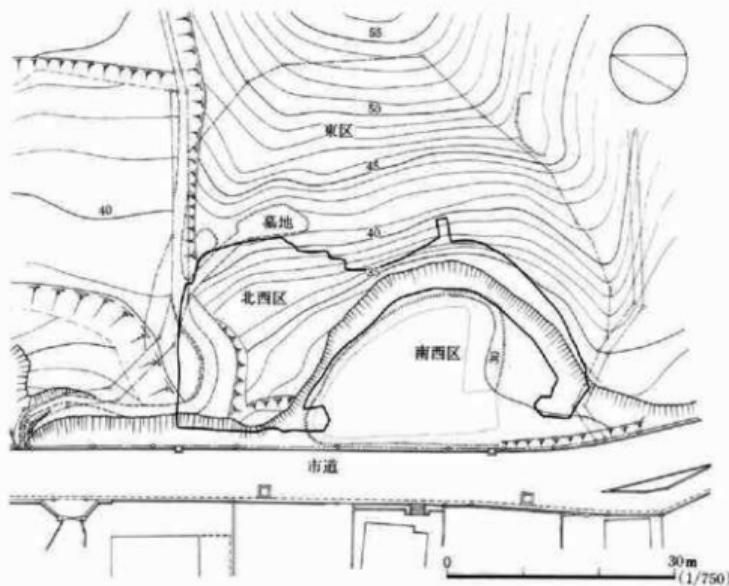


図4 調査地点の地形及び調査区設定状況

ている個所がある。調査地点前面の谷戸は岩盤が深く落ち込んでいることから、もともとは現在よりかなり低い位置に形成されていたものと思われる。また谷戸内には水分を含みかなり粘性の強い土が堆積しており、かつては湿地のような状態であったのであろう。

今次調査地区は西向きの斜面の下部に位置するが、調査区内は形状により、東区・北西区・南西区の3区に分割できる。東区はかなり急な斜面、北西区はその斜面が小さく尾根状に張り出した個所、南西区は周囲を巡る2段の切岸とその内部の低位の平坦面である。標高は30~54m。南西区の先端部分（西側）は道路により削られている。調査対象は、現状変更になる北西区及び南西区の切岸部とした。

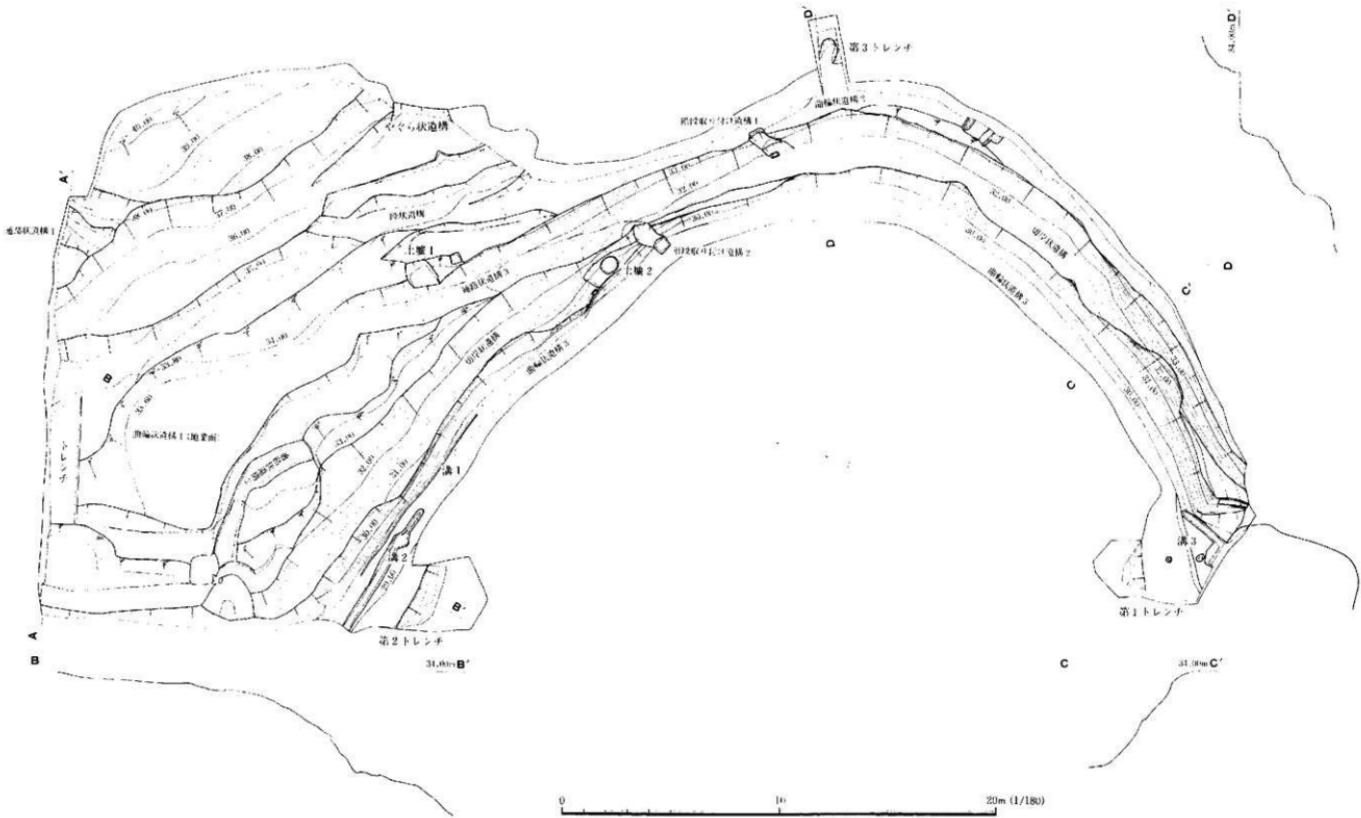
発掘調査では重機によって表土を除去した後、遺構の検出を行った。南西区の切岸状遺構は既に一部露出している状態であった。北西区で検出された地業造構は、玉繩城跡の既往調査でも見られた庵城後の造作と思われたため、上面での精査は行わずに地業土を除去し、土層断面の観察に重点を置いた。現状変更されない地点には、トレンチを3個所設定するに留めた。

調査の結果、玉繩城関連の遺構あるいはその前後の時期の遺構・遺物が検出された。伴出する遺物が僅かなため、正確な年代を示すことは困難であるが、各遺構の時期は概ね次のように考えられる。

玉繩城築造以前（16世紀初以前）……やぐら状遺構、土壤1

玉繩城期（16世紀初~17世紀初）……曲輪状遺構1~3、切岸状遺構、段状遺構、通路状遺構、附

34.0m A'



第5図 造構全測図

- I. 灰土及び灰土と地表土の混合層  
 II. 地盤土（礫層）（ドローム、王跡利を混入する暗褐色粘質土、風化が進んでいる）  
 III. 土壌黒土（灰白色シルト）  
 IV. 地盤土（鉄錆状態）（土井に一帯を含む暗褐色土、塗山の端部と思われる黄褐色シルト層など）

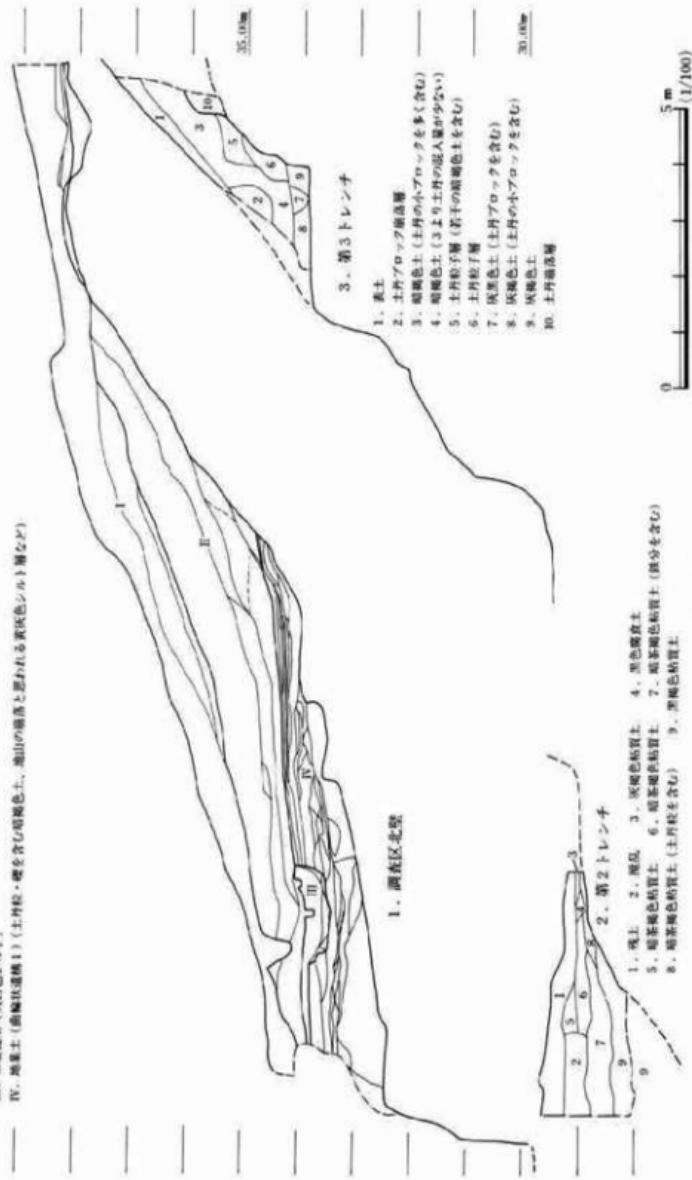


図6 土壌図

段取り付け遺構、溝  
玉穂城廃城後（17世紀初以降）……地業遺構、土壤 2

### 第三章 検出遺構（第5図、図版2・3—1）

#### 1. 地業遺構（第6図—1、図版3—2）

調査区の北西隅で検出された。調査区外（北側）に続くことが確認できる。調査できた範囲は南北8m、東西14m程度である。ほぼ曲輪状遺構1の上部に位置し、この曲輪の機能を失わせるために地業したものと思われる。調査前の観察では、西に傾斜する小さな尾根が延びているように思われた。地業の厚さは50~170cmを測る。地業土はハードローム、玉砂利を混入する暗茶褐色弱粘質土で、良く締まっている。地業土の上には約80cmの厚さで、表土及び表土と地業土の混合層が見られた。この地業は廃城後の所産と考えられる。石臼片が1点地業土中より出土した。

#### 2. 曲輪状遺構

曲輪状遺構は3箇所で見られた。

#### 曲輪状遺構1（第7図、図版3—3）

調査区の北西隅、地業遺構の下で検出された。上下に2枚の生活面を有する。下面是地山面、上面は地山面に40~130cmの地業を行い、その上面を生活面としている。地業土は土丹粒・礫を含む暗褐色土、地山の崩落と思われる黄灰色シルト層などである。広さは上面・下面とも同じで、南北6.5~10m、東西9~11m確認できた。地業遺構と同じく、北側は調査区外に延びており、また西側も道路で削られており、全体の規模は不明。両面とも西側に向かって緩く下っている。東側は斜面に接し、南側は小さな段を隔てて通路状遺構が存在する小平坦面となる。面上の遺構としては、上面で土壤1基（トレンチで検出）、下面で段が1個所見られたのみである。



図7 曲輪状遺構1(地山面)付近平面図

### 曲輪状遺構 2

第3トレシチ付近の切岸状遺構の上部に存在する。一部しか検出しておらず、全体の形状・規模は不明。小規模な腰曲輪的なものと思われる。切岸状遺構とは階段取り付け遺構1により接続している。また北側の段状遺構とも接している。東側は急斜面となっている。

### 曲輪状遺構 3

切岸状遺構の内側下部に存在する。一部分検出した。切岸状遺構に沿って半円形に細長く伸びているものと思われる。形状は帶曲輪状を呈するのであろう。幅は第2トレシチ付近で2.9m、反対側の第3トレシチ付近で2.4mを測る。この遺構の内側は地山面がさらに落ち込んでいるのが確認されており、おそらく内側の低位にさらに平坦面が形成されているものと思われる。この遺構に伴うものに溝1・2がある。また階段取り付け遺構2によって通路状遺構3と結ばれている。

### 3. 切岸状遺構 (註11) (図版4)

斜面の下部を半円形のプランで構築されている。上下2段構造になっており、上段は曲線での長さが40m、下段は同じく56m確認できた。構造は上下2段とも岩盤をオーバー・ハンギング気味に削り出し、下部を通行可能な程度に緩い傾斜にしている。下段はそのまま曲輪状遺構3に続いている。調査前に既に一部は露出しており、他の部分でも後世での土砂の堆積は少ない。

上段の北側部分は通路状遺構となって曲輪状遺構1に続いている。また階段取り付け遺構1で曲輪状遺構2と通じている。下段の階段取り付け遺構は通路状遺構3と曲輪状遺構3を結んでいる。上段の階段取り付け遺構1付近で染付の碗片が2点出土した。

### 4. 段状遺構

20~30cm程度の段が上下に3段構築され、それにより幅1~1.5m程の細長い平坦面が3面造成されている。長さ約10mを測る。斜面の下部を掘削して作られている。内部にピットなどの遺構は検出されていない。一部は通路のような用途を有していたものと思われ、曲輪状遺構3と接している。段状遺構の上にはやぐら状遺構の平坦面が存在する。

### 5. 通路状遺構

通路状遺構は3箇所で検出された。

#### 通路状遺構1 (図版5-1)

調査区北端の斜面の途中で検出された。南北に走行する。確認できた長さは約2m、上端幅1.3m、下端幅0.3mを測る。断面は台形に近く、深さは約40cm。調査区外に延びるが、おそらく北側に存在する曲輪(未調査)に通じるものと思われる。もう一方は斜面で消失してしまう。本遺構は溝の可能性もある。

#### 通路状遺構2 (図版5-2)

曲輪状遺構1の南側で検出された。東西に走行する。確認できた長さは9.5m。西側は下り降りる形状になっている。幅は1m前後、掘り込みは浅い。

#### 通路状遺構3

段状造構の下に存在する。切岸状造構上段の一部を利用している。南端は階段取り付け造構2、北側は曲輪状造構1に接続している。長さ13.5m、幅約1mである。断面形は浅い皿状を呈する。

#### 6. 階段取り付け造構

切岸状造構を昇り下りするための階段あるいは梯子を設置した部分の造構である。2個所存在する。急角度の岩盤面を垂直に浅く掘り込み、下面に階段等を据えるためのピットを設けている。

#### 階段取り付け造構1 (図版5-3)

切岸状造構の上段に存在する。曲輪状造構2に接続する。高さ約2m、幅0.7~1.1m。ピットは径20×40cmで長方形を呈し、深さ8cm。

#### 階段取り付け造構2 (図版5-4)

切岸状造構の下段に存在する。通路状造構3と曲輪状造構3を結んでいる。高さ2.4m、幅0.7~0.9m。ピットは50×65cmで長方形を呈し、深さ約20cm。

#### 7. 溝

溝は3条検出された。

#### 溝1・2

両造構とも曲輪状造構3の上面で検出された。ほぼ並行に走っている。溝1・2はそれぞれ幅15cm、40cm、確認できた長さは9.6m、6.5mである。両造構とも非常に浅い（深さ10cm以下）。双方とも底のレベルは西側に向かって低くなっている。排水目的の溝であろう。

#### 溝3

切岸状造構の南端直下で検出された。検出された長さは2.2m。幅20cm、深さ10~20cmを測る。断面形は箱形を呈する。

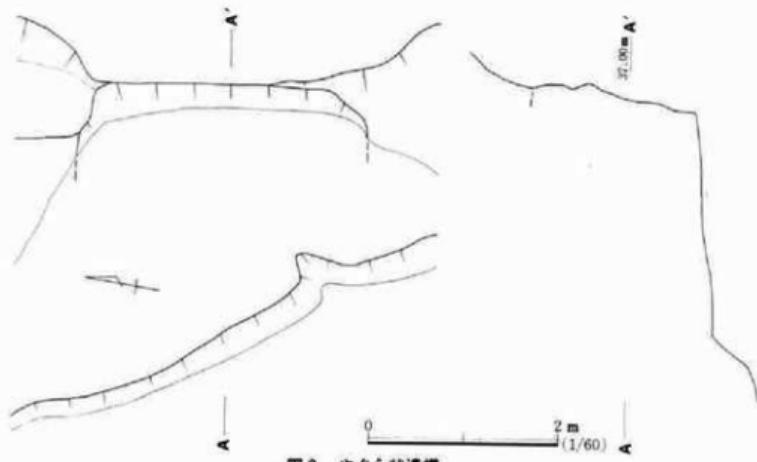


図8 やぐら状造構

### 8. やぐら状遺構（第8図、図版6-1）

段状遺構の上に存在する。遺存する形態は、ほぼ垂直の奥壁と手前に小さな平坦面を有する構造である。奥壁は高さ1.75m、幅3.05m、平坦面の奥行きは最大で約3mである。天井部が失われた「やぐら」と見ることができるが、納骨穴等は検出できなかった。覆土の最下層に宝永の火山灰が堆積していた。遺物は出土していない。

### 9. 土壙

#### 土壙1（第9図、図版6-2）

段状遺構と通路状遺構3の間の斜面で検出された。岩盤面での検出のため、南西側は旧状を失っている。平面形は方形に近く、径は1.25×1.2m、深さ0.95mを測る。底面は平坦である。底面直上で錢貨が6枚出土した。枚数からみて六道銭と思われ、この遺構は墓壙の可能性が高い。出土した錢貨の鋳造年代、存在している位置から見て、この土壙は玉繩城築城以前（15世紀前後）の所産であろう。

#### 土壙2（第10図、図版6-3）

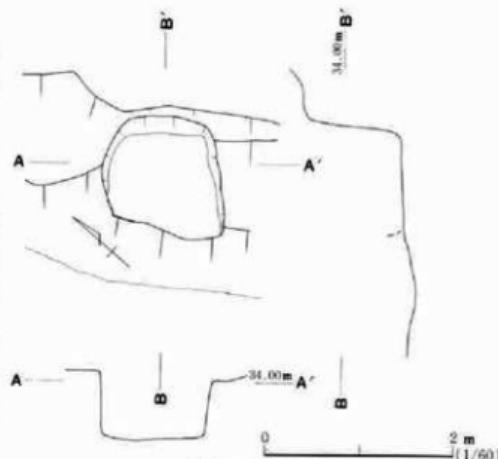


図9 土壙1

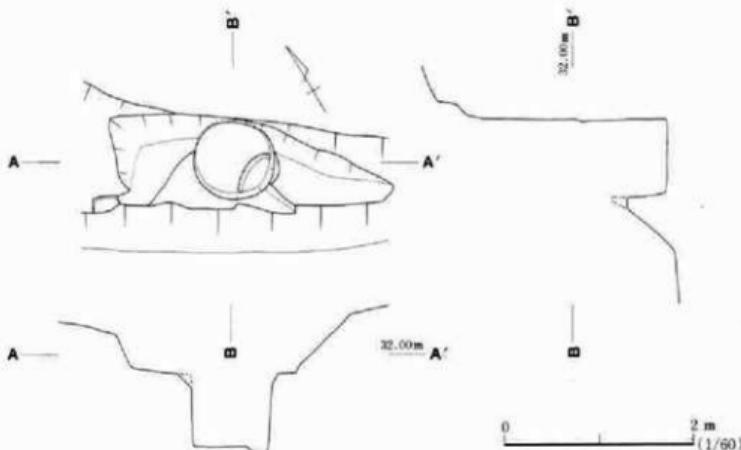


図10 土壙2

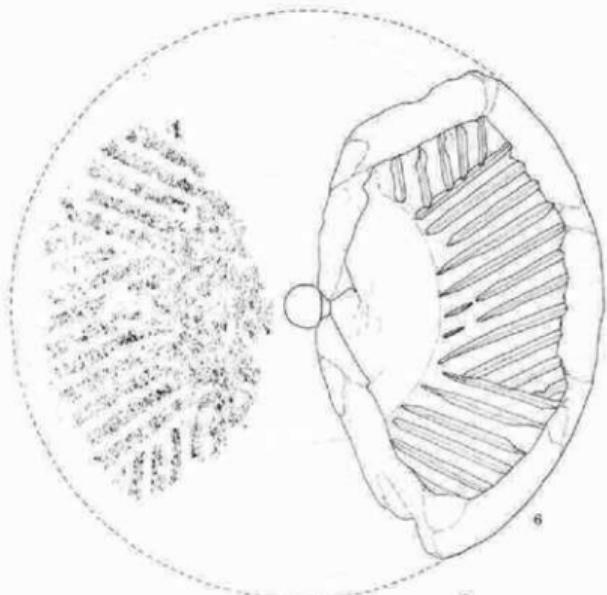
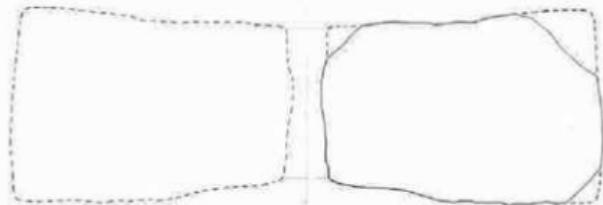
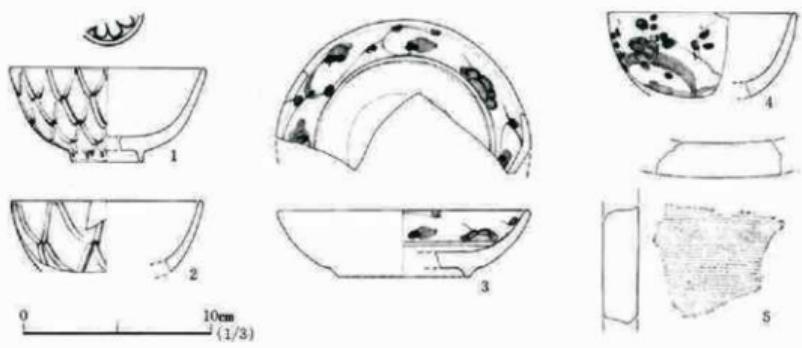


図11 染付・瓦・石臼

切岸状遺構（下段）中に存在する。幅2.9m、奥行き1.0mの小テラス内に土壌が埋り込まっている。テラスの奥壁は高さ2.4m。土壌はテラスのほぼ中央にあって、円形を呈する。径は80~85cm、深さ75cm。底面はほぼ平坦だが、一部やや深くなっている。土壌内の覆土中から染付皿1片、同碗1片（切岸状遺構で出土したものと接合）、瓦1片が出土した。出土遺物からみて、玉繩城廃城後の遺構である。用途は不明。

## 第四章 出土遺物（図版8）

### 1. 染付（第11図1~4）

碗が3点、皿が1点出土した。1・2は外面に二重の網目文を施した碗である。1は見込みに菊文花を描いている。網目文の書き方は1の方が密である。素地は1が灰黒色で、2が灰白色を呈する。1は復元口径が10.2cm、同高台径3.6cm、器高5.0cm。2は復元口径9.9cmである。1は南西部表探、2は土壌2覆土中と切岸状遺構（上段）の堆積土中から出土し、接合したもの。3は体部内面に唐草文を施した皿である。素地は灰白色を呈する。見込み部分の釉は蛇の目に削り取っている。高台疊付は露胎し、砂粒が付着している。口径13.0cm、高台径7.0cm、器高3.5cm。土壌2の覆土中から出土。4は外面に花卉文が施された碗である。素地は灰白色を呈する。復元口径9.6cm。切岸状遺構（上段）の堆積土中より出土。

### 2. 瓦（第11図5）

瓦は土壌2の覆土中から残瓦片が1点出土したのみである。14本単位の条線が施されている。

### 3. 石臼（第11図6）

地業遺構の客土中より上臼片が1点出土した。復元径42cm、高さ13.4cmを測り、やや大ぶりである。条線は下面の外周部3/5程度の幅に施されている。6単位で、1単位は11条である。

### 4. 銭貨（第12図）

土壌2の底面直上から6枚出土した。六道銭であろう。1~3は熙寧元宝（1068年初鋤）、4は元祐通宝（1086年初鋤）、5は宣和通宝（1119年初鋤）、6は永樂通宝（1408年初鋤）である。永樂通宝が明錢、その他は宋錢である。

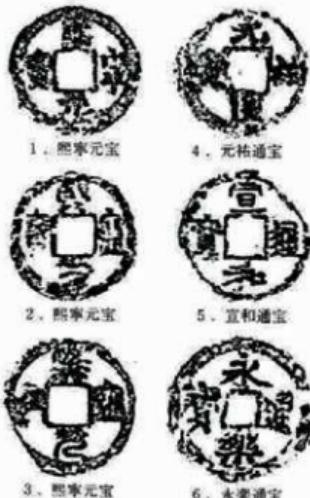


図12 銭貨（1/1）

## ま　と　め

今回の調査地点は赤星氏によれば、玉繩城の主要地帯（主郭部周辺）の西側に広がる付属地帯跡の一部である。ただし表面観察でもその関連遺構の存在は確認でき、地形的な判断からも玉繩城の外郭部としての構造・役割を有していたことは確実である。今回の発掘調査でも玉繩城の施設の一部と見られる遺構が多く検出されており、上記の事を裏づけるものとなろう。

調査地点は尾根の西向きの斜面下部である。検出された遺構のうち、明確に玉繩城関連の遺構と思われるものとしては、曲輪状遺構、切岸状遺構、通路状遺構などがある。曲輪状遺構は調査地区外の近接する個所でも存在しており、調査地点周辺では多く見られる。ただ玉繩城の中心部に存在していたような、占地面積が広く、土壘・堀などに囲まれた曲輪とはやや様相が異なり、尾根や小さな谷にテラス状に設けられるケースが多く、周囲に土壘や堀は見られない。いわゆる袖曲輪あるいは腰曲輪のような形態である。これらの曲輪状の施設は谷戸面よりは高所に築かれ、谷戸とは切岸により隔離されており、何らかの防御施設と考えられる。廃城後の地業行為は城としての機能を消失させるために行われたものと思われるが、曲輪状遺構の上部に地業が施されたことは、この遺構が防御施設としての役割を保有していたためと理解できる。今回の調査では曲輪状の遺構内には特に明確な遺構は存在していなかった。

今回本調査だが、切岸に囲まれた内側の範囲にも平坦面が形成されていると思われる。ここは谷戸面との比高差も大きくなり、比較的広いことから、防御用の施設を想定するよりも、何らかの建物が存在していたのではないかと思われる。

調査地点の一帯は平時にはその下部を家臣などの居住区として利用し、城攻めの際には尾根上の施設により、敵の進入を阻止するような役割をも有していたのであろう。ただ尾根を含む丘陵部は表面観察で、ある程度当該期の遺構の有無、形状を判断する事ができるが、谷戸部分は後世の土砂の堆積が厚く、玉繩城関連の施設としてどのようなものであるか不明である。過去の調査でも谷戸内を対象にした例はなく、谷戸部の状況如何によっては、別の見方ができるかもしれない。

今回の調査でも確認されたローム質土での地業は、城廻字打越165地点ならびに南西外郭部の堀切、段築部、土壘で検出されたものと同様のものと思われ、玉繩城廃城後の所産と考えられる。馬渕和雄氏は上記2地点のこの造作について、「おそらく、元和偃武後の廃城の際いっせいにとられた措置であると思われる」とした（註12）。これらの城の機能を喪失させるような地業行為が、北条氏滅亡後の措置であることは、その地業の層位から見ても明らかであるが、実施時期・理由などについては明確ではない。徳川幕府は大坂夏の陣直後の元和元年（1615）、武家諸法度により一国一城令を定め、大名の居城以外の領内の城郭を破却するよう命じている。この制度は西日本の大名を中心に適用されたものであるが、東日本でも前年の慶長19年（1614）には徳川家康の命により小田原城外郭の大破却が実施されている。これらの江戸時代初期の城郭破却は幕府が諸大名の軍事力を抑制する目的で行われたものである。玉繩城内の各地点で検出された地業行為は江戸時代の初

期に、大城郭であった当城の要塞としての機能を失わせるために実施されたものと思われる。地業が玉繩城の全域を対象にしたものか、或いはこれまでの調査で検出されている外郭部・外周部のみに対して行われたものか、今後の調査例の増加を俟って検討したい。

#### 註

- (1) 駿河守護今川氏に仕えていた北条早雲は興国寺城主となったのち、延徳3年（1491）伊豆瑞越公方の内紛に際し、足利政知の子茶々丸を殺し、芦山城に移り伊豆を制した。明応4年（1495）大森藤頼の小田原城を奪い、さらに永正9年（1512）三浦義同が居していた岡崎城（伊勢原市・平塚市）、住吉城（逗子市）を陥し、同13年（1516）新井城（三浦市）を攻め、三浦氏を滅ぼした。これにより、北条早雲は相模を平定し、北条氏の関東進出の足がかりを築いた。小田原に本拠を置いた北条氏は初代早雲の後、氏綱、氏康、氏政、氏直と5代続き、その間に関東南半を制したが、天正18年（1590）滅亡した。
- (2) 当時、近隣に大庭城（藤沢市）という使用に堪えうる大規模な城郭があったにも拘わらず、新たに当地に築城したのは、三浦氏を抑止する目的が第一に考慮されたためと判断される（『藤沢市史』第4巻中世編890ページ、伊礼正雄氏寄稿文）。
- (3) 北条氏の支城としては、芦山城・下田城・山中城（伊豆）、足柄城・川村城・津久井城・三崎城（相模）、小机城・江戸城・滝山城・八王子城・河越城・岩付城・鉢形城・忍城（武藏）、松井田城（上野）などがある。以上の一的な支城に対して、さらに支城（枝城・砦）が存在する。
- (4) 北条氏時は早雲の三男で、小田原城主氏綱の弟。氏時は駿河の葛山城主も務めた。天文11年（1542）に死亡（杉山博「玉繩城とその城主」『藤沢市史』第4巻中世編）。氏時開基の寺としては円光寺、二伝寺がある。

綱成は遠江土方城主福島正成の子だが、後に氏綱の庇護を受け、女婿となって北条姓を名乗った。玉繩北条氏のはじまりである。綱成は天文6・7年（1537・8）から同15年（1546）頃まで武藏河越城の城代であったが、天文15～18年（1546～49）頃玉繩城主になっている（佐藤博信「玉繩北条氏とその文書」『相州玉繩城主玉繩北条氏文書考』1973年）。綱成は『間八州古戦録』などでは、武将としての評れが高い。綱成開基の寺には大長寺と龍宝寺がある。天正15年（1587）没した。

氏繁は綱成の子。綱成の出家後、家督を継承した。綱成の出家動機は、元亀2年（1571）10月の小田原城主氏康の死であるとされる（『藤沢市史』及び佐藤氏前掲論文）。氏繁も綱成と同様に武勇の聞え高く、関東各地で活躍した。天正6年（1578）城主であった下総飯沼城で没したという。

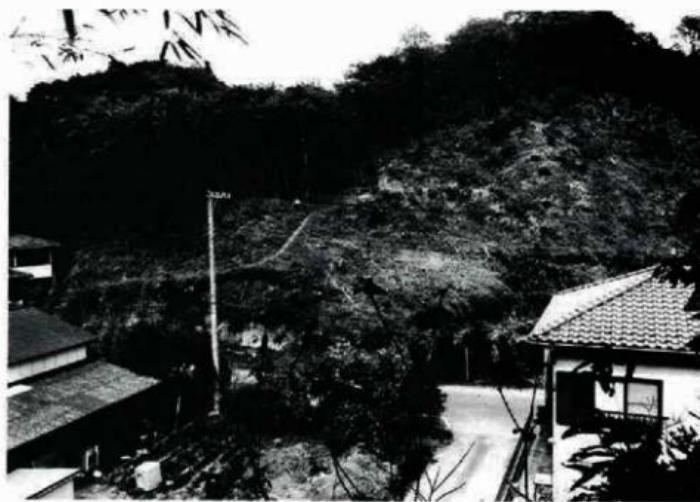
氏勝は氏繁とともに氏繁の子である。従来玉繩北条氏は綱成一氏繁一氏勝と城主が相続されていると考えられていたが、氏舜の発給文書などから、天正5年（1577）から同8年（1580）にかけて、城主であったとされる（佐藤博信「玉繩城主北条氏舜考」「日本歴史」313号及び佐藤氏前掲論文）。

氏勝は玉繩城の最後の城主である。天正18年（1590）4月の開城後は徳川家康に従い、下総岩富の城主となっている。氏勝の玉繩城主時代の発給文書は少ないが、天正10年（1582）以降のものが見られる。

- (5) 永正13年（1519）、上杉朝興による三浦氏支援に対し、北条早雲は玉繩城の北方に陣を敷いて、これに対抗した。
- 大永6年（1526）、安房の里見義弘の鎌倉乱入に際し、北条氏時は戸部川あたりで防戦した。
- 永禄4年（1561）、上杉謙信が小田原城を攻めた帰途、玉繩城を包囲した。
- 永禄12年（1569）、武田信玄が小田原城に進撃する途中、藤沢を通過する際、玉繩城の支城である大谷氏の砦を陥した。
- (6) 馬渕和雄『相模玉繩城—城廻字打越165地点の発掘調査—』 1986年
- (7) 鎌倉考古学研究所『振り出された鎌倉』『戦国の世』—鎌倉の山城— 1981年
- (8) 馬渕和雄『玉繩城南西外郭部発掘調査概報』『鎌倉考古』4 1980年11月
- (9) 赤星氏の踏査報告によると、この付近は殆ど手を加えた施設はないとしているが、今回の調査地点周辺には城郭施設の一部と見られる遺構が存在している。また赤星氏は、この尾根の先端にある相当な広さの削平面を物見の個所と推測している。
- (10) 赤星氏の踏査報告では、この谷戸の入口に群集している民家は、城下町的に発達した民家の名残と考えられるとしている。
- (11) 阿蘇品保夫氏は中世城郭での切岸について、大友宗麟の感状中の表現から考察し、「斜面と直角に近く切り落として、敵の登攀攻撃を防げる目的のもの」とし、「当時の切岸には、これを保持する石垣などではなく、風雨等による浸食・土砂崩壊などの危険があるうえ、用具と労働力の投下量の限界と相まって、一気に高い切岸を造ることなく、階段状に造成することによって右の問題点を解決したものと考えられる」と説明している（「文献に見られる九州の中世城郭」『日本城郭大系』別巻1 1987年）。
- (12) 前掲書(6)。

#### 参考文献

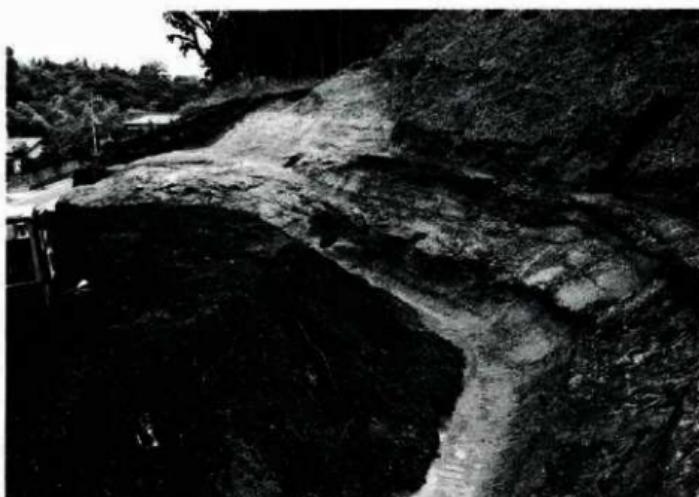
- 赤星直忠「玉繩城跡」『鎌倉市史』考古編 1959年
- 杉山博「後北条氏の藤沢支配」『藤沢市史』第4巻中世編
- 『新編相模国風土記稿』卷104 村里部 鎌倉郡卷36
- 伊礼正雄「後北条氏と城郭—序論の序論—」『年報後北条氏研究』創刊号 1971年
- 『日本城郭大系』6 神奈川県 1980年



▲1 調査地点遠景（調査前）



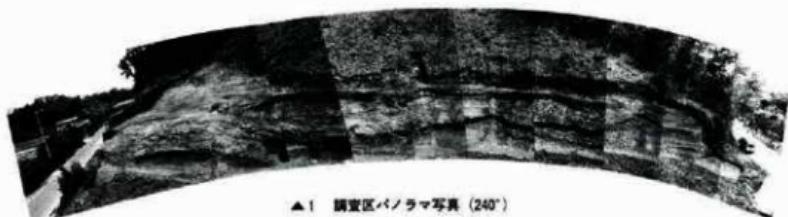
▲2 同上（調査後）



▲1 調査区全景（南から）



▲2 同上（北から）



▲ 1 調査区パノラマ写真 (240°)



▲ 2 調査区北壁土層断面



▲ 3 調査区北側部分



図1 切岸状遺構北側部分



図2 同上、南側部分（東から）



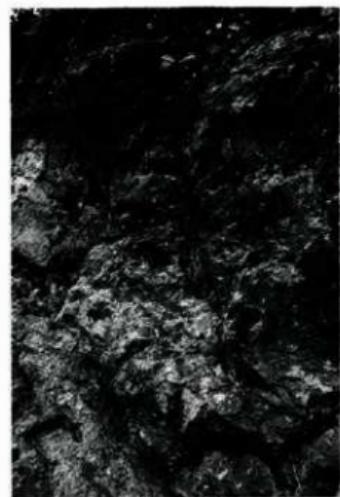
図3 同上、南側部分（西から）



◀ 1 通路状造構 1

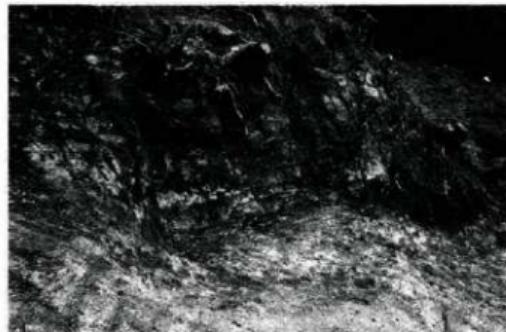


2 通路状造構 2 (西側) ▶

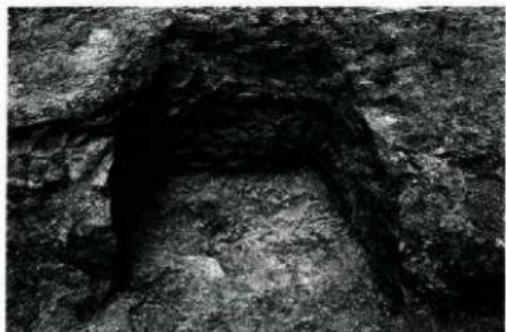


◀ 3 階段取り付け造構 1





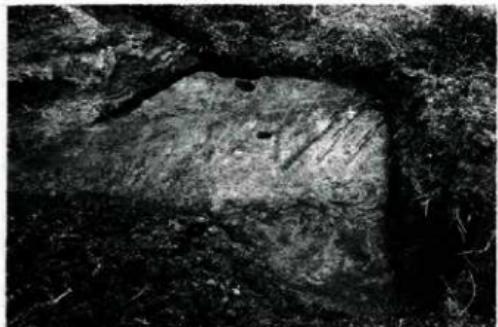
◀ 1 やぐら状造構



◀ 2 土壌 1



◀ 3 土壌 2



◀1 第1トレンチ

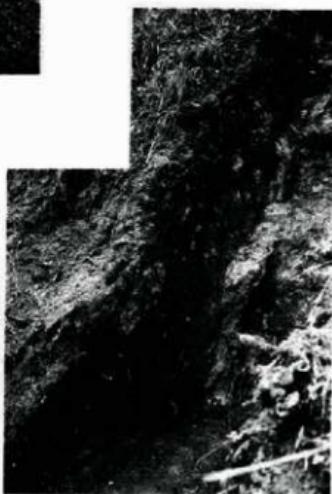


◀2 第2トレンチ



▼3 第3トレンチ

►4 同左 土壌





染付



瓦



石臼



錢貨

## 5. 長谷小路周辺遺跡

長谷一丁目284番1地点

## 例　　言

1. 本報は鎌食市長谷一丁目284番1・284番15における、小林哲雄の店舗併用住宅建設工事に伴う発掘調査報告である。

2. 本報の執筆・編集は玉林美男が行った。図版作成は玉林美男・新国哲也・及川加代子が行った。

3. 本報で使用した写真は、遺構は玉林美男が、遺物は木村美代治が撮影した。

### 4. 調査体制

担当者　　玉林美男（鎌倉市教育委員会 文化財保護課主事）

調査員　　田代郁夫・菊川英政

調査補助員　新国哲也・及川加代子・田中哲也

5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 発掘調査および資料整理に際しては、以下の諸氏・諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

貴達人・大三輪龍彦・河野真知郎・斎木秀雄・手塚直樹・原廣志・木村美代治・小林哲雄・鎌倉考古学研究所・（社）シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団・（株）紅梅組

## 第一章 調査地点と歴史的環境

長谷小路周辺遺跡は、長谷寺前から六地蔵までの道（長谷小路）の南北両側に存在する遺跡である。長谷小路は鎌倉の主要幹線道路の一つである大町大路の西側の一部である。大町大路は六地蔵から下の下馬橋で若宮大路と交差し、名越から忍子方面にぬけている。この大町大路の道沿いには町屋が多く、鎌倉～室町時代における鎌倉の繁華街の一つであった。建長三年（1251）・文永二年（1265）に定められた鎌倉中で商売を行って良い区域の中に大町が入っており、大町・小町に称せられるごとく、鎌倉で最も繁栄した地域であったようである。

長谷寺前は大町大路の西端に位置するが、この地は大仏坂を下った道（以下「大仏坂道」と呼称する）と極楽寺坂を下った道が合流して大町大路となる地点であり、長谷寺はそうした道の交叉点（境）に建立された寺院である。調査地はこの長谷寺前の交叉点から大仏前を通り、大仏トンネルに至る県道鎌倉・藤沢線の大仏と長谷寺前の間に位置している。この道は明治13年（1880）に大仏トンネルが開削されるのに伴って造られたものである。それ以前のものと考えられる道は、当遺跡の東側25mに南北に走る道があるが、これも中世からの道ではなさそうである。一方、極楽寺坂を下った道は御靈神社前を通り長谷寺南側に至り、現在寺前の駐車場に接して東へ折れているが、本来はそのまま北進して長谷寺山門で大仏坂道と合流していたものであろう。

大仏坂がいつからあったかわからない。大仏の地が深沢里といわれ、現在の深沢が大仏坂を越した西側であることから、また鎌倉権五郎景正を祠る御靈神社が坂ノ下にあり、その所領が大庭御厨であり、一族に深沢の梶原を名とする一族が居ること等から、鎌倉時代以前から道があった事が推測される。また元弘の乱に際し、武藏方面に出兵した幕府軍の内、「梅松論」にある中の道の大村北条貞通の通った「中の道」は大仏坂道であるとする説もある。いずれにしろ記録には明確な形では表れてはこない。

大仏坂道の周辺には、鎌倉側の坂の登り口に鎌倉大仏があり、さらに下った西側谷には極楽寺忍性が廟病患者のためにたてた施療所（桑ガ谷療病所）があったとされている。大仏坂道は極楽寺坂下と共に極楽寺忍性的活動の重要な拠点であったとされている。

鎌倉大仏の近くには北条時房が住し、大仏殿と号した。時房の子朝直は大仏氏を称し、子孫は大仏氏を名のった。大仏氏を名のる人には連署大仏宣時他、元弘の乱に極楽寺坂で戦い戦死した大仏貞直等がいる。大仏氏の館はどこにあったのかわからぬ。時房は佐介氏を称し、その子時盛の子孫は代々佐介氏を称しているから、佐介の地以外に館を求める方が良いと思われる。北条氏は一門を鎌倉の出入口の要地に配しているので、大仏氏の館はやはり大仏坂に近い土地が良いと思われる。

調査地の現在の地名は長谷である。長谷が地名として使われるのは長谷寺建立（文永元年 1264頃）以降であるが、前述したとおり時房が大仏殿と称され、大仏氏を名のる人々がいる事から、調

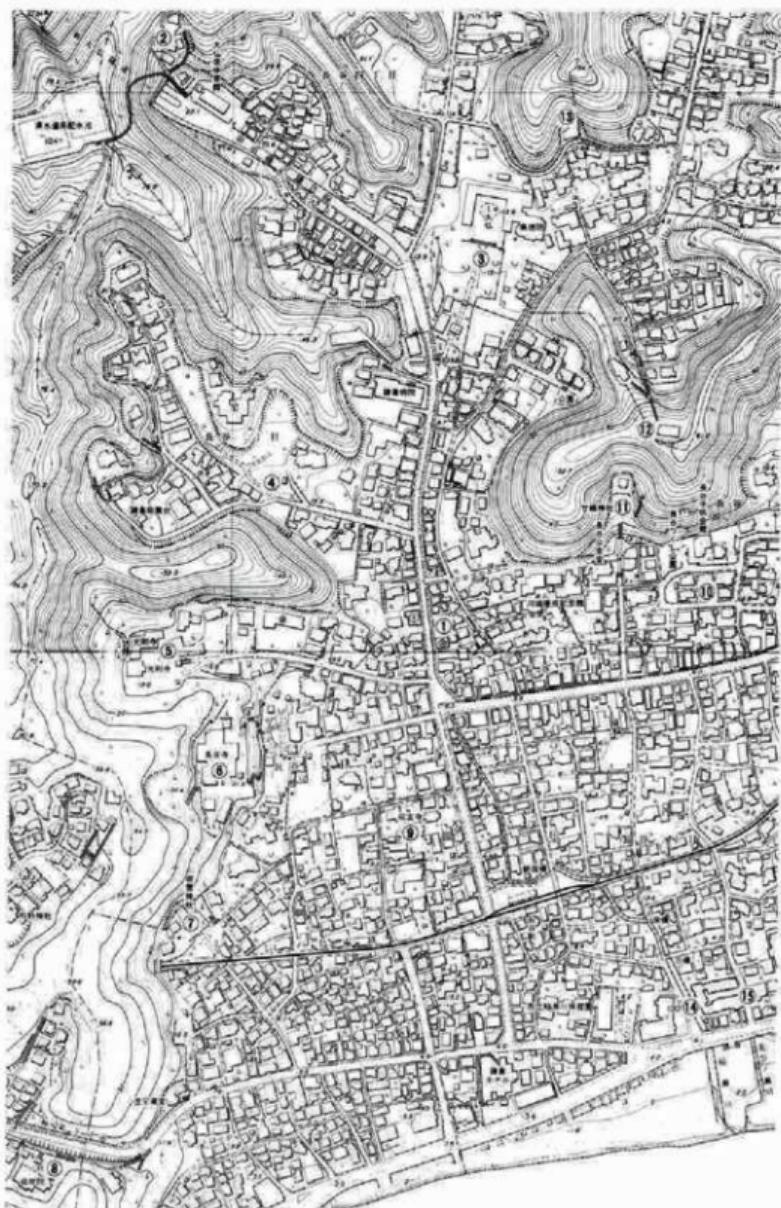


図1 調査地点位置図

査地周辺の土地は大仏と称されていたと考えられる。吾妻鏡には長谷の地名はない。江戸時代になってから甘繩と深沢の一部を合せて長谷村にしたという伝えがある。これららの地名それぞれの範囲がどの程度であったかは解らない。なお、調査地東側に近接して甘繩神社があるため、鎌倉市史編説編をはじめ、神社周辺の地が中世の甘繩であるとする説があるが、齊木明美氏が指摘するように甘繩の中心はずっと東側であると考えられる。その西辺に佐々目が含まれるが、現在の甘繩神社の他が含まれている資料はない。現在の甘繩神社の地は含まれないと考えた方が良い。筆者は以下に述べる理由から調査地から現在の甘繩神社にかけての地は、吾妻鏡の大仏関係記録（暦仁元年三月二十三日條、同五月十八日條、仁治二年三月二十七日條）にある「深沢の里」の一部と考えている。

調査地は権瀬川が大仏の谷を出た右岸にある。権瀬川は大仏の東側の谷（大谷戸）、西側の谷（小谷戸）の支流が大仏山門前で合流して本流となる。さらに南下して遺跡の西側を流れ、長谷寺前の交叉点でやや東にまがり、南下して江ノ電長谷駅北側で東に折れ、さらに南にまがって由比ガ浜にそいでいる。河口の東30mには美奈ノ瀬川の河口がある。二つの川は河口付近が埋められたために分離されているが、本来は一つの川であった。古名は水無瀬川である。美奈ノ瀬川は長楽寺谷から発すると考えられ、佐々目谷の水系とは異なる。調査地周辺の旧地形を略述すると、調査地は権瀬川東岸に形成された自然堤防上にある。この40m程北では現地表から1.5mの深さまで近代の埋土があり、これは旧河川を埋めたものである。また西側30m程の所に現在の河道がある。しかし長谷交叉点以南の河道西岸は砂丘であり、その上に遺跡が形成されている。調査地は権瀬川東岸にわずかに形成された自然堤防上にあることがわかる。美奈ノ瀬川南・東岸は海岸砂丘である。長谷小路はこの砂丘上を東西につらぬいている。旧長谷諸戸邸内遺跡では、山下の平場の下に東西に走る木組の大溝があり、その南側には中世遺跡の下から弥生時代の住居址が発見されている。この住居址は砂層を掘って造られており、砂丘の北辺であると考えられる。こうした地形を考えると、大仏がつくられた深沢の里は水無瀬川流域を再開発したものと考えるのが妥当であろう。長谷小路以南は砂丘であるから、それ以北の水無瀬川流域が開発対象とされよう。

こうして開発された地域に鎌倉大仏が造営されたため、この地の別称として大仏が使われた可能性があるのでないだろうか。

#### 参考文献

1. 高柳光寿編「鎌倉市 誌説編」吉川弘文館 昭和34年10月
2. 白井水二編「鎌倉事典」東京堂出版 昭和61年5月
3. 齊木明美「第一章 遺跡の位置と歴史的環境」「千葉地遺跡」所収 千葉地遺跡発掘調査团 昭和57年3月

① 調査地点 ④ 桑ガ谷摩病院跡 ⑦ 海雲神社 ⑩ 旧諸戸邸内遺跡 ⑫ 高徳院裏やぐら群  
② 大仏坂 ⑤ 光則寺（伝前庭光則院） ⑧ 極楽寺坂 ⑪ 甘繩神明社 ⑬ 権瀬川  
③ 鎌倉大仏（高徳院） ⑥ 長谷寺 ⑨ 改宗寺（伝四条金吾邸跡） ⑫ 貝越以 ⑭ 美奈ノ瀬川

## 第二章 調査の経過

昭和62年5月18日～19日にかけて予定地について1箇所の坪掘りを行い、土層の堆積状況、造構の様相の把握を行った。この結果、造構面が非常に浅く工事により埋蔵文化財が消滅することが判明したため、掘削範囲全面について発掘調査を実施することになった。調査に先立ち、表土を重機で除去し、昭和62年8月10日から発掘調査を開始した。調査は出土搬出のため調査区北西部分を残し、東側から調査を開始した。東部分は8月30日に調査を終了したため、8月31日～9月1日にかけて事業者の協力を得て北西部分の表土除去、測量基準線の設定を行った。9月2日から造構の確認を行い、9月9日に現地調査を終了した。この間、大型の井戸1基をはじめ、溝、土壙等を確認した。

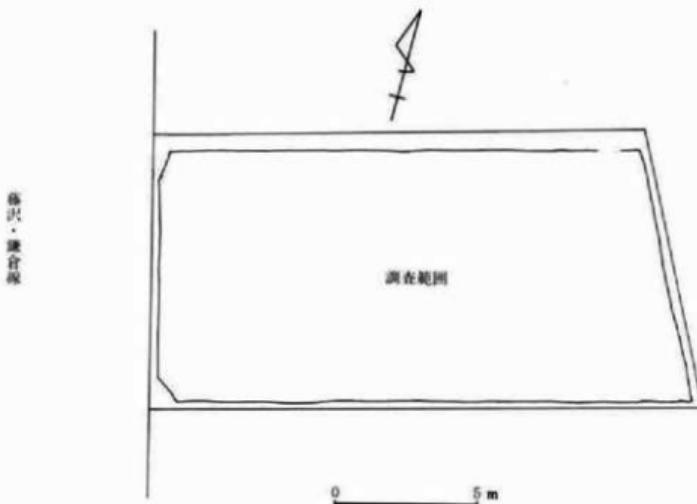


図2 調査区位置図

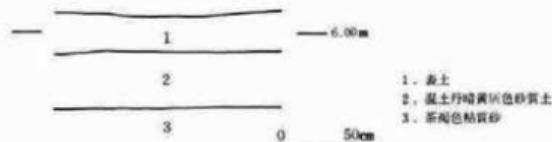


図3 標準土層断面図

## 第三章 発見された遺構と遺物

### 第1節 発見された遺構

#### 1. 井戸

##### (1) 1号井戸(図5・6)

調査区中央南側で発見された方形の木組井戸で、主軸はN-31°20'-Wである。掘り方は南北410cm、東西380cmで、確認面からの深さは211cmである。井戸枠は、井戸が廃棄される際にぬき取られている。このため横箋、支柱等は存在しないので、井戸の形式・規模は明かではない。現状から確認できる大きさは長辺205cm、短辺180cmで、東西方向が長い。報板の長さは230cm程である。廃棄に際しては井戸内側の支柱等をぬき取った後、西・北側の報板をぬき取り、その後東側の報板を井戸内側に引き倒し、さらに南側報板を内側に引き倒している。遺物は確認面から60cm程下から集中して出土しているが、それ以下は皆無である。

井戸枠はやや南に偏して存在する。井戸枠南辺には、井戸底から約1mの所に南に接する2号井戸から続く木橋が接続している。これは上辺12.5cm、高さ13.5cmの方形の角材で作られている。長さは不明である。木橋は角材の上部から厚さ3.5cm程の板を剥ぎ取り、残った角材の中央部に1辺7cm程の溝を彫った後、剥ぎ取った板を釘でとめて皆としたものである。1号井戸に指し込まれた部分は17cmで、その部分のみ1cm程薄く作られている。

##### (2) 2号井戸(図5)

1号井戸の南側50cmの所に1号井戸に接して存在する。その西辺は1号井戸と接続する木橋の掘り方により掘り上げられているが、1号井戸掘り方南辺のはば中央に位置する。こうした位置関係から1号井戸より古いと考えられる。掘り方の規模は木橋の掘り方も含めると北辺で270cm程であり、1号井戸より一回り小さい。確認面から90cm程掘り下げたが、井戸わくは確認できなかった。遺物はほとんど出土しなかった。

#### 2 溝

##### (1) 1号溝

調査区西侧で発見された。主軸はN-31°20'-Wで1号井戸と等しい。調査区を南北に貫いており、新旧二本が重っている。古い溝は上端幅45cm、下端幅30cmで、深さは35cm程である。新しい溝

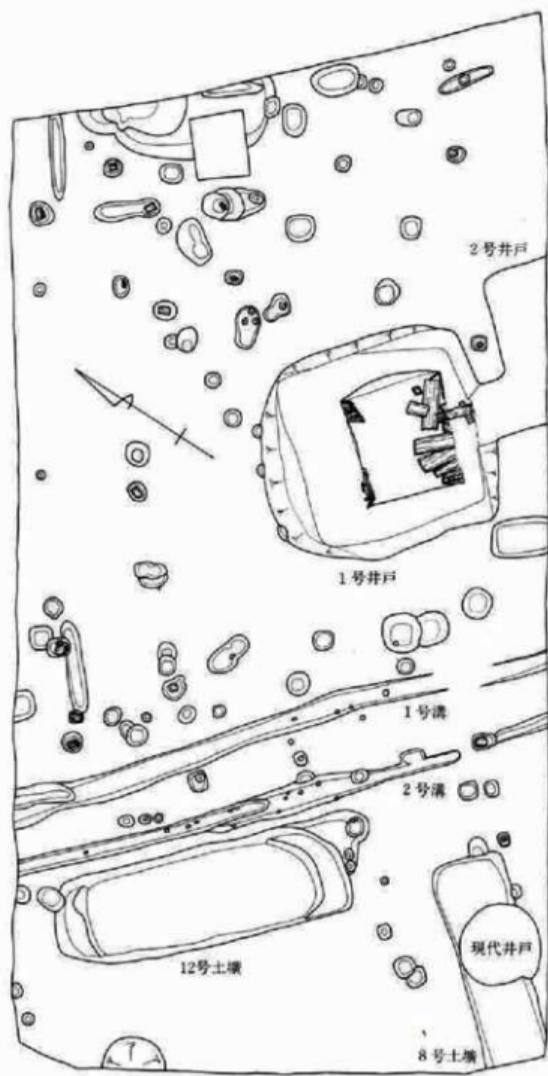


図4 透構全測図

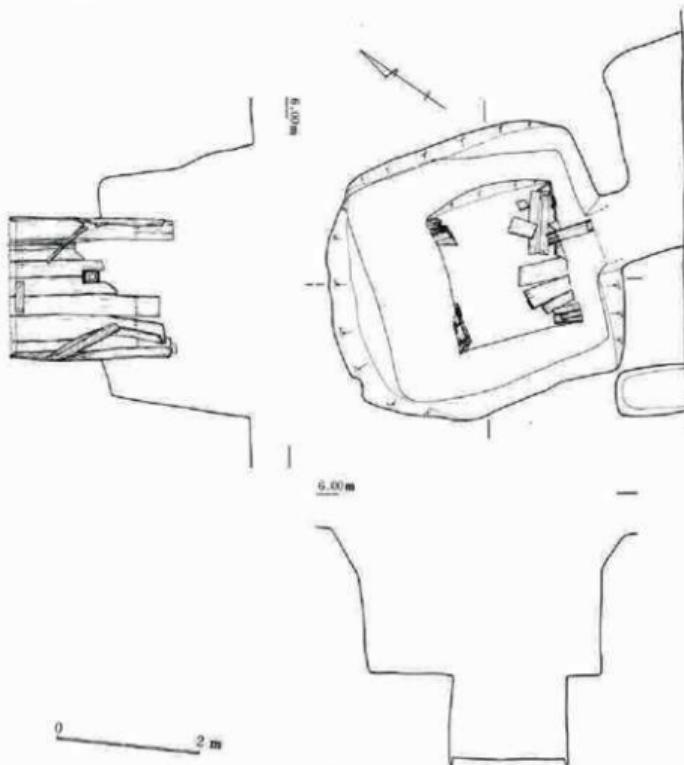


図5 1号井戸

はそのほぼ直上に位置するが、上端幅が60cmと広く、下端幅は不明であるが、深さは10cm程で、断面形は浅いU字形をなしている。この溝からかわらけ等がまとまって出土した。

#### (2) 2号溝

1号溝の西側80cm～90cmのところに1号溝と並行して存在する。上端幅25cm～50cm、下端幅15cm～25cmで、深さは10cm程である。1・2号溝共、同一軸線上に形成された小溝の集合体と考えられる。

### 3. 土壌

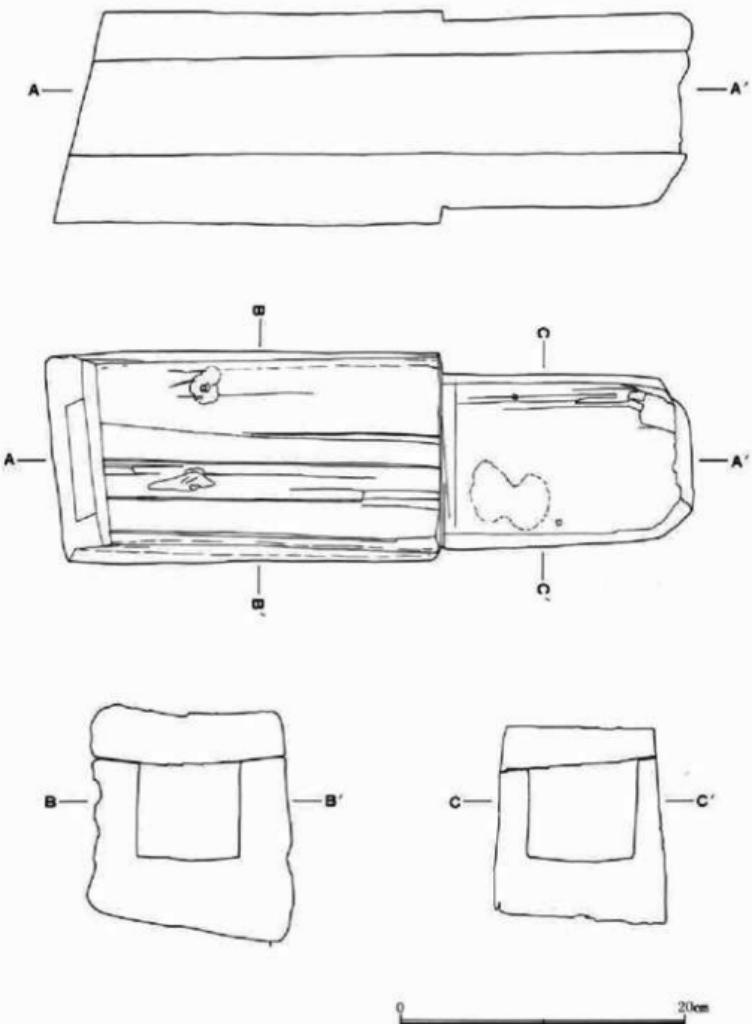
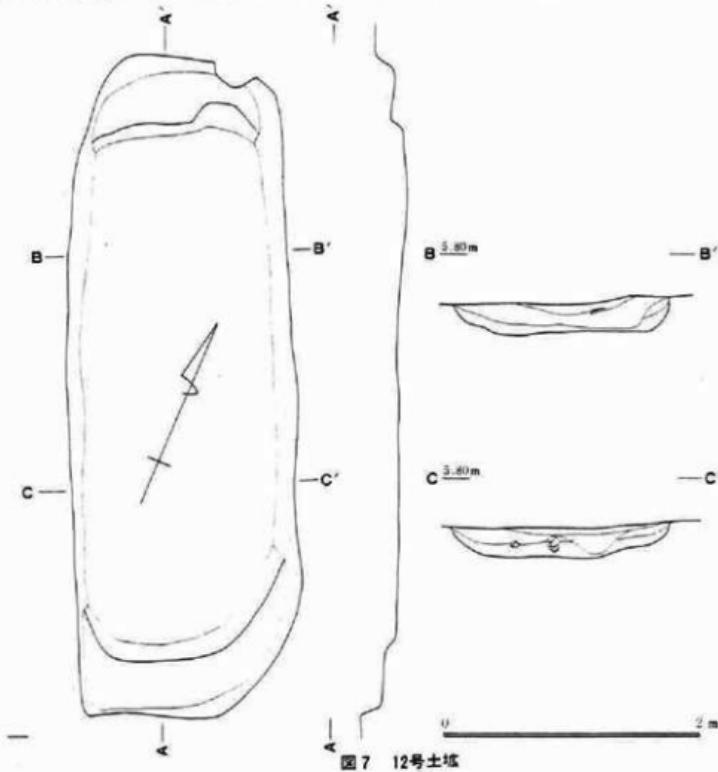


図6 1号井戸出土木桶

### (1) 12号土壙 (図7)

2号溝の西側に接して存在する長い小判形の土壙である。2号溝との間隔は20cm~25cmである。掘り直しが行われたらしく南北端に高さ10cm、長さ50cm程の段がある。長辺は520cm、内側で420cm、短辺175cmで、中央部の深さ約20cmであり、底は平坦である。当土壙の南西側にはこれと直交する位置にはほぼ同規模の8号土壙が存在する、12号土壙からはまとまって遺物が出土した。



## 第2節 出土した遺物

### 1. 1号井戸出土品 (図8~11、図版9~10上段)

1~78はかわらけである。口経12cm~13cm程の中形のものと、7.5cm~8cm程の小形のものとがある。中形のものは底面から内湾気味に大きく開く、浅い杯形のものである。口唇部は厚さがほとんど変化しないもの、うすくなるもの、やや肥厚するもの等があるが、全体に外壁に稜がなく、丸味があ

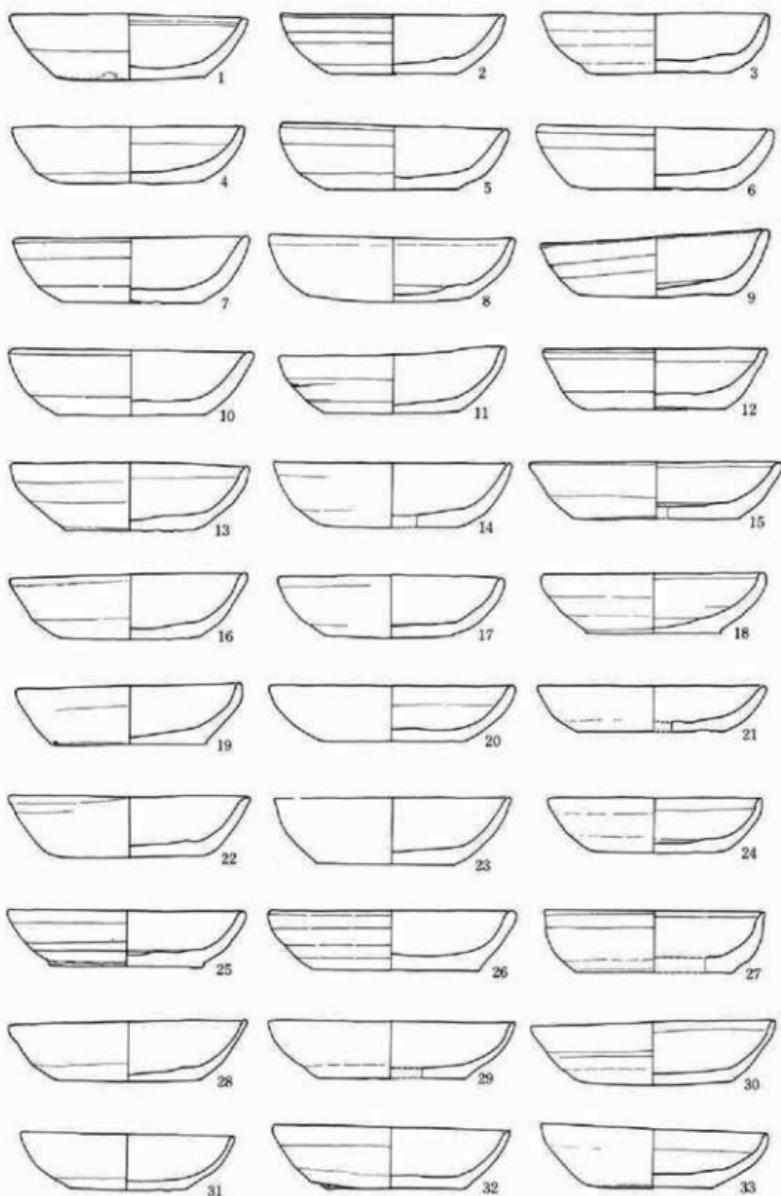


図8 1号井戸出土かわらけ

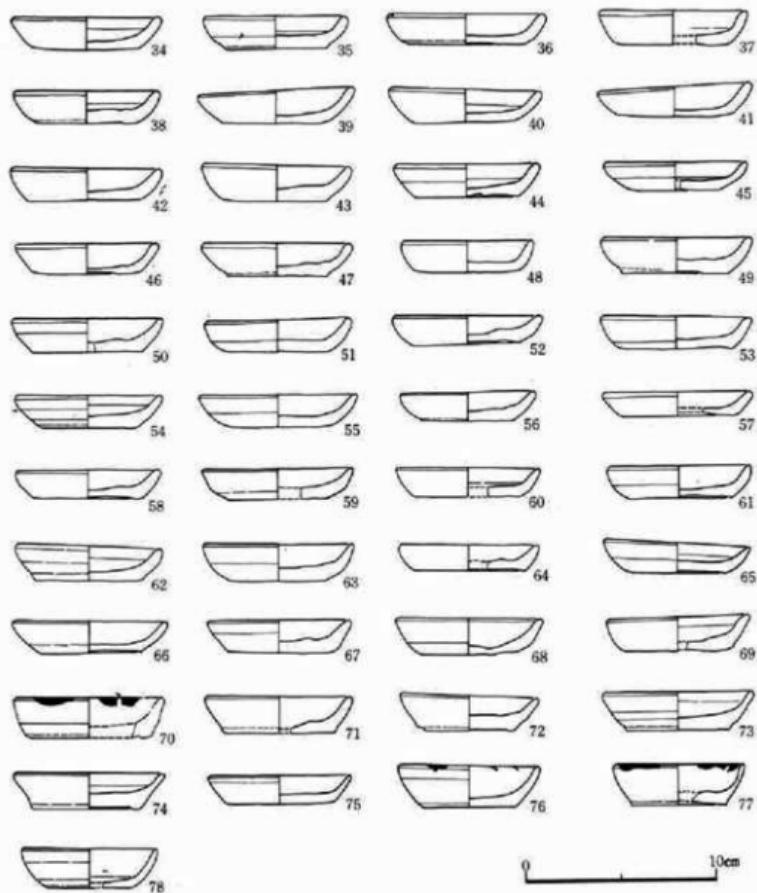


図9 1号井戸出土かわらけ

り、口径と底径の差が明らかである。しかし胎部外側面に稜を残し口唇が外反するもの（27）も混入している。また素地は粉性で雲母・赤色粒子・泥岩粉子を含むものが主である（1～27）が、砂質で雲母・赤色粒子を含むが非常に薄手で灰白色に仕上がっている一群（28～31）と、粉性で混和物をほとんど含まず、橙赤色で非常に堅緻に仕上がっている一群（32～33）がある。

小形のものは浅い皿形のものが主であるが、やや深いものもある。内湾気味に開くもの（34～58）が主であるが、胴部に稜を残すもの（59～66）もある。また外反気味に開くものでは、中形に含めた方が良いかもと思われるものもある。やや外反気味のもの（67～69）もあるが、胴中央外側面に

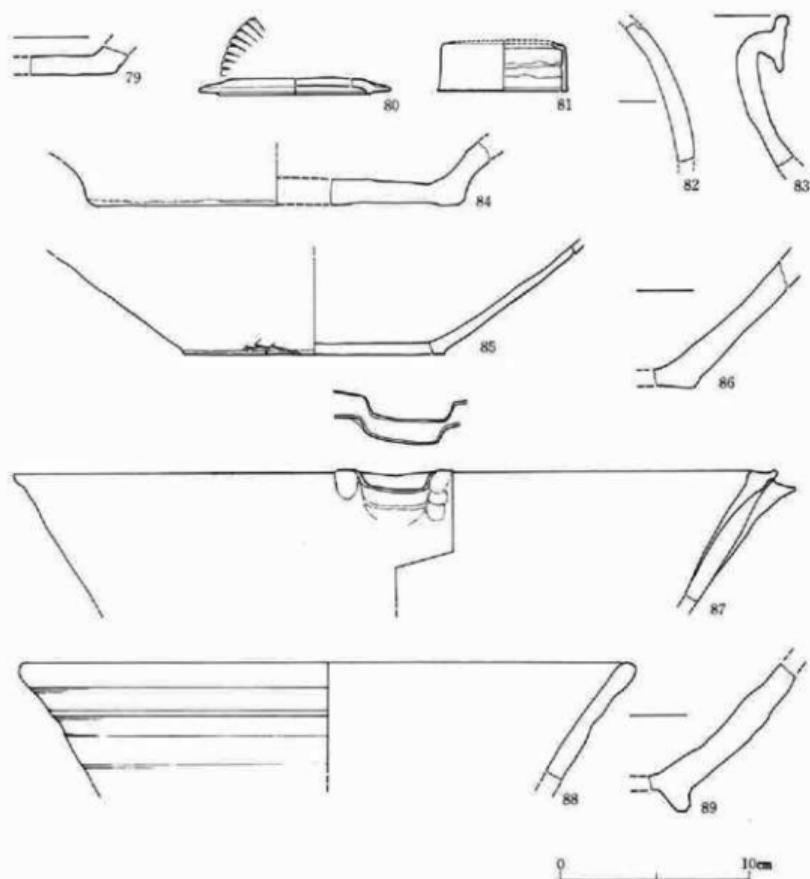


図10 1号井戸出土中国陶磁・国産陶磁

明瞭な棱を有し、大きく開くもの（71～74）ものがある。また非常に薄いつくりのもの（75）もある。やや深いものでは直線的に開くもの（70）と内済氣味に開くものとがある（78）。

79は火舍の底部である。

80～82は中国陶磁である。80は青白磁小壺の蓋、81は青白磁梅瓶の蓋、82は褐釉大壺の肩部である。この他青磁蓮弁文碗小片等が出土している。

83～89は国産陶磁である。83～86は常滑の壺・壺である。83はN字状の口縁である。85は大壺の

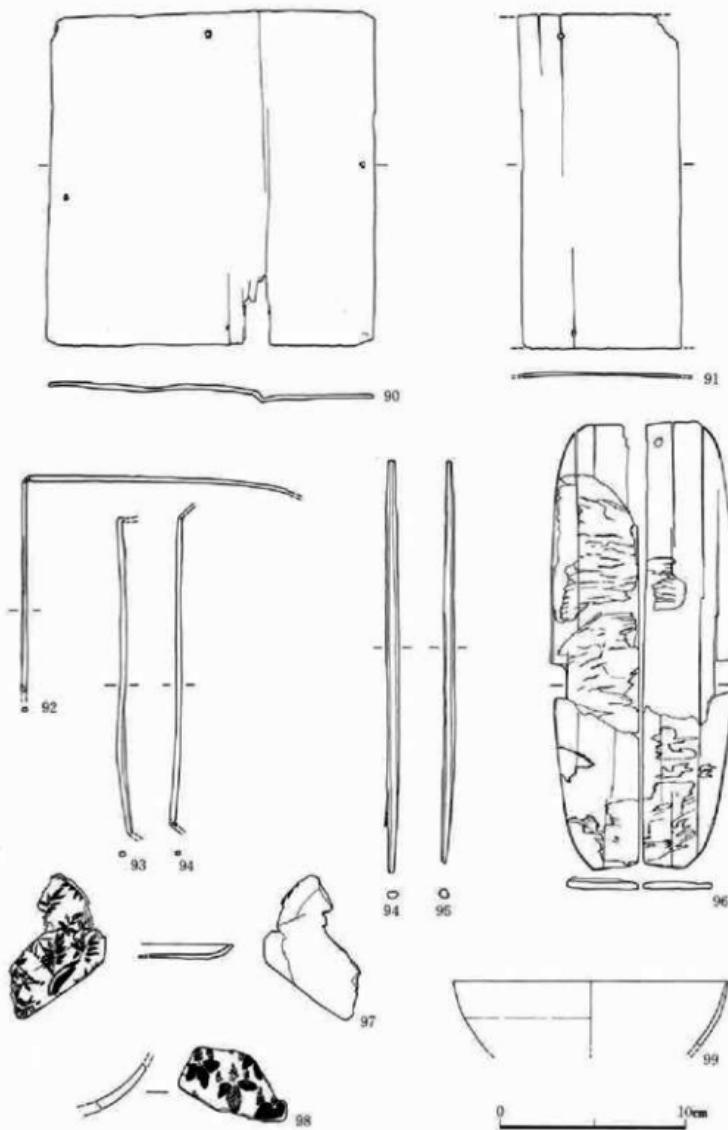


図11 1号井戸出土木製品・漆器

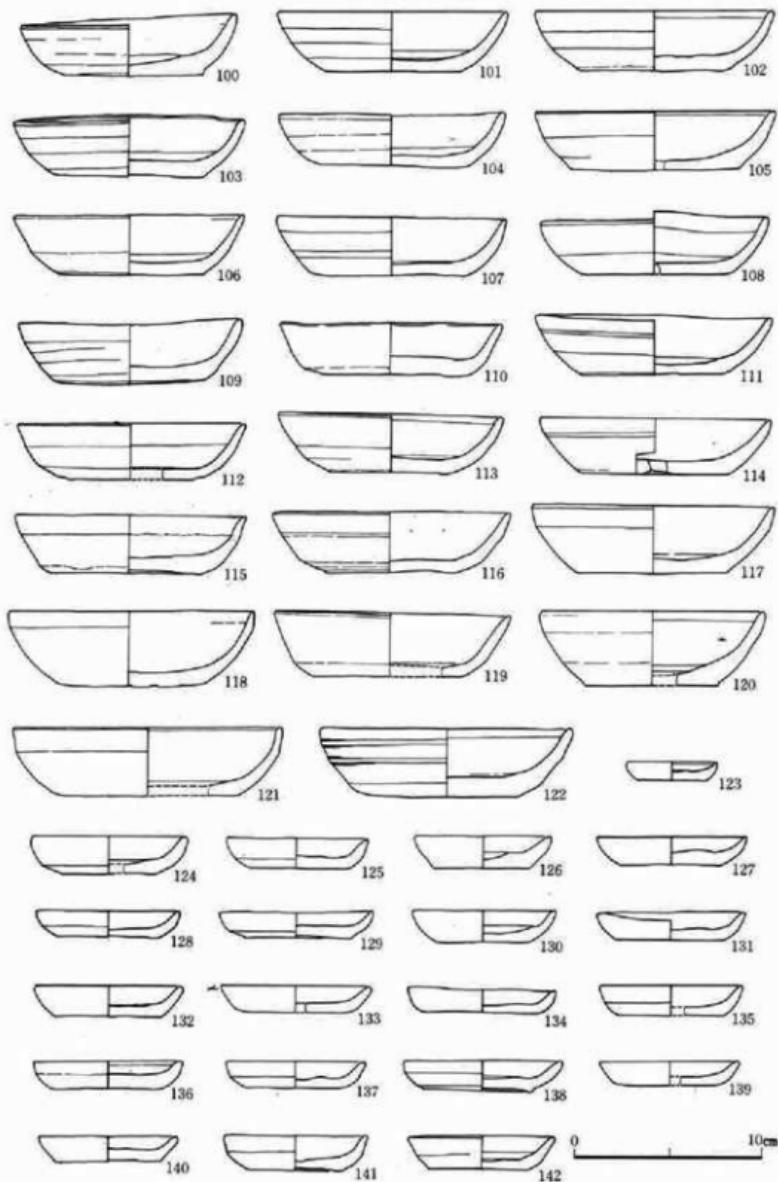


図12 12号土塙出土かわらけ

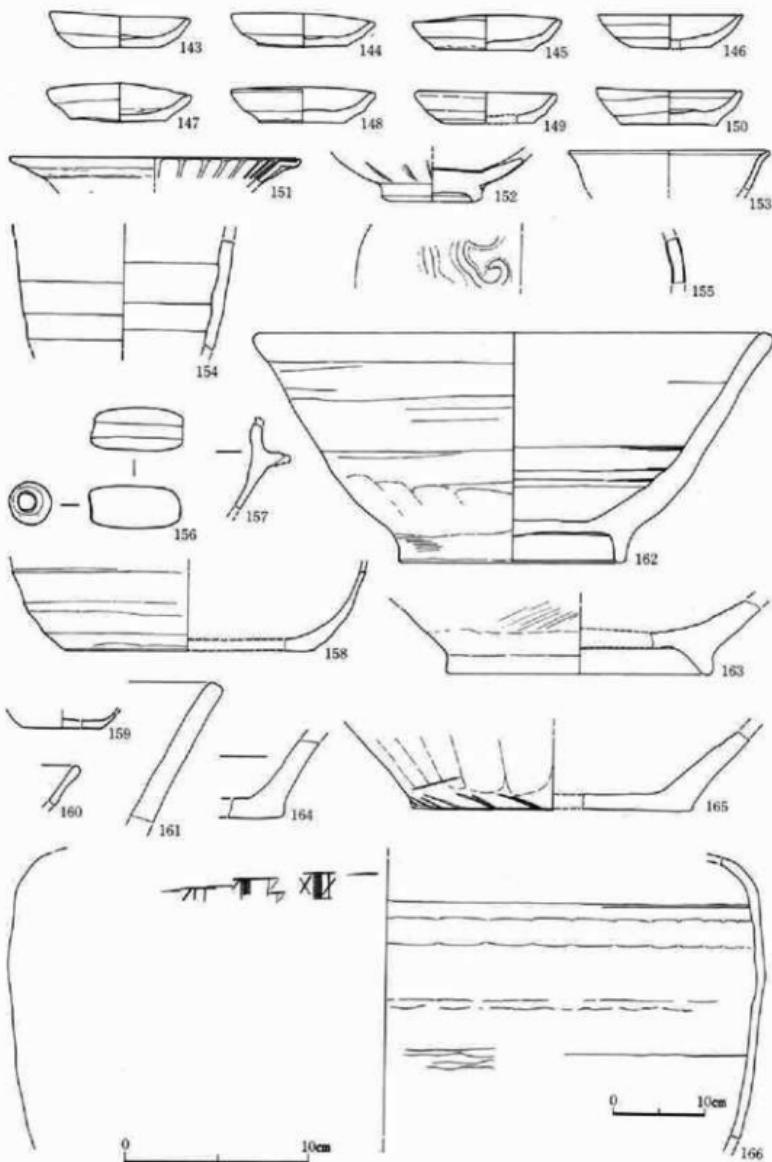


図13 12号土塙出土かわらけ・中国陶磁・國産陶磁・土製品

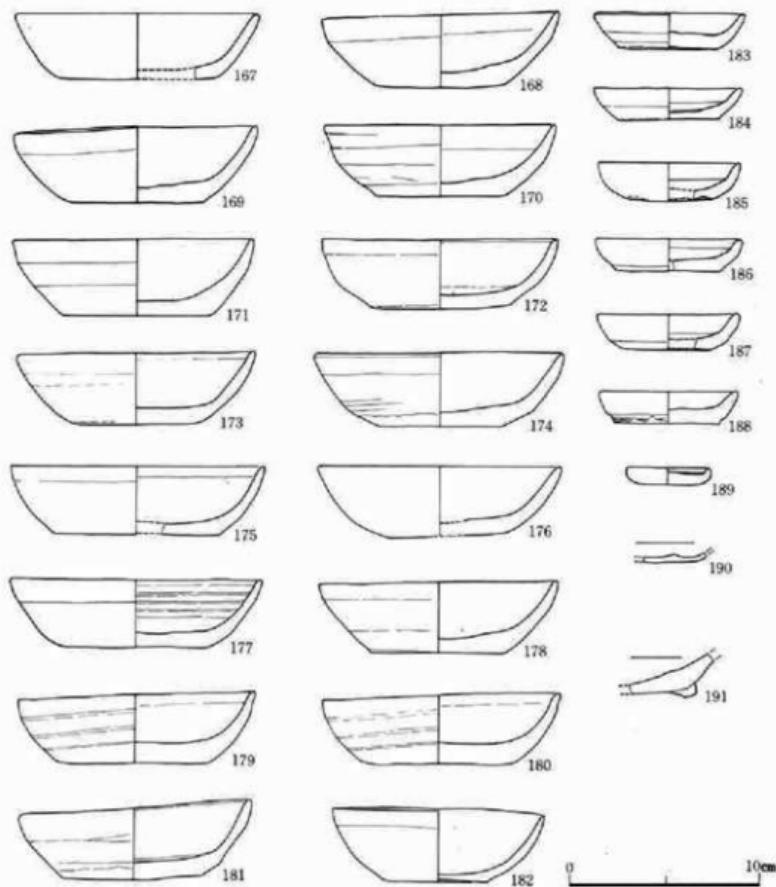


図14 1号溝出土かわらけ・白かわらけ・山茶碗

底部である ( $S = \frac{1}{6}$ )。87は常滑のこね鉢である。88・89は山茶碗窯系のこね鉢である。

90~94は折敷である。90・91は身である。90は一辺17.6cmあり、辺の中央に一孔が穿たれている。相対する孔の距離は15.8cmである。91は一辺18cmであり、辺中央の相対する孔の距離は16cmである。92~94はその縁である。93は一辺17cm、94cmは16cmである。

94・95は著である。長さは94が22.1cm、95が21.5cmである。

96は板草履の芯である。表面に植物質の付着がある。長さは23.8cmである。

97は漆絵小皿である。土圧により変形しており、径・高さ共知り難い。無高台である。内面全面に筆が朱色で描かれている。外側面口唇部にも一部筆葉状の線が描かれている。98は内面は朱塗りで外面は黒地に朱色で桐文が描かれている。漆絵の製品は二点共文様の空間配置に余裕がある。99は総黒漆塗りの椀である、胴上部に稜があり、くの字形に内側に折れている。塗りは非常に良好である。

これらの遺物は井戸確認面から60cm程下の井戸の埋土からほぼ面的に出土したものであり、一時期の廃棄と考えられる。また井戸を埋める際の廃棄ではなく、井戸埋没後、底地に廃棄したものと考えられる。

## 2. 12号土壤出土品 (図12・13、図版11~12)

100~150はかわらけである。口径11.5cm~12cm程の中型のものと、7.5cm~8cm程の小形のもの・4.6cmの内折れの小形のもの (123)、14.2cmの大形のもの (121) とがある。

中形のもの (100~117、119、120) は素地、製作上の特徴は1号井戸の大部分の中形土器と同じである。しかし器高は3cm前後が一般的であるのに対し、4cmのものが2点 (118、120) 含まれている。

小形のもの (124~150) は内湾気味に聞くもの (124~140) と胴部に稜を持ち外反するもの (141~150) とがある。

151~155は中国陶磁である。151は折縁の青磁小鉢である。内側面には刻文がある。良品である。152は青磁蓮弁文碗の高台部である。153は口はげの白磁皿又は碗である。154は暗茶褐色の炻器壺である。155は青磁の壺あるいは花瓶であろう。外側面には唐草状の草花文が彫られている。

156~158は土製品である。156は土鍤である。157、158は伊勢系 (?) 土釜又は鍋である。

159~166は国産陶磁である。159は古瀬戸の入子である。160は常滑系の山茶碗である。161は常滑系のこね鉢である。162、163は山茶碗窯系こね鉢である。164~166は常滑である。壺か壺か不明である。166は復元最大径84.4cmであり、肩部に印きの文様がある。これのみ裏面の縮尺は1/6である。このほか黒地に朱色で藤の葉を描いた漆器小皿が出土したが、箔のみであり取り上げられなかった。

## 3. 1号溝出土品 (図14、図版10下段)

167~189はかわらけである。口径12cm~13cm・高さ3.6cm~4cmの比較的高さのある中形のものと、口径7cm~7.7cmの小形のもの、内折れのものとがある。

中形のもの (167~182) は内湾気味に聞く形で、素地、製作上の特徴は1号井戸の大部分の中形土器と同じであるが、高さがある。また182は砂質の素地を用いた丸味の強い土器である。

小形のもの (183~188) はいづれも外側面に稜を持ち内湾気味に聞く器形であるが、188のみ直線的に聞いている。189は内折れのもので、口径4.2cmである。

190は白かわらけの底部である。

191は常滑系山茶碗の底部である。

## 第四章 まとめ

当調査では井戸・溝・土壤・ピットが検出されたが、遺構相互の関係は不明である。ピットの並び、組み合せが明確でないため、建築物の想定ができないが、井戸・溝・土壤の方向は一致している。また井戸の木組みは1辺180cm程と非常に規模が大きく、これに匹敵する規模の木組み井戸は、若宮大路周辺遺跡群の内「小町1丁目75番地1号地点」<sup>註1</sup>発見の長辺2.4m、短辺1.55mの長方形の井枡を持つものがある程度である。市内発見の井枡は1辺90cm~120cmのものが主であり、当遺跡発見の井戸は市内最大級のものの一つである。前記の井戸から三鱗文のある木製円盤（堀の蓋と推定されている）が出土したとされており、三鱗文が北条氏の紋であり、若宮大路に面した地点であるところから北条氏との関係も想定される。兎も角、井戸の規模は使用者の力が反映されていると考えられるから、当該遺跡についても大仏氏等想定の居住者を考えるべきであろう。

遺物については遺構出土のもののみ取り上げたが、かわらけを見る限り鎌倉第Ⅳ期のものを主体に明らかに同Ⅴ期に含まれるもの（28~31、76~78、182）がある。全体に丸みがあり薄手化の傾向が強い。一方、共伴遺物をみると、第Ⅳ期に共伴関係にあるものばかりであり、明確に第Ⅴ期に属するものはない。こうしたことから、遺物の年代は第Ⅳ期後半から第Ⅴ期にかかる時期、すなわち14c前半代を考えておきたい。

なお、調査に当たり津波の痕跡を注意して探したが、残念ながら把握できなかった。これは明応4年（1495）、津波が大仏まで達した記録がある（鎌倉大日記）からである。当調査で発見された遺構はそれ以前のものである。

註1 鎌倉考古学研究所「鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集 小町2丁目65番地21号地点・小町1丁目75番地1号地点」昭和57年10月



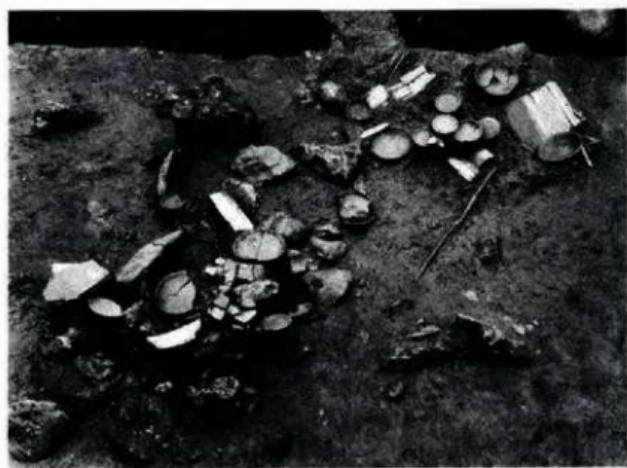
▲ 調査地遠景（南から）



▲ 調査区全景（西から）



▲ 調査区東側



▲ 1号井戸上層遺物出土状況



▲ 1号井戸木わく出土状況



▲ 1号井戸木わく出土状況（上の写真の下層）



▲ 1号井戸木わく金撿状況



▲ 1号井戸木撿出土状況



▲ 12号土质遗物出土状况



▲ 1号沟遗物出土状况



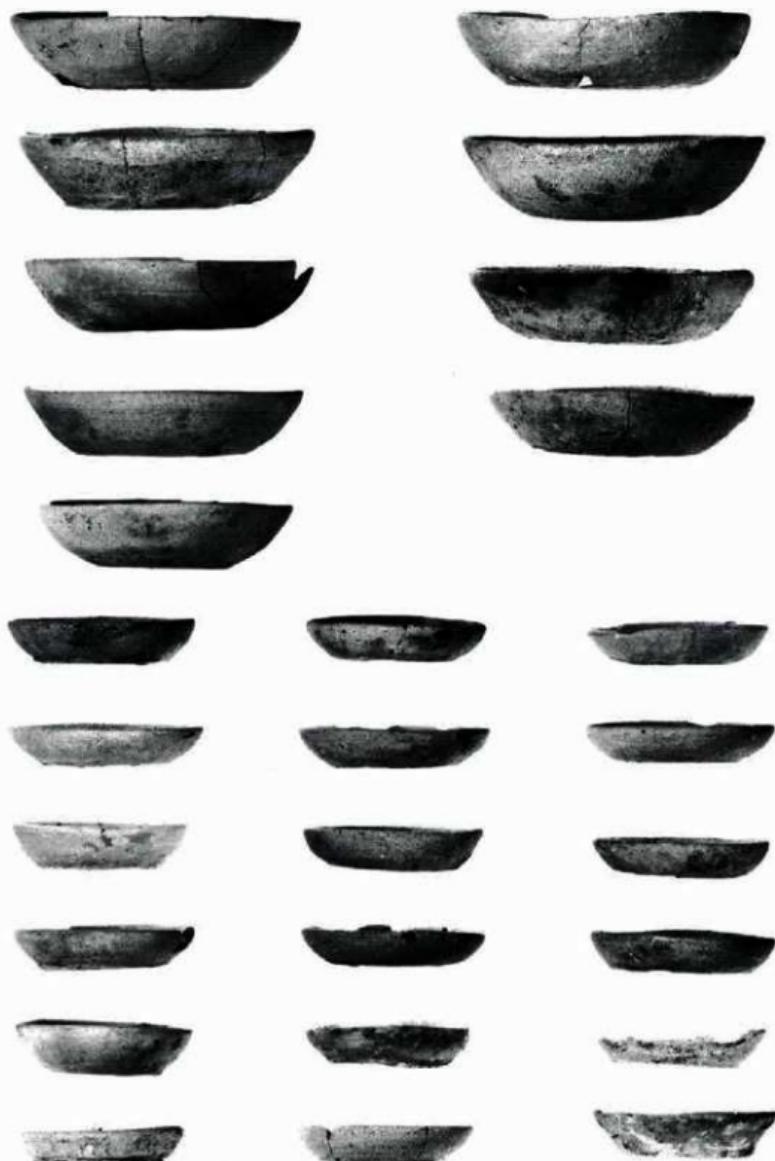
▲ 调查区西侧



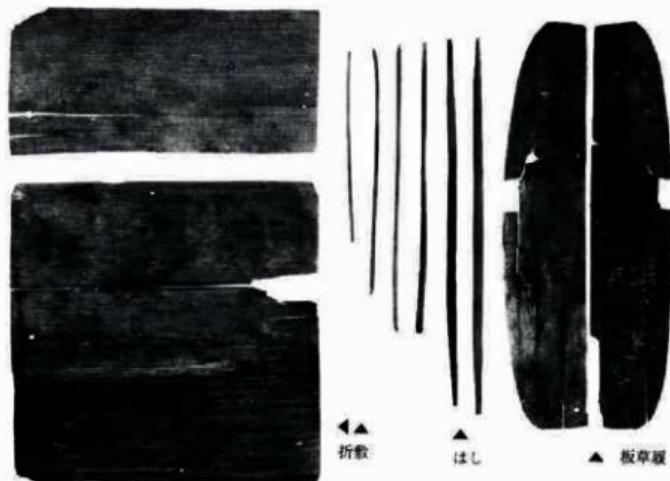
▲ 调查区西侧



1号井戸出土木柵



1号井戸出土かわらけ



1号井戸出土木・漆製品



上段 1号井戸出土品 下段 1号溝出土品



12号土壙出土かわらけ



12号土壤出土品

## 6. 台山遺跡

台字西ノ台1730番1、1732番1地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市台字西ノ台1730番1、1732番1における、栗田口次男の個人専用住宅用宅地造成に関わる発掘調査の記録である。

2. 本報の執筆は第一章・第四章は玉林美男が、第二・三章は新国哲也が行い、玉林美男が補正した。

3. 本報で使用した写真は、遺構は玉林美男、新国哲也が、遺物は木村美代治が撮影した。

### 4. 調査体制

担当者　　玉林美男（鎌倉市教育委員会文化財保護課主事）

調査員　　原廣志

調査補助員　新国哲也・片井裕子・及川加代子

5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 発掘調査および資料整理に際しては、以下の諸氏・諸機関から貴重な御教示と御援助を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同 敬称略）

京本秀雄、手塚直樹、河野真知郎、木村美代治、  
佐藤　泉、鎌倉考古学研究所、栗田口次男、(社)

シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団、  
(株) 美樹建設

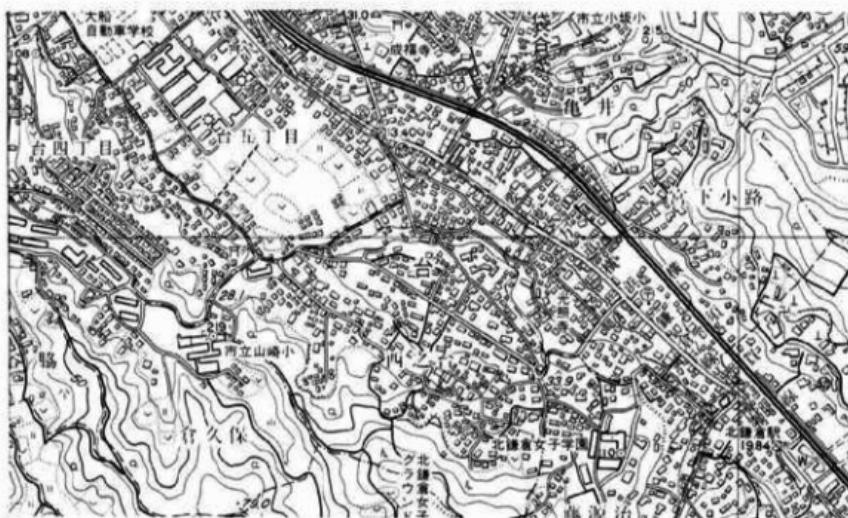


図1 遺跡周辺地図（10000分の1）



図2 台山遺跡地図 (2500分の1)

1. 調查地 2. 白1737番地点  
3. 白874番地点 4. 古山藤原治遺跡

## 第一章 遺跡の位置及び歴史的環境

当遺跡は、台山遺跡と呼称されている。調査地は鎌倉市台字西之台1730番-1他であり、遺跡の中央部、地形的には南西から北東に伸びる丘陵の北東緩斜面に位置する。

周囲は西方を除き、柏尾川の小支流である小袋川によって開析された谷によって囲まれている。

当遺跡の調査は過去3回行われている。1970年、調査地の南約60mに位置する台1737番の地を東京大学教養学部が故三上次男氏を団長として調査を行い（註1）、弥生、古墳時代の住居址及び縄文時代の遺物を検出している。1984年には当調査地の北東約10mの台874番を赤星直忠氏を団長とする調査団が調査を行い（註2）、弥生、古墳時代の住居址及び縄文時代～中世にかけての遺物を発見している。さらに1985年には、手塚直樹氏を団長とする調査団が、当調査地南西約190mの台914番の調査を行い（註3）、弥生時代～平安時代の住居址と縄文時代～中世の造構、遺物を検出している。

これらの調査から、台山遺跡は、本調査地を含めた台地上に広範囲に存在する縄文時代～中世にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代から古墳時代にかけては大集落の存在が予想されている。

註1) 東京大学教養学部 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」 人文科学紀要第59輯  
1974年3月

註2) 台山遺跡発掘調査団 「台山遺跡調査報告」 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書Ⅰ  
1985年3月

註3) 台山藤源治遺跡発掘調査団 「台山藤源治遺跡」 1985年3月

## 第二章 調査の経過

昭和62年9月16日 事業者の協力を得て、予定地について2ヶ所の坪掘を行ったところ、地表下20cm程で関東ローム層が現れ、削平が行われていることが明らかになった。しかし弥生式土器一個体分がまとまって出土したため、遺構が存在する可能性があり、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査の範囲は擁壁の基礎部分のみとし、北側擁壁の東半分については削平により遺構が全く存在しないため、調査対象から除外した。調査は10月8日から表土除去を行い、途中調査の中止があったが、弥生時代の竪穴住居址貼床等を確認し、11月15日発掘調査を終了した。

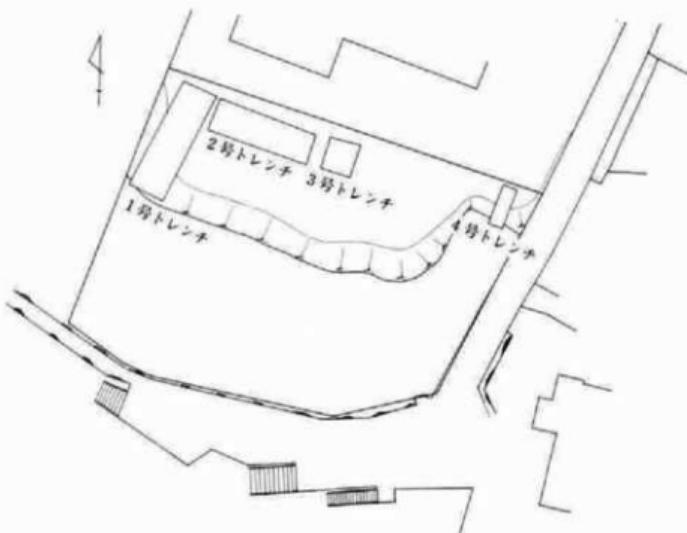


図3 調査区設定図 (400分の1)

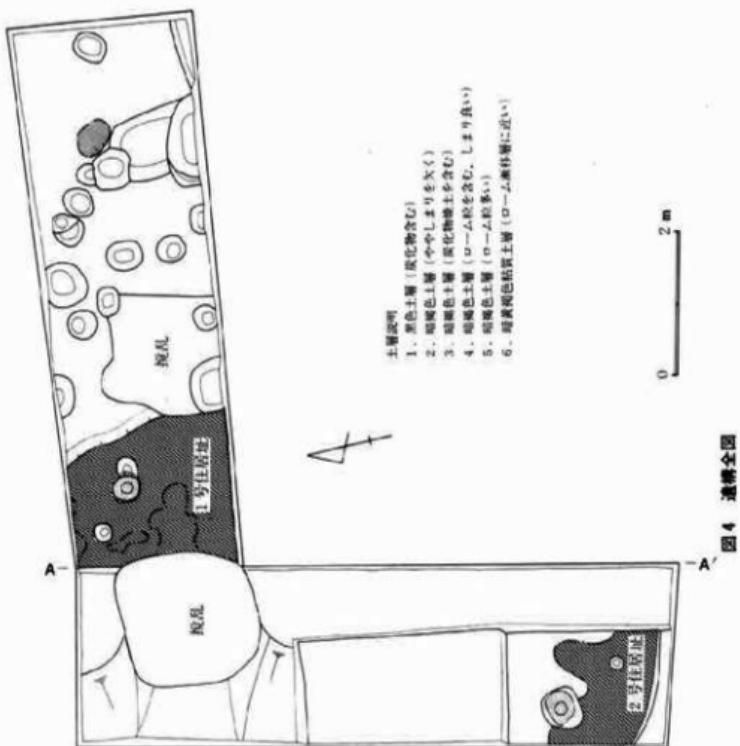


図4 連続全図

### 第三章 発見された遺構と遺物

#### 1. 1号住居址

(図5・6)

調査区北西に位置する。東西両側を削平され南北両側は共に調査区域外であるため、平面プランは不明である。覆土も床面付近まで削平されており、残存状況は良くない。

床面は根の浸食によるためかやや軟質で、貼床（黄褐色粘質土）が部分的に認められたのみである。

炉はひょうたん型で、 $62\text{cm} \times 36\text{cm}$ を測り、深さは東側8cm西側5cmである。焼土は上層に特に集中していた。

出土遺物は、1が甕、2～6は壺である。4は住居址北西部床面から5cm程浮いた状態で出土した。5は住居東側床面からやや浮いた状態で、6は東側寄りの床面から出土した。6は胴部下半のみつぶれた状態で出土しており、鉢として再利用された可能性もある。

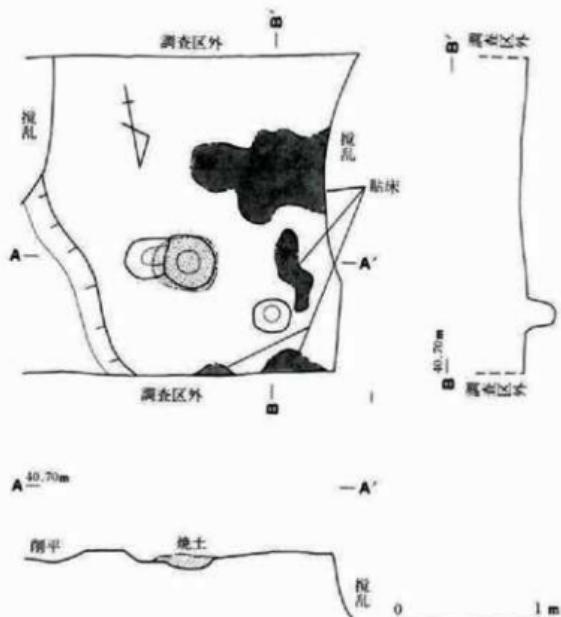


図5 1号住居址

表1 1号住居址出土遺物観察表

1	甕	法量—現存部位 口縁部破片。調整—外面一横方向ハケ、口唇部は指ナデのち棒状工具によるキサミ。内面一横方向ハケ。胎土—普通。焼成—普通。色調—淡焼褐色。備考—複合口縁
2	壺	法量—現存部位 口縁部破片。調整—外面一ハケのち口唇及び外面に網文を施す。口縁部下端に棒状工具先端による押捺。内面一ハケのち赤彩、胎土—普通。焼成—普通。色調—明黄褐色。備考—複合口縁。赤彩は外面にも施されていたと考えられる。

3	壺	法量—現存部位：胴部破片。調整—外面ハケ、のち4本1単位の櫛齒状工具による波状文と直線文を施す。内面ハケ。胎土—黒雲母多い。焼成—普通。色調—淡黄褐色。
4	壺	法量 口径15.3cm。胴部最大23.4cm。底部8.0cm。器高28.8cm。現存部位残存。調整—外面ハケ、のち4本1単位の櫛齒状工具による平行直線文を3段、その間に同じ工具による波状文。直線文の下に櫛模様文を施す。文様帯より下に粗雑なヘラみがき、内面胴部下半及び頸部に木目を弱く残すヘラナデ、胴部上半はユビによる押捺、口縁はハケのち縦文を施す。胎土—白色粒多い。焼成—やや不良。色調—暗褐色。備考—外間に一部スス付着。
5	壺	法量—胴部最大径32.8cm。底径7.4cm。現存部位：胴部等。調整—外面胴最下部指頭押捺、胴部下半横方向弱い木目を残すヘラナデ、中位は横方向ヘラナデ。胎土—密。焼成—普通。色調—淡黄褐色。
6	壺	法量—底径9.0cm。現存部位：胴部下半。調整—外面ハケ。内面ヘラナデ。胎土—やや粗い。焼成—普通。色調—淡黄褐色。備考—外間に一部スス付着。

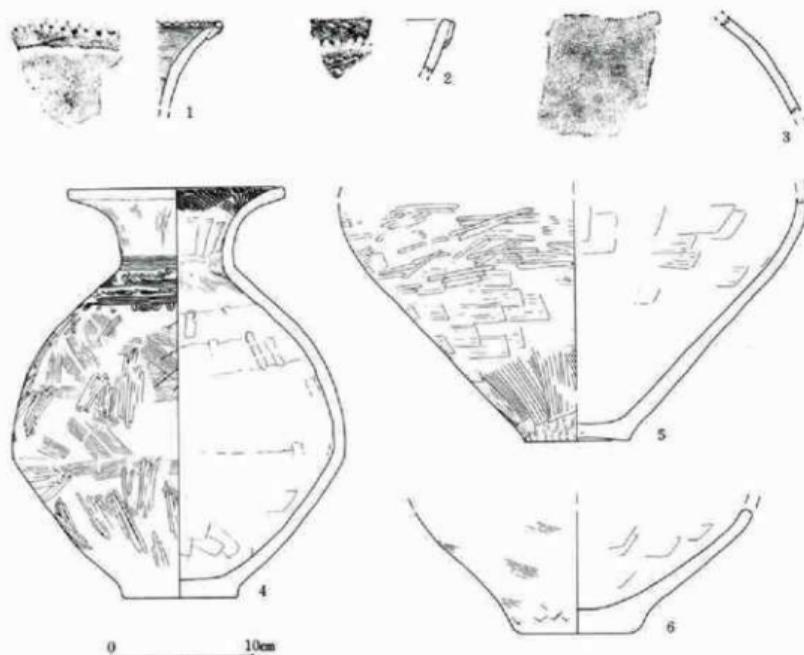


図6 1号住居址出土遺物

本住居址は残存状況が悪く、明言はできないが、出土遺物から見て、久ヶ原期と考えたい。

## 2. 2号住居址

(図7・8)

調査区東側に位置する。住居址の北と西側の大半が削平され、かつ東側は調査区域外であるため平面プランは不明である。南側壁残存高は14cmである。床面は、ほぼ平坦で、北側に向ってやや低くなっている。堅くしまっている。

炉は不整円形で、68cm×50cmを測る。焼土は、上層に集中するが全体に良く焼けている。

出土遺物は少ない。1～4は甕である。5は鉢である。1、2は南壁ピット付近、3はかの西方

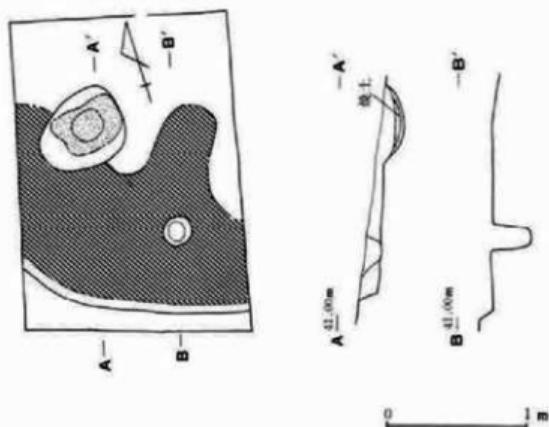


図7 2号住居址

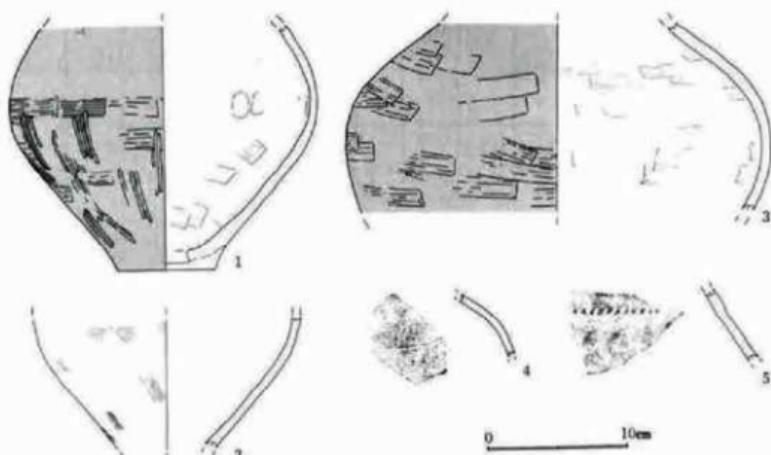


図8 2号住居址出土遺物

表2 2号住居址出土遺物観察表

1	壺	法量—胴部最大径21.9cm。底径6.9cm。現存部位 脇部下半分。調整—外面ヘラナデのち粗雑なヘラミガキ。内面ヘラナデ（一部指痕残す）。胎土—黒雲母含みやや密。焼成—普通。色調—淡橙褐色。備考—外面一部スス付着。
2	壺	法量—現存部位 脇部下位。調整—外面ハケ。内面 ハケ。胎土—石英多い。焼成—やや悪い。色調—暗褐色。
3	壺	法量—胴部最大径30.4cm。現存部位 脇部中位約1/3。調整—外面横方向弱い本目を残すヘラナデのち赤彩。内面弱い本目を残すヘラナデ。胎土—普通。焼成—普通。色調—淡橙褐色。
4	壺	法量—現存部位 脇部破片。調整—外面。ハケのち波線によって区画される羽状繩文を施す。内面 ハケ。内外面共文様帯を除き赤彩を施す。胎土—金雲母、黒雲母を含む。焼成—普通。色調—淡橙褐色。
5	鉢	法量—現存部位 口縁部付近破片。調整—外面ハケのちヘラミガキ。口縁下端に棒状工具による押捺。内面ハケのちヘラミガキ。胎土—金雲母含む。焼成—良好。色調—淡黄褐色。備考—複合口縁。

で、すべて床面からやや浮いた状態で出土した。

本住居址は、出土遺物から見て久ヶ原期か、弥生町期に比定される。

### 3. 遺構外出土遺物（図9）

1、2共にトレンチ掘削中に出土したものである。1は鉢、2は蔽石である。2の蔽石は出土位置から、弥生時代に属するものと考えたい。

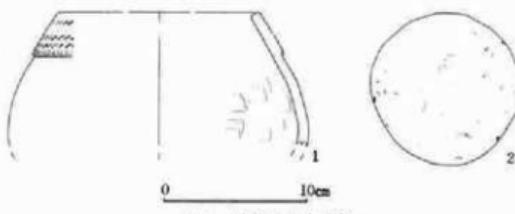


図9 遺構外出土遺物

表3 遺構外出土遺物観察表

1	鉢	法量—口径12.9cm。胴部最大径20.8cm。現存部位 脇部上半分。調整—外面ハケのち弱いヘラミガキ、のち口縁に繩文を施し、口縁部下端にヘラ状工具角による押捺を施す。脇部外面に赤彩。内面ハケのち弱いヘラミガキ。胎土—普通。焼成—普通。色調—赤橙色。備考—複合口縁。
2	蔽石	法量—全長10.6cm、幅10.6cm、厚さ10.3cm（球形に近い）。現存部位 完全。石質—安山岩。加工痕なし。使用痕 正面及び裏面中央部に敲打痕。

## 第四章 ま　と　め

本遺跡は、通称「台山」と呼ばれる丘陵の北東斜面に存在する、弥生時代～古墳時代、中世にかけての遺跡の一部である。かなり規模の大きな遺跡であると考えられるが、宅地化が早くから進み、遺跡の範囲を確定することができない。今回の調査は狭い範囲のトレンチ調査であり、遺跡の規模等を把握できる状態ではないが、住居址の残存を確認できた。こうした小規模な調査の積み重ねが、宅地化してしまった遺跡においては、その規模、性格等を解明していく重要な手段の一つであると確信している。

なお、1号住居址出土の壺形土器（図6-4）は、文様、胎土等から、外米系のものと考えられる。時期は宮ノ前期に遡るかもしれない。鎌倉市内では白山遺跡において類例が1点出土しているにすぎない。

註1 及川良彦 「弥生土器の移動と地域性—鎌倉出土の弥生土器を中心として—」青山考古第5号 1987年 青山考古学会



▲ 造跡遠景（●は調査地点を示す。北東から望む）



▲ 調査地近景（調査箇所はコンクリート施設基礎部分）



▲ 2号、3号トレンチ(手前は1号トレンチ)



▶ 1号トレンチ(手前の土器散在地は2号住居址)



▲ 2号トレーンチと1号住居址



▶ 1号住居址内遺物出土状況



弥生式土器・石器

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4

昭和62年度発掘調査報告書

発行日 昭和63年3月

編集発行 鎌倉市教育委員会

印 刷 新光印刷工業株式会社